
ソウルメイト

くうーたんたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウルメイト

【Nコード】

N7224G

【作者名】

くうーたんたん

【あらすじ】

精霊使いでありながら村を救えなかった罪で残酷な刑罰を受けたリンは奴隷商人ロイに拾われ旅に出る。様々な国を巡りソウルメイトと出逢います。ファンタジーアドベンチャーをお楽しみください。

宿命（前書き）

恋あり友情ありのアドベンチャー小説です。これからリンは様々な運命に翻弄されながら運命の相手ソウルメイトと出会います。

宿命

ハアッハアッウ…ウウ…

リンは床下で嗚咽をこらえながら敵の足音が離れていくよう念じていた。

父さん…母さん…カイ…お願い無事でいて！

ギヤアア！ゴフツ…イヤアア…

リンは思わず耳をふさいだ。

リンは精霊使いとして生まれながら何もできない自分の未熟さを呪った。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…

一体どれくらいの時間がたったのだろう床板を持ち上げ、周りの様子を伺った。「父さん！」

リンは血だらけで横たわっている父に駆け寄った。

胸には短剣が刺さりそこからおびただしいほどの血が流れている。

「しっかりして！父さん…母さんとカイは？」

父は口をパクパクさせて何かを訴えていたが力尽き、その目からは光を失った。

「父さん…死なないで僕を独りにしないでよう…ウウツ嫌だああ！」

リンは既に崩れかけた家のドアを開け放ち煙の中を号泣しながら母と弟を探し回った。

焼け野原となった村は血の臭いと火薬の臭い、そして死神の群れが覆いつくしていた。

「見ろ！精霊使いの小わっぱが生き残ってるぞ」

なんとか隠れて生き残った村人がリンを見つけ指差した。

まるで亡霊のようにユラユラとリンを取り囲む村人達の目は狂気で血走っている。

リンは怯えながら後退りした。

「お前：そこで何をしてる！自分だけ逃げようと思ってたのか？精霊使いのくせにどうして戦わなかったんだ！皆、村を救うために死んでいった：なぜだ？なぜ逃げた！？」

リンはガタガタ震えながら叫んだ。

「だって：だって怖かったんだ。僕：精霊使いなんかじゃない！ただ精霊達と話せるだけだ。何も出来ない：僕には村を助けるなんてそんな力ないんだよ！」

まだ10歳にしかならないリンに大人達は罪をすべてなすりつけようとしていた。

「みんな同じじゃないか：みんなだって隠れてたんだろう？どうして僕は逃げちゃダメなんだよう」村人の一人が答えた。

「リン：お前は精霊使いなんだ。神から選ばれた特別な存在だ。他の人間とは訳が違う。村人を救えるのはお前だけだった」

リンは首をふった。

「僕はこんな力いらない！神様どうして：どうしてこんな僕を選んだんですか？こんな意気地無しのを僕をウッアアア：」泣きじゃくるリンを村人達は縛りあげた。

「村の掟に従ってもらおうぞリン、誰か刀を！」

小さな子供がリンの父親に刺さっていた短刀を引き抜いてきた。

その短刀には昇り龍の柄がついており目の部分には紫水晶が嵌め込まれていた。

リンが最後に見たものはその龍となってしまった。

村人はリンを抑えこみ、両目をその短刀でえぐり出した。

「ギャアア！：」

痛みで気を失ったリンを村人は森の奥に捨てて来た。

「リン：お前は村を追放された。ここで死ぬのを待つか：はたまた無残な姿で生き残るか：お前を選んだ神にまかせるとしよう」

村人達はそう行って去っていった。

リンは両目に手を当てた。ポツカリと空いた空洞からは生臭い血が

まるで涙のように流れ落ちている。

「僕：このまま死んじゃうのかな？：それもいいや、父さん母さんに会えるもの。カイは？誰か助けてくれているといいな。まだ赤ちゃんだもの天国に行くには早すぎるよ」

リンは痛みでうめきながらそうつぶやいた。村では死神達が次々とカマをふりおろし魂を天に返すため、忙しく働いていた。

その中の一人が森の方でも魂が離れていく気配を感じ、リンを見つけて近づいた。

「アヤヤヤ、こんな小さな子供が可哀想になあ。今らしくしてやるからな。ヨイショッと」

死神がカマを振り上げたその瞬間リンは気配を感じて声をあげた。

「誰？そこにいるのは誰なの？」

死神はビクツとその手を止めた。

「こりゃあおったまげた。あんた俺が見えるのかい？」

リンは首をふった。

「見えないよ：さっき目玉をくり貫かれちゃったから：感じるだけだ。もしかして：死神さんなの？僕を連れに来てくれたんだね。よかった独りぼっちで寂しかったんだ：早く連れて行って。楽になりたい：もう楽になりたいんだ」

死神はカマを置いて小さくうずくまるリンを見つめた。

「お前：死にたいのか？」

リンはうなずいた。

「僕のせいなんだ：僕がみんなを守れなかったからこんなことに：。精霊使いのくせに真っ先に逃げた。怖くて怖くてどうしようもなかった：死んで当然だ。殺してよ：そうすれば楽になる」

死神は驚いた。

「お前：精霊使いなのか？：そうか、そうなんだな。あのな：お前はまだ子供だ。出来ることにも限界ってもんがある。まあやつちまったことはどうしようもねえし：だけどよ、死んで償えるってもん

でもねえべさ。まだお前は生きる望みもある、俺がカマをふり下ろさない限りはな。俺はお前の命が惜しくなったぜ。お前、名前はなんていうんだ？」

「…リン」

「リンか、じゃあリン！お前もう少し生きてみる。その罪の意識があるかぎり死んでもあの世にはいけないぞ。どうせこの世をさ迷うなら命はあったほうがいいにこしたことはないからな。待ってな！今、助けを呼んでやる」

死神はフワリとどこかへ飛んでいってしまった。

「僕のことなんか放っておいてよ…」

りんは力なく叫んだがすぐに意識は遠くなっていってしまった。

奴隷商人のロイ

リンは夢の中で鈴の音を聞いた。

チリリリ：チリリリ：その音は段々大きくなっていく。

「おい！おい小僧、起きろ！なんだあ：死んでるのか？」その男はリンを足で仰向けに転がした。

「アチャ／＼こりゃあ売り物にはならねえな。死につばぐれのしかも男のガキじゃなあ。ウワツこいつ目玉がねえよ。一体どうしたってんだ。酷いことしやがるぜ：せめてものなさけだ、テレサ水を飲ませてやれ」

テレサと呼ばれた女の子は見事な金髪でスミレ色の瞳をもつ美少女であった。

「さあ、これを…」

テレサはリンの頭を膝に乗せ水筒の水を飲ませた。

「ゴホッ：ゴフッ：ゴクゴク」

リンはその柔らかく温かい感触に安らぎを感じ声をかけた。

「ありがとうございます…」

テレサは嬉しそうに声をあげた。

「ロイさん！気がつきましたわ」

ロイはリンの頬に血の気が戻ってきたのを確認し、うなずいた。

「傷は深いがなんとかかなりそうだ。テレサ、薬を塗ってやれ。ああその前に酒だ！消毒せんとな」

ロイは酒を口に含むと、リンの顔に向かってプップツと勢いよく吹きかけた。

「これでよし！少し痛むが我慢しろよ」

テレサは手際よく薬を塗り込み、リンの目を布で覆った。

「これで大丈夫ですわ」

リンはテレサの手を握り感謝の意を示した。テレサはその手をポンポン叩き、にっこりと微笑んだ。

「さて、こいつをどうするか…お前さん名前は？」

「リンです…」

「なんか特技はあるかい？」

「精霊使いです…とはいってもまだ駆け出しで精霊と話をすることくらいしかできませんが…」

ロイはその話を聞いて目の色が変わった。

「な、なんだって！？精霊使いだと？そりゃあ本当かい…だとしたらえらいめっけもんだぞこりゃあ。しかし…なんでお前さんこんな目にあっただ？精霊使いならきつとみんなから崇め奉られて大事にされてたんだろうに」

リンは苦し気に横を向いた。

「なんだか色々と訳がありそうだな…そういやあここを通ってくる途中で焼き討ちにあった村を見たぞ…あんたその村人かい？」

リンは口を閉ざしたまま何も喋らなかった。

「まあいいさ…誰にでも喋りたくないことはあらあな。どうする、俺たちじゃあ旅の途中だがあんたもくるかい？俺は奴隷商人のロイってもんだ。俺は確かに奴隷商人だが、悪いヤツじゃねえよ。変なことには絶対売ったりしねえ。身元のしっかりしたところにちゃんと世話してやる。あんたが精霊使いなら欲しい国や街はいくらでもあるだろう。きつとどこでも重宝されるさ。どうする？一緒にくるか？」

リンはうなずいた。

もう帰るところも失ってしまった…僕はここを離れたい。そして母さんや弟を探そう。きつと敵に連れ去られたに決まってる…

「お願いします。僕を買ってくれる国を探して下さい！」

ロイはドンと胸を叩いた。

「おおよ、そうこなくっちゃあ！このロイ様に任せておけ。立派な大国に売り付けてやるからなハッハッハ」

ロイはリンをラクダに乗せてやり、テレサに手綱を引かせると早速旅支度にとりかかった。

「この森を抜けると街がある。そこで休憩するでしょう。さあ出発だ！」

一行は薄暗い森の中をゆっくりと進んでいった。

「アリヤ！あの小僧はどこだ？せっかく俺が水の精霊を呼んできたつというのによろ……」水の精霊は機嫌悪そうに死神を睨んだ。

「ちよつと！イケメンの精霊使いなんていないじゃないのよ。まったく忙しいのにからかうのはやめてちよくだい！このツケは大きいわよ。覚えておいてね！」

死神は困った顔で

「おつかしいなあ。さっきまでここにいたんですけどねえ。どこに行ったのやら……スンマセンあねさん！」

水の精霊はぷりぷり怒りながら消えてしまった。

「まったくあの坊主どこいったんだ？でもここに居ないってことはなんとか助かったようだ。もう死にたいなんて言うなよ！精霊使いとして生まれたからには使命を果たさなくちゃ。がんばれよ小僧……」

その頃リン達は街の入り口で役人に通行手形を見せていた。「私は奴隷商人のロイと申すもの、奴隷はこの二人です」

役人は通行手形に目を通すと、テレサを見て

「ほう……美しい娘だな。もう買い手は決まっておるのか？」と聞いてきた。

「はい、月の城のルイザ様のところでございます」

役人は成る程と納得したようで

「そっちの少年は？」とリンを指さした。

「リンと申しまして精霊使いです。どこか大国に世話してやろうと思っております」

役人は驚いた表情でリンを見た。

「なんと！精霊使いとは：こんな小さな少年が？噂には聞いていたがこの目で見たのは初めてだ！さあどうぞお通りください」

リンはロイの言っていた月の城が気になっていた。

テレサ：もう買い手が決まっていたのか。

リンは複雑な気持ちでラクダに揺られていた。

盗人レオ

街に入ると沢山の店が狭い路地にもビッシリと建ち並び、商人の客を呼び込む声や子供達の歓声があちこちから聞こえてきて大変な賑わいをみせていた。

リンは目は見えなくても匂いや音で周りの気配を感じとり、この街の豊かさに好奇心がうずいた。

「テレサ、ここがサンガなの？」

テレサはラクダの上にいるリンを見上げて答えた。

「ええそうよ。すごいわねー！まるでお祭りみたいだわ」

ロイは二人に

「迷子になるなよ。ここは表通りで華やかだが、裏通りは物騒なやからが沢山うろついている。俺にとってはお前ら二人は大事な商品だ。くれぐれも危ないことはしてくるなよ。これから宿屋に行くからそこで待っている。俺はこの奴隷市場でめばしいヤツを見つけてくるからな。マッドコロシウムからの依頼があつて、誰か見込みのありそうな坊主を探してこなくてはならん」

リンはテレサにたずねた。

「マッドコロシウムって？」

「武道場のことよ。戦士達が戦って観客に見せるところ」

「ふうん。じゃあロイが選んだ子は可哀想だな。一生戦いから逃れられないじゃないか」

「そうね。でも強い戦士なら国民的スターだわ。貴族の称号も貰えるチャンスがあるし、もちろん弱くて死んじやったら終わりだけどみんないろんな宿命を背負って生きてるんだな…」

俺ばかり不幸だなんて思っちゃダメだ…

「よくし着いたぞ！」宿屋は二階建てで、一階部分は居酒屋になっていた。

ギターの音や女達のけたたましい笑い声が聞こえてくる。

ロイは夕飯代の金を置いて、奴隷市場に出かけて行った。

「さあ、お前達ここで大人しく待っているよ。お前達の仲間になるヤツを探してくるからな」

テレサはロイの足音が遠ざかるのを確認してリンにの腕をつかんだ。

「リン、さあ行きましょう！」

「ええっ！行くってどこに？ロイさんにここで待っているって言われただろう」

テレサはニカッと笑い

「何言ってるのよ。せっかく街に来たのにこんなところでじっとしててもつまらないじゃないの！ロイの後をつけましょう。奴隷市場をのぞいてきましょうよ。戦士になれそうな子を選んでくるんでしょう？どんな子を選ぶか気にならない？」

「……」

「なによ意気地無し！じゃあいいわ、私一人で行ってくる」

リンはテレサを一人で行かせるのも気がひけるので仕方なく一緒についていくことにした。

二人は窓から屋根伝いに下に降り、酒瓶を片手に歩いているロイの後からこっそりついて行った。

「リンあなた…目が見えてるの？凄いわね、全然つまづかないなんて」

リンは微笑んだ。

「この包帯を見てよ。見えるわけないだろう？感じるだけさ。気配で大体感じはつかめる」

「ふうん。そういうもんなの？リンは精霊使いだものね…やっぱり普通の人とは違うのね」

リンは苦しそうに口もとを歪めたが

「ほら、ロイが行っちゃうよ！」

とその話題からは逃げた。

ロイは表通りのはずれにある高い塀に囲まれた建物に入って行った。

「ああん、どうするリン？」

リンはテレサに裏口に回るよう指示した。

「ダメだわリン、後ろも壁で囲まれてる。

リンはおもむろに地面にしゃがみこみ耳をあてた。

「テレサ、どこかに地下室に通じる通気孔があるはずだ。探してみ
て！」

テレサは地面をぐるぐる見て回った。

「あったわ！このふたを外せば中に入れそうよ。」

テレサはふたを開け、スカートをたくしあげるとスルスルとその穴
に入ってしまった。

「リン、脚を出して！引っ張ってあげる」

テレサはリンの不安そうな顔などお構い無しにグイグイ脚を引っ張
りこんだ。

「ヨイショッと！さあ、中に潜入したわよ。どうやら地下室みたい
ね」

暗闇の中で奥の方から鎖が動く音が鈍く

「ガシャツガシャ…」と聞こえてくる。

松明の燃えるいぶくさい匂いが鼻を刺激した。

「奥から沢山の人の気配がするよテレサ…」

「シィッ！声が大きいわよ。よし、あっちに行ってみましょう」

二人はまるで洞窟のようなその地下室を忍び足で進んで行った。

二人はその光景に息をのんだ。

壁伝いに檻が並び、そこには男や女、老人そして子供までが閉じ込
められていた。

皆、薄汚い衣をまとい痩せた手足をさらしていた。

あきらめきった沢山の冷めた目が二人に降り注いでいる。

そんな静けさを破るように一番奥の檻から叫び声が聞こえてきた。

「ちっきしょう！出しやがれ！おい誰かいねーのか？こんちくし

よう：覚えてやがれ。ここからでたら絶対お前らみんな俺様がやつけてやる！クッソー！」

リンとテレサは思わず顔を見合わせた。

聖獣玄武

「ずいぶん威勢のいい子ね。歳は私達と同じくらいかしら？やっぱ今日の競りにかけられるんでしょうね」

テレサは気の毒そうに暴れる少年を見ていた。

「なんとか助けられないかな？」

リンがそう言っているとテレサは首をふった。

「無理よ！檻も頑丈だし足に鎖も巻かれてるのよ。どうしようもないわ」

少年は諦めたのか檻の中にどっかりと座りこんだ。

「こうなったら仕方ねえな」

少年は手を合わせ何やらつぶやいている。

「雨を司る北の聖獣玄武、出でよ！」

「何やってるのかしら。ん？何か出てきたわよ。あれは…亀？そうよ小っちゃなミドリガメだわ。あんなの出してどうするつもりかしら？」

「鎖に噛みついてるわよ、あの亀！」

二人は鎖にかぶりつく亀に目が釘付けになった。

リンはテレサに

「ホントに亀なの？間違いない？」と思わず聞き返した。

「甲羅背負ってるし間違いないわよ。亀は亀でもスッポンかしら？凶暴そうなもの」

二人がそんなやりとりをしている間にも小さな亀はガジガジ鎖をかじり続け、ついにはパキンと噛みきってしまった。

「オーシ玄武よくやった！さあこんなどこサッサとおいとましようぜ」

玄武と呼ばれた亀は少年の頭の上にちょこんとおさまっている。

「ウフフ何あれ、河童みたい笑っちゃうわアハハハ」

少年はテレサの笑い声に気付いた。

「誰だ!？」

テレサはしまった!とばかりに口を手で押さえたが、
見付かったのなら仕方ないとばかりに少年のいる檻の前に出て行った。

「お前、誰だ？」

「あんたこそ誰よ? まず聞く前に自分から名乗りなさい!」

少年は

「生意気な女だなあ」と呟いたが、それをもっともだと思い先に名乗ることにした。

「俺は聖獣使いのレオだ。それでこっちは玄武。さあ今度はお前達の番だ」

「私はテレサ、彼は精霊使いのリンよ」

レオはヒュウツと口笛をふき

「スゲエや精霊使いか、初めてみたぜ。ところであんた何で目隠しなんてしてるのさ。それじゃ何も見えないだろう?」とたずねてきた。

いいよどむリンを庇うようにテレサが代わりに答えた。

「彼は怪我してるのよ。でも他の感覚で補ってるから大丈夫。そうでしょう? リン」

リンは微笑みながらうなずいた。

「そうだな、なんせ精霊使い様なんだもんな。じゃあさ早速だけど俺をここから出してくれない? 見ての通り玄武は疲れ切って眠っちゃったし、精霊使ってパパツと頼むよ!」

「ごめん: 僕が出来るのはせいぜい精霊達と話をする程度なんだ。僕みたいな若輩者の言うことを聞いてくれる精霊はいないよ」

レオはそれを聞いてニヤニヤ笑った。

「な〜んだその程度かよ。俺も聖獣使いとかいったってついて来てくれたのはこの玄武だけだからな。ま、これからってことで: しかし参ったな。このままじゃ俺、売り飛ばされちまうぜ」

テレサはしばらく考えていたが仕方ないとばかりにレオに耳打ちした。

「こうなったら諦めて売られるしかないわね。でもどうせ買われるのならロイに買って貰いなさいな。あの人は価値がある人間は大切に扱う人よ。それにはあなたが何らかの力があるところを見せないと：何かセールスポイントはあるの？」

レオはクフフとほくそ笑み

「あるある。俺と玄武は最強コンビさ。どんな物でも盗んでみせるぜ。ま、今回はちょっとヘマして捕まっちゃったけどよ：俺を買ってくれよ。後悔はさせねえぜ！」

テレサはリンにたずねた。

「リン、どう思う？」リンは首を横にふってため息をついた。

「そんなのダメだよ。こうやって捕まっちゃあセールスポイントにはならないさ。君は聖獣使いじゃないか？そこをアピールしたらどう？」

レオはお手上げポーズで

「玄武は気分屋でさ。きが向かなければ何にもしちゃくれないぜ」
テレサはそれを聞いて呆れ顔だ。

「そんなのどっちが飼われてるかわかったもんじゃないわね：だいたいその亀本当に聖獣玄武なの？スッポンにしか見えないんだけど」

「な、なんだとう！」

リンは怪しい雲ゆきにおろおろしている。

レオは頭の上でうたた寝している玄武を掴み、テレサの前につきだした。

「みろ！凄い苔だろう？どんだけ長生きしてると思う？」

テレサはフフンと鼻で笑い

「そんなのその亀が玄武だって証明にはならないわ。私達が認めるのはその亀の歯がスッゴク丈夫ってことくらいなもの！リン行きましよう。別に助けるほどの価値はなさそうよ」

テレサはサツサとさっきの通気孔から外に出て行ってしまった。

リンは仕方なさそうにレオに

「ごめんね。なんとか力になりたいけど…」と言い繕った。

レオはケツと唾を吐き

「お前らなんかに助けてもらわなくても自分の身くらい自分でなんとかするさ。お前みたいに女の子に守ってもらわなくちゃ何にもできないヤツとは違うからな！あばよ、この意気地無し野郎！」と言
い放った。

リンは何も言い返すことが出来ずにスグスグと引き下がってテレサのもとに戻って行った。

レオの御主人様

二人が表に出ると

「ドーン！ドーン！」と大きなドラの音が聞こえた。

リンはテレサに何が始まるのかたずねた。

「奴隷の競りが始まる合図よ。ロイが誰を競り落とすか見に行きましようよ！」

テレサはリンの手を引っ張るとズンズン人混みの中に入って行った。ロイは舞台の上に並ぶ奴隷達に釘付けで全くこちらに気付く様子はない。

舞台の上には老若男女が一斉に並び人々の好奇の目に晒されていた。まずは屈強そうなガタイのしっかりした若い男の競りが始まった。次々に値段がつり上がっていく。

リンはその様子を見て複雑な表情を浮かべた。

「僕のいた村には奴隷なんていなかった。みんな平等で助け合いながら仲良く暮らしていたよ。だから奴隷っていわれてもなんだかピンとこないんだ。もし…もしも買い手がつかなかった場合どうなるの？」

テレサは舞台を眺めたまま

「そういう場合は大抵棄てられちゃうわね。ようは釈放よ。だって買い手がいないのに養っても損するだけでしょう？ けど…こんな世の中ですもの浮浪者でいるより奴隷になって養われていた方が食べ物も住むところもあって幸せよね。だからみんな自分から奴隷市場に来るのよ。誰か私を買ってちょうだい！ ってね。たまに未成年の犯罪者も売りに出されるわ。野放しだとまた犯罪者になっちゃう。だから奴隷にして誰かに監督してもおうってわけ」

リンはそれを聞いてさっきのレオはどうみても自分の意志であるそこ

にいたのではないと思った。

あの鎖：レオは奴隷になりたくないんだな。誰も買い手がつかないけれど……

リンの心配をよそに舞台の袖からレオが売人に引っ張られて出てきた。

頭の上には相変わらず玄武がどっかりと座っている。

「放せよ！痛いってんだ。掴むなよ」

レオは売人の手をふりほどくと

「お前らなんかに買われてたまるかってんだ。俺は誰かの世話にならなくても自分で生きていけらあ。ほっといてくれ！」と叫び、その場に座りこんでしまった。

会場の人々はその様子にクスクス笑ったり、眉をひそめて呆れていたりでレオの狙い通り誰も買い手はつかないだろうとリンとテレサはその様子を見守っていた。

ところが、小さな手がまっすぐにあがっているではないか！

「クラレンス様！今日はマッドコロシアムの戦士を選びに来たのですよ。あんな少年を買ってどうするつもりですか！？」

クラレンスと呼ばれた少年は仕立てのよいスーツを着込み、貴族の印である錫杖でコツコツ床をつつきながら守役の男に言った。

「僕は別にあの少年に興味はない。だがあの亀が欲しいんだ。いいだろう？どうせ誰も手をあげやしないよ。僕の小遣いで買えるさ」

守役の男は困った顔で小さな主人をたしなめようと口をひらこうとしたその瞬間、会場からざわめきの声が聞こえた。

もう一人手を上げている人物がいるではないか。

クラレンスは驚いた顔でその主を見ると、薄汚れた衣をまとい長い髭をたくわえた老人であった。

挑戦的に笑みを浮かべ、クラレンスに視線を送ってきた。

「何者だ？アイツ僕と競りあおうというのか？面白い！のってやる

うじゃないか」クラレンスは300バレン!と声をあげた。すると老人は500バレン!とすぐに声をあげた。

「ハハハどうやら本気で僕と競り合うつもりのような。さて、どこまでついてこれるか楽しみだ」

クラレンスはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

リンとテレサは思わぬ成り行きに狼狽えた。

「レオ：まさか買い手がつくとはね。やっぱりロイに買うよう勧めるべきだったかな?」リンがそういうと、テレサはお手上げポーズで

「ダメよ無理無理!もうすでに500バレンなのよ。ロイがそんなにあの子にお金を出すとは思えないわ：あの二人、一体レオのどこに惹かれて買う気になったのかしら?理解不能だわ!」

とため息をつきながらリンに話した。

その間にも老人と子供の競り合いは続いていた。

「600バレン!」

「800バレン!」

「850!」

「1000!」

クラレンスがその声をあげたが最後、さすがにそのあとは老人も諦めたのか声はあがらなかった。競り終了の合図のドラがドーンとなり、レオはクラレンスに競り落とされた。

クラレンスはほくそ笑み、老人の方に視線を送ったが既に姿を消していた。

「クラレンス様!1000バレンも使ってしまったてはもう戦士を買うことはできませんよ!父上にどうお話になるつもりですか?」

クラレンスはチツと舌打ちして

「うるさいぞケイン!父上にどう話すかは僕に任せておけ。それよりあの少年がおとなしくついてくるとは思えない。手錠を用意して

おけ。いいな！
と言いつた。」

回り出した運命の齒車

レオは売人からケインに引き渡された。

「お前の名は？」

クラレンスは、レオを冷たい眼差しで眺めながらたずねた。

レオはクラレンスを憎々しげに睨み付け、答えようとしない。

その様子にしぶれを切らしたカインがパシンと頬をぶった。

「答える！この方がお前の御主人様だ」

レオはケインの手を払いのけ叫んだ。

「へん！そんなのごめんだね。お前が俺の御主人だと？笑わせるぜ！金の力でなんでも出来ると思ったら大間違いだ。お前に飼われるなんて死んでもごめんだぜアツカンベー！」ケインはレオの襟首を掴んだ。

「こいつ！もっと痛い目にあわなければわからないらしいな。」

クラレンス様、しばらく地下牢にでも閉じ込めて自分の立場というものを見せてやった方が良さそうですね」

クラレンスはクスリと微笑み

「ケインおとなげないぞ。そう脅かすな。僕はこいつに用などない。この亀だけあればいい。こいつは逃がしてやれ」とケインに指示した。

「！：クラレンス様、この亀のために1000バレンもお支払いになったのですか？」

クラレンスはケインをジロリとみると

「悪いか？父上の汚い金などどんどん使ってやったほうが世の中のためだ：そう思わないか？」

ケインはフゥとため息をつく、レオにその頭の上に乗っている亀を渡すよう言った。「嫌だね！玄武はただの亀じゃない。聖獣なんだぞ。オレは玄武に選ばれたんだ。人間が決めることじゃないんだ

よ！わかんねえかな」

クラレンスは驚きの表情を浮かべた。

「この亀が玄武だと？」

クラレンスはまじまじと小さな亀を見た。

「すごい苔だな：そう言われるとそんな気も：」

ケインは眉をしかめ

「そんなの嘘に決まっていますよ！亀を渡したくないための言い訳でしょう」

と言い捨てた。

クラレンスはおもむろに玄武を掴んだ。

すると、なんと玄武は金色に輝いたと思うと一瞬にして姿を消してしまった。

「ああっ！？」

叫び声をあげる二人をフフンと鼻で笑ったレオにクラレンスは詰め寄った。

「おい！なんで消えたんだ？」

レオはさも嬉しそうに

「そりゃあ決まってる。お前が嫌いなんだから」とシラッと答えた。

クラレンスはレオに向かって

「いいか！お前は僕のものだ。だからお前の亀も僕のものだってことを覚えておけよ！」

といい放ち、レオの両手にガチャリと手錠をかけた。

「さあ、行こうケイン。用事は済んだ」

「コロシウムに出す戦士はどうするつもりですか？」

ケインの問いに笑いながらクラレンスは答えた。

「もちろんコイツを出すのさ。なんせ聖獣使いだ。もしあの亀が本当に玄武なら優勝間違いなしだろう？」

ケインはもう何を言っても無駄だと悟りレオを馬車の後ろに乗せた。
「おい！どこに連れていく気だ？」

「もちろん僕の屋敷だ。お前は戦士だからな丁重にもてなしてやる。優勝すればお前も貴族の仲間入りだぞ、負ければ惨めな死が待っているだけだ：シュバイツァー家の名誉がかかっているんだ。恥はかせるな」

「勝手なことをいいやがって！地獄に堕ちろ、このクソガキ！」

ケインは子守りほど大変な仕事はないなあ：とつくづく感じた。そして先程の競りを思い出していた。

あの老人は一体…？

やはりあの亀は本物なのか？

でなければあんな大金を積むはずがない。

だとしたら：逆に安い買い物だったかもしれないな。

なんにしてもコロシウムに出す前に正体を暴いておく必要があるだろうだ…。

ケインの思惑を知ってか知らずか、クラレンスはスヤスヤ眠ってしまった。

ケインは目を細めてクラレンスの寝顔を見つめた。

この方も気の毒な子供だ：まだ母親に甘えたい年頃だろうに。

産みの親で正室のマリア様が亡くなってからは側室ルイザとその息子ライナスの勢力におされ気味だ。

我々側近がしっかりお守りせねば！

ケインは後ろの座席でイビキをかいているレオのあどけない顔を見て、胸が傷んだ。

この子も独りぼっちな…。

クラレンス様のよい慰めとなってくれば良いが…。

ケインが想いに耽っている間に馬車はシュバイツァー家の門を潜っていた。

遠くの丘に白い城が見えてきた。

「クラレンス様、もうすぐ城に着きますよ」

クラレンスはハッと我に返り、急いで後ろを振り返った。

レオはまだグウグウ寝ている。

クラレンスは呆れた顔でレオを見た。

「コイツ：大したもんだな。手錠されてて眠れるなんて、なかなか胆が座ってる。そう思わないか？ ケイン」

ケインも思わず笑みがこぼれた。

「そうですね。この子はけっこうな大物かもしれませんよ」

レオはこれからどんな運命が待っているかもしらず、夢の中をさ迷っていた。

偽物の母

「起きろ！着いたぞ」レオはケインの声でやっと目を覚ました。

「うおお！すげえ…」馬車から降りると、メイド達がずらりと並びクラレンス達を出迎えていた。

「お帰りなさいませ。お父上がお待ちですよ」

クラレンスはシュバイツァー家の執事ハロルドに渋い顔を向けると「わかったわかった！まずは少し休ませてくれ、長い間馬車に揺られて少々疲れた」

ハロルドはうなずき

「バスルームの準備が出来ております。おはいりになられますか？」とたずねた。

クラレンスはレオを指差して

「僕よりアイツを風呂に入れたほうがいいな。ずいぶん汚れている。ハロルド、コロシアムの戦士を丁重にもてなしてやってくれ。頼むぞ！後で父上にも引き合わせねばならん。それなりの支度をさせろ。いいな？」

ハロルドはキョトンとした顔でケインに視線を送った。

ケインは微かにうなずきハロルドの問いに答えた。

「さようですか。わかりました。わたくしはシュバイツァー家の執事、ハロルドでございます。失礼ですがお名前は？」

レオはハロルドの丁寧な態度に素直に応えた。

「俺はレオ！よろしくな、オッチャン」

「ホホッ！元気のよいぼっちゃんですね。さあ、お疲れでしょう。お部屋でゆっくりおやすみください」

「俺、腹減ったよ。なんかくいもんあるかい？」

ハロルドは楽しげに

「はい、なんでもございますよ。何をご所望ですか？」

レオは飛び上がった喜び

「じゃあ：じゃあさ！ケーキとかある？」

「ごさいますとも。すぐにお持ちしましょう」

レオは満面の笑みでハロルドと階段をあがっていった。

「クラレンス様、カーチス様は外出しておられますが晚餐までにはおもどりにられます」

「フン相変わらずふらふらしてるようだな。部屋に戻るぞ！ローザンヌを呼んでおけ」

ケインは仕方なさそうに返事をした。

「：はい。ですがクラレンス様：ローザンヌは奴隷なのですよ。特別あつかいはあの者にとってもかえって禍になるということをお忘れないよう」

クラレンスはケインの言葉など聞いていない様子でスタスタと自分の居室に向かっていった。

ドラを開けると、バルコニーに腰掛けた美しい女が目飛び込んできた。

クラレンスは急いで駆け寄り、その膝もとにしがみついた。

「母様、今戻ったよ！」

ローザンヌはクラレンスの頭を撫でてやり、優しく声をかけた。

「まあ、どこに行っていたの？心配しましたよ」

「ごめんなさい。でも、もう心配ないよ。ちゃんと勤めを果たしてきたんだ。立派な戦士を見つけたよ！絶対優勝して母様に新しいお城をプレゼントするからね」

ローザンヌは愛しげにクラレンスを見詰め

「私は何もいませんよ。それより、いつも私のそばにいてちょうだい。あなたの姿が見えないと母様は心配でたまらないわ」

クラレンスは小さくうなずいた。

「わかったよ。ごめんね母様」

「いい子ね。リン大好きよ」

クラレンスはその言葉を哀しい気持ちで聞いた。

その時、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「クラレンス様、ケインです」

クラレンスは慌ててローザンヌの膝から離れた。

「なんだ？ 入れ！」

「マッドコロシムのエントリー用紙です。：クラレンス様、本気であの少年を出すつもりですか？」

「もちろんだ！ なんだ不満なのか？」

ケインは複雑な表情を浮かべた。

「正直申しまして私はあの子が本当に聖獣使いなのか疑問に思っています：そこでご相談なのですが、試しに誰かと試合させてみてはいかがでしょうか？」

クラレンスはその提案に興味を示した。

「うん：いい考えだ。だが相手はどうする？」

「このケインにお任せください。私が探して参ります」

クラレンスはうなずいた。

「わかった。ではそうしてくれ」

その頃リン達はロイの競りに釘付けになっていた。

「ロイったら絶対引き下がないつもりね！ もう1000バレン超えたわよ。相手は貴族じゃない、勝てっこないわよ」

リンはロイが競り落とそうとしている男の姿は見えないが、そのオーラは感じとることが出来た。

なんで奴隷でいるんだろう？

そんな必要ないだろうに：かなりの剣の使い手のはず：この靈気は

相当なものだ。

一体何人殺めてきたのやら：

リンはそら恐ろしくなり鳥肌がたってきた。

「テレサ：あいつは危険だよ。僕にはわかるんだ：とてもロイの手に負えるヤツじゃないよ」

テレサはリンの背中をバシンと叩き

「バカね！それぐらいのヤツでなきゃあマッドコロシムで勝てないわよ。ロイはバラカン公爵に売り付けるつもりでいるわ。だったらあれぐらいでなくちゃね！でもどうかしら？むこうも相当な金持ちらしいわよ。どっちが勝つか見物よね？」

リンはテレサの言葉に納得したのか黙りこんでしまった。

実はリンはレオのことを考えていたのだった。

レオ：また逢えるだろうか？

リンを競り落としたのはどうやら地方の貴族らしい。

また逢いたいな。レオ：どうかそれまで無事でいろよ！

リンは心の中でそう祈った。

剣士セオドア

競りは中々決着がつかず、金額はどんどん上がっていった。

「1600バレン！」

「1800！」

会場の人々からオオツと感嘆の声があがった。

「ねえリン、ロイだったらこのままじゃ全財産使っちゃいそうよ！心配だわ…声かけてきましようよ」

テレサはそう言うのと、リンの手を引っ張り人混みをかきわけロイのそばに行った。

「ロイさん、ロイさんたら！」

テレサはロイの服を引っ張った。

「アッ！お前達、あれほど部屋にいろと言ったのにダメじゃないか。この辺は物騒だっていうのにまったくもう…仕方ない、今はそれどころじゃないからな。絶対アイツを競り落としてやる。見てろよ！」

ロイは引き下がる気は全くないようだ。

テレサはロイに忠告した。

「ロイさんたら！相手を見たの？あの錫杖…かなり身分の高い貴族よ。きつと凄い値段になるわ…大丈夫なの？」

ロイは舞台にいるスラリと背の高い、巨大な剣を背負っている男を指差した。

「あの剣を見ろ！あの剣はジャガル族が作ったものだ。あの剣はただの剣じゃないぞ！ジャガル族が最高の剣士と認めた者にしか渡さない幻の剣なんだ。あの男ならバラカン公爵はいくらでも金を出す！絶対に損はないさ」

リンとテレサは舞台にいる男を改めて見た。銀の髪をたなびかせ、緑色の瞳で今の状況をまるで楽しんでいるかのように微笑んでいた。またむこうの貴族が手を挙げて

「2000バレン！」と声をあげた。

ロイはニヤリと笑い

「フフッやるじゃないか！だが、このロイ様もまだまだいけますよ」
「2200バレン！」

その時、舞台の男が口を開いた。

「そこまでしておけ！俺は貴族は好かん。よってその商人の世話になろう」

その言葉に会場は騒然とした。

ロイは飛び上がらんばかりの喜びようだ。

リンとテレサはエエッ！？と声をあげた。

「ちよつと。まずいんじゃないの？貴族がキライツて言ったって、ロイが売ろうと思ってる相手だって貴族じゃないさ！」

ロイはテレサにシイツと口止めすると

「大丈夫だ、貴族には売らん！王族に売ることにするよ」と囁いた。

「そんなのあり〜？」

テレサは思わず叫んだ。

男は舞台から降りてロイの前に立った。

「いやあ。近くでみると、また一段と大きく見えるなあ。うん！立派な体格だ。俺は奴隷商人のロイだ。あんた名は？」

「俺はセオドアだ。見ての通り剣術使いでね。あんたはマッドコロシムに出場させる為に俺を買ったんだろう？フフッ正直に話していいんだぜ。おれは元々そのつもりでいるんだからな」

ロイはニヤリと笑い

「それなら話しは早い！もちろんマッドコロシムに出る戦士を探していたよ。だが俺はあくまでも商人だ。だからあんたをだれか立派な人に買い取ってもらうことにするよ。貴族が嫌ならどこにする？希望はあるかい？」とたずねた。

男はコクリとうなずき

「サルサラーン国のユーリのところに世話してくれ」

ロイは目を見開き

「ユーリ女王のところとな？ あんたあの方の知り合いなのかい？」
とたずねた。

「まあな…古い知り合いだ」

ロイは顎髭を撫でながらしばらく考えこんだ。

「フム、まあいいだろう。あの国は小さな国だが中々豊かだ。あんたと知り合いならば尚更、金に糸目はつけまいよ」

セオドアはロイの後ろに隠れるようにしている二人の子供に目をやった。

「この子供たちは戦災孤児でな。どこかしっかりしたところに縁付けてやるつもりなんだ。こっちはテレサ、そしてリンだ。よろしく頼む」

セオドアはしゃがみこむと二人の頭をクシャクシャと撫でた。

「よろしくな。しばらく世話になるぜ！ん？ 坊主は目が見えんのか？」

テレサはうなずいた。

「戦争でやられちゃったのよ。ね？ リン」

セオドアは深くため息をつく

「全く子供になってことしやがる！ こんな世の中間違ってるぜ。痛みはないのか？」

リンはうなずいた。

「もう大丈夫です」

セオドアは目を細め不思議そうにリンを見た。

「坊主は不思議な雰囲気を持ってるな…なんていうか…そう！ 周りから色んな気配がしてくるぜ。俺の戦士としての本能なのか、そういうものに敏感でな」 リンはセオドアの言葉に身を硬くした。

リンの態度を見てセオドアは何か感じたらしく優しく声をかけた。

「いいか坊主、お前はどうかやらその力を邪魔なものと感じてるよう

だ。それは何故かわかるか？」

リンは首を横に振った。

「それはな、まだお前がその力をどう使ったらいいか解らないからだ。とにかくその力はお前にとって強みだぞ！せっかく授かった力だ。きちんと操れるようになって自分の武器にしろ」

リンはハツとした。

そうだ：僕はずっとこの力を嫌がってた。

強み：自分の武器にする！できるだろうか僕に…。

いや、やってみよう！怖がってばかりもいけない。

「ありがとうございます。僕やってみます！」

リンの顔は明るく輝いていた。

砂漠の神殿

一行は次の街に行く為の装備を整えることにした。

「これから先は砂漠の旅だ。しっかり支度を整えないと皆干からびてミイラになっちまうからな。少々高くついても若くて元気なラクダを買うとしよう」

ロイはそう言うのと、まずは今まで乗ってきた馬を売ってラクダ商人のもとをたずねた。

「おや？ 久しぶりですねえロイの旦那！」

商人は揉み手しながらこちらに近づいてきた。

「また世話になるよ。あんたのところのラクダなら間違いないからな」

「ええ、うちのラクダはみんな元気で若いやつばかりです。よく見てお気に入りを選んでください」

ロイは自分のラクダを選ぶようリン達に言った。

テレサはウキウキしながらラクダの真っ黒い瞳をのぞきこみ、クリーム色の可愛らしいラクダを選んだ。

「この子にするわ！ とってもかわいい顔してる。リンは決まった？」
リンはラクダの群れから離れ、一頭だけで静かに佇んでいるラクダの前に立っていた。

そのラクダは片目に大きく刀傷があり、一つの目だけでじっとリンを見ている。

「僕、コイツにするよ」

「リン、その子はやめたほうがいいわ」

「どうして？」

「だってその子…ちょっとケガしてるもの」

「ケガ？どこをケガしてるのみせてごらん」

リンがそういうと、そのラクダはリンが伸ばした手に顔を近づけた。

リンはラクダの大きな顔をなでまわし、目の大きな傷を見つけた。

「そうか…おまえ僕と同じだな。どこでケガしたの？」

ラクダはじっとリンに頭を預けたままだ。

「リン、そのラクダなんて言ってるの？」

「…早く旅立たないと暫くこの街から出られなくなるって言ってる」

「それはどうして？」

「…砂嵐が来るって！ロイに教えた方がいいな。テレサ、セオドアにも早くラクダを決めるようになってきて！僕はコイツに決めたから」

「わかったわ！ロイにも言ってくる」

テレサは一目散に走りだした。

リンはこのラクダにダンと名付け、その背中に乗った。

「ダン、これからは僕の相棒だ。よろしく頼むよ」

セオドアが大きなラクダに乗ってリンの方に向かってきた。

「リン、砂嵐が来るっていうのは本当か！」

リンはうなずき、ダンの首をポンポン叩いた。

「本当です。ダンがそう言ってます！」

セオドアはニヤリと笑い

「そうか…やはりお前は只者ではないな」とつぶやいた。

ロイは早速支払いを済ませ、オアシスラグマダーンに向かい出発し

た。

「みんなすっかり俺の後について来いよ。セオドア、一番後ろで子供達を見ててくれ！」セオドアは了解の合図に剣をブンブン振り上げた。

砂漠の日差しは容赦なくリンの小さな体に降り注ぐ。

髪はターバンで覆っているがすでにジャリジャリになってしまった。テレサは余りの暑さに耐えきれず、何度も水の入った革袋に口を当てゴクゴクと喉を鳴らして飲んでいた。

「テレサ、まだまだ先は長い、水は大切にしろよ」

セオドアがそう注意したがテレサはプリプリ怒って

「そんなこと言ったって、飲まなきゃ死んじゃうわよ！ああもう、早くオアシスに着かないかしら」

とぼやいている。

その時、どこまでも続く砂漠の向こうに、何か岩場のようなものが見えてきた。

「リン！あれはなに？」

リンは意識を集中させ、気配を読み取った。

「どうやら昔の神殿の跡らしいね。ここら辺は何百年も前は街があったみたいだ」

ロイは大きな声で叫んだ。

「ヨーシ！今日はここで夜明かしだ」

一行はラクダから降りてキャンプを張る準備を整えた。砂漠の夜は、昼間の暑さが嘘のように冷え込む。リン達は毛布を羽織り近くに燃やせるものが落ちていないか探す為、神殿の中を探索した。

神殿の外側は傷みが激しく、がらんどうだが地下に続く通路はしっかりと残っており、宗教的な装飾があちこちに施してあった。

「燃やせるものなんてなくんにもないわねえ？あら、ここに小さな扉があるわよ。何かしら？」

テレサはその小さな扉を開けて、中をのぞきこんだ。

扉の向こうは子供が一人腹ばいでやっと通れるくらいの穴がずっと奥まで伸びていた。

テレサはヨイショツと穴に体を入れて、中の様子を探っていた。

1メートルほど進んだところでテレサはドスン！と溝に落ちてしまった。

「キャア！リン！リン！助けて〜」

リンは驚いて声のする方に近づいて行った。

「テレサ：一体どうしたの！？」

「イタタタ…。リン、ロイかセオドアを呼んで来て！私、細い穴に落ちちゃったみたい」

「ええ！？またなんでそんなところに潜りこんだんだい？仕方ないなあ。ちょっと待ってて！」

リンは通路の壁をつたいながらセオドアとロイを大きな声で呼んだ。

「ロイさ〜ん！セオドアさ〜ん！テレサが穴に落ちたんだ。助けに来て！」

その時、神殿の奥深くから

「オォーン！オォーン！」と、何か生き物の鳴き声が響いてきた。

「な、なんだ！？何かいるのか？」

リンは周りの気配を全身で感じ取ろうと、息をこらした。

砂の精霊ラシード

リンはその鳴き声がこの神殿の主であることを感じとった。

「テレサ、いいかい僕の言うことをよく聞いて。これからここにこの神殿の主がやってくる。君は僕がいいと言うまでそこでじっとしていてくれ…いいかい？絶対騒いだりしちゃダメだ」

「わかったわ！じっとしてればいいのね」

「うん。絶対に声をあげないこと！相手を刺激したくないんだ。頼むよ！」

テレサはうなずいて膝頭をギュッと手で握りしめた。鳴き声はどんどん大きくなり、ロイとセオドアも急いでリンのもとに駆けつけた。

「リン！一体なんなんだあの鳴き声は？獣なのか？」

ロイはゼイゼイ息をつきながらリンにたずねた。

「いいえ、この神殿の主です。僕たちが神聖な場所を汚したと怒っているでしょう」

ロイは真っ青な顔であたふたしている。

「どうすりゃいいんだ！リン、なんとかならんか？」

セオドアはロイの慌てようを鼻で笑い

「そんなの俺のこの剣で八つ裂きにしてやるぜ！」と、わめいている。

「みんな、落ちついて！早くどこかに隠れて下さい。いいですか、何があっても絶対に声をださずじっと隠れていて下さいよ」

セオドアは心配そうにリンの肩に手を置いた。

「リン、お前は隠れないのか？」

リンは微笑みセオドアの手をギュッと握った。

「大丈夫です！僕は精霊使いなんです。逃げちゃいけないんだ。さ

あ早く隠れて！」

ロイとセオドアは竜の水桶の後ろに身を隠した。
気配がどんどん近付いてくる。

リンは思わず身構えた。

バサバサと羽ばたく音がしたかと思うと、とうとうその主が姿を現した。

その姿を見たロイとセオドアは思わず叫び声をあげそうになり、口を両手でふさいだ。

なんと姿を表したのは真っ白い翼を生やした巨大なライオンであった。

血走った目でギロリとリンを睨むと、テレサの落ちた穴に前脚を突っ込みテレサを掻き出そうとしている。

「止めてください！この神殿に勝手に入ってしまったのは謝ります。
だからどうかその子に手を出さないでくれませんか？お願いします
！」

ライオンは再びリンに視線を戻した。

「お前か？神殿を荒らしたのは？」

リンは緊張で身体が震えたがはつきりと答えた。

「僕は旅人です。どうか一晩ここで過ごさせて貰えませんか？」

「我は砂を司る精霊ラシードだ。お前は？」

「精霊使いのリンといいます」

ラシードはリンの周りをノシノシと歩きながらリンを値踏みするよう
に観察した。

「精霊使いとな？」

リンはうなずいた。

「では精霊使いの少年よ。よく聞け！ここはその昔、大変栄えた街

だった。皆、力を合わせ仲良く暮らしていた。ところがそこに精霊使いと名乗る女がやってきて人々を巧みに騙し、砂嵐を止める為と称してその穴に毎年人身御供の子供を放り投げて殺してきた…憐れなことだ。

よいか、自然界に起こることで無駄なことはひとつもない！全て意味があるのじゃ。ワシは愚かな人間に愛想が尽きた。だから大きな砂嵐を起こし、ここにはだれも寄せ付けなかったのだ。リンとやら、これからワシは再び大きな砂嵐を起こす。この付近の街全てをのみ込むほどの嵐じゃ…だが、この穴の少女を人身御供によこすなら助けてやろう。さあどうする少年よ！」

リンはぐっと言葉に詰まった。

テレサを助けたいなら砂漠の周りの街の人々は全て砂嵐に巻き込まれ死ぬことになる。

逆に街の人々を助けたければテレサが犠牲になる。

どうすればいいんだ！

「………」

「どうした？精霊使いの少年よ！」

テレサは震えながら暗い穴の中でじっと成り行きを伺っていた。

リンは意を決してラシードに向き合った。

「わかりました…僕が人身御供になりましたよ」

ラシードはその言葉に一瞬目を見開き、またすぐ疑り深い目でリンを見た。

「そなたが生け贄になるというのか？」

リンは深くうなずいた。

「フハハハハ！よくぞ言ったな少年よ。では遠慮なくそなたの命、貰い受けるぞ！」

ラシードは白い翼を羽ばたかせ、リンの小さな身体にのしかかった。

リンの両腕はラシードの鋭い爪が食い込み、夥しい血が流れ落ちている。

セオドアは背負っていた剣を抜いて身構えた。

ロイは慌ててセオドアを止めた。

「バカ野郎！お前がかなう相手じゃないぞ、出て行っても死ぬただ」

セオドアはロイを突き飛ばした。

「黙って見てるなんて俺には出来ねえ！どいてくれオッサン」

ロイはセオドアの脚にしがみつき、絶対離そうとはしなかった。

ラシードはリンの左腕を食いちぎり、その骨をバリバリと音をたてて噛み砕いた。

「ギャアアー！」

リンは断末魔の叫び声をあげ、そのまま意識を無くしてしまった。

契約の刻印

ラシードは口から血を滴らせ、ぐったりしているリンの姿をじっと見下ろした。

「大した坊主だ。どうやら本気で生け贄になるつもりらしい」
ラシードはリンの両腕に食い込んだ爪をそっと引き抜いた。

「お前が気に入ったぞ小さな精霊使いよ！砂の精霊ラシードはお前を1の主人と認めよう。助けが欲しくば、いつでも駆けつけよう。その証としてお前の身体に刻印をのこす」ラシードは翼から一枚羽を抜き取りリンの胸の上に置いた。するとそれはそのままリンの体に吸い込まれてゆき、胸には翼を型どった紋様が浮かびあがった。ラシードはひきちぎられた片腕の傷口を優しく舐めた。すると傷口は綺麗にふさがり出血は止まった。

ラシードはリンの頬をペロリとひと舐めすると、その大きな翼をバサリと開いて、神殿の奥に戻っていった。

「リン！リン！しっかりしろ…おい、死んじまったのかよ？リン…リン！」

ロイはリンの体を揺すぶってオイオイ泣き出してしまった。

「オイ！どけよオッサン」

セオドアは泣きじゃくるロイを突き飛ばし、リンの胸に耳を当てた。
「…大丈夫だ。気を失ってるだけだよ。とりあえずラシードの許しは出たんだ。今夜はゆっくり休ませてやろう」

その時、小さな穴の中からテレサの助けを呼ぶ声が聞こえてきた。

「ちよつと！早くここから出して〜！」

セオドアは穴をのぞき込み、テレサの腕を引っ張りあげた。

「イタタタ！そっと持ち上げてよ。擦り傷だらけになっちゃう」

セオドアは呆れた声で

「まったくワガママな姫さんだぜ！」

とぼやいた。

それを見ていたロイも

「そうそう、そつとね！そつと持ち上げて。商品に傷がついたら大変だ」とオタオタしている。

やっと穴から這い出てきたテレサはリンのそばに駆け寄った。

「リン…リン！なんでこんなことに…。しっかりして！」

その時、リンの唇が微かに動いた。

「えっ？なんて言ったの？だ…い…じょ…うぶ？バカね！大丈夫なわけではないでしょう」

テレサの頬は涙で濡れた。

セオドアはテレサの肩をポンポン叩き

「リンは凄いヤツだぜ！俺たちの命と引き換えに自分の命を差し出したんだ。その姿を見て砂の精霊ラシードはリンを1番の主と認めたのさ。大したヤツだぜコイツ」

テレサはリンの頬にキスして誓った。

「リン：私もあなたの為だったら命を差し出すわ。この命はあなたに貰ったものですもんね」

ロイはいつの間集めたのか、枯れ枝に火を点けてリンを近くに運ぶようセオドアに声をかけた。

「今晚はゆっくり寝かせてやろう。さあ、この毛布でリンをくるんでやってくれ」

セオドアはリンを毛布で包みながら、ラシードに喰われた傷口を確かめた。

「完全に塞がってる…精霊のヤツ、こんなこと出来るなら腕も返してやってくれよ！」

ロイはため息をつきながら

「喰ったもんは戻しようもなからう」と力なくつぶやいた。

「この紋様は何かしら？」

テレサがセオドアに聞いた。

「なんでもラシードが主人と認めた印らしいぜ」

テレサはその胸の紋様をそつと撫でた。

リンは夢を見ていた。生き別れた母のローザンヌがどこか立派なお屋敷で、豪華なドレスを着て窓際で寂しそうな顔をして庭を見ている。

リンはその顔を見て不安になり、母のもとに駆けて行った。

すると、仕立ての良いスーツを着込み貴族の持つ錫杖をつきながらローザンヌに近づいて行く男の子が見えた。

その子はローザンヌの膝に頭をのせ甘えている。

ローザンヌはその男の子の頭を優しく撫でてやっていた。

母さん：その子は誰？そこはどこなの？

「母さん！」

リンはそう叫ぶとガバツと飛び起きた。

「リン！気が付いたのね。良かった、良かったわ」

テレサはリンを抱き締めた。

母さんと同じいい香りだな：

リンはまだボウツとする頭でテレサに体を預けていた。

「オッ！リン、目が覚めたか。気分はどうだ？」

「セオドアさん：僕、助かったんですね」

セオドアはリンに頭を下げた。

「リン：すまねえ、俺達のためにそんな姿になっちゃって…」

ロイも気が付いてそつと成り行きを窺っていたがリンの右手をとり、左腕のところにその手を持っていった。

そこにはあるはずの左腕はなく、ただ塞がったばかりの傷口が触るのみだった。

リンはショックを受けていたが、それも一瞬の事で仲間が無事だったことのほうが数倍嬉しかった。

「僕は大丈夫です。痛みもほとんどありませんよ。それより良かったです！みんな無事で安心しました」「リン、もう1日休んでいくか？」「セオドアが心配そうにリンの顔をのぞきこんだ。

「いえ、出発しましょう。僕は大丈夫です」

ロイは嬉しそうに微笑み出立の支度を整えるよう、みんなに言い渡した。

砂漠は朝日に照らされオレンジ色に輝いていた。

セオドアの秘密

一行はなんとか水が無くなる前にオアシスラグマダーンに着く事が出来た。

砂漠の中にぽっかりと浮かぶ島のようにそこだけは緑が繁り、生き物達に自然の恩恵を与えていた。

「なんとか無事にここまでこれたな！一時はどうなることかと心配したが…」

セオドアの前でラクダに揺られていたテレサは

「まだまだ砂漠は続いてるのよ。ここでゆっくり疲れをとりましようよ」

とセオドアに提案した。

「ああ、そうしようぜ！ロイの親父さんよ、ここでゆっくりして行こうぜ。オアシスはここだけだからさ、風呂にでも入って旅の疲れをとりましようや！」

普段はケチなロイもさすがに疲れているとみえて、その提案にはすぐに賛成した。

「よし！ここで2、3日滞在するでしょう。まずは宿屋を探してラクダも休ませんとな」

セオドアは目敏く大浴場がある宿屋を見つけてロイに勧めた。

値段交渉もうまくやり、格安で泊まる事が出来るよう取りはからった。

「セオドア、お前は若いのになかなか旅慣れた様子だな。おかげで色々助かるよ。このラグマダーンにも以前来た事があるのか？ずいぶん詳しい様子だが…」

セオドアはギクツとした表情をすぐに押し隠し

「あ：ああ、だいぶ昔に来たことがあるんだ。しかし、ここは変わってないな。昔のまんまだ」

セオドアは懐かしそうに目を細め、周りの景色を眺めた。

セオドアの視線の先には、一際大きな屋敷があった。

「あれは？」

テレサの問いにセオドアは渋い顔つきで答えた。

「あれはラグマダーンの領主アズバン公の屋敷さ。ここの物は水一滴だってすべてアズバン家のものなんだ」

「ふうん。じゃあここで働いてる人達はみんなアズバン家の使用人ってわけね。凄いわここにハンサムな息子さんとかいないのかしら？私を買ってくれないかな。一生幸せに暮らせそうな気がするわ」

セオドアはテレサに冷たい表情で

「金持ちになればそれで幸せになれるか？でも思ってるのか？全く単純なヤツだなお前は！」

と言い捨てるスタスタとどこかに行ってしまった。

「なにより、ムキになっちゃってさ！」

リンはため息をつくとき、テレサをたしなめた。

「テレサ、君はなんでもはつきりものを言い過ぎるよ」

テレサはプウツと頬を膨らませご機嫌斜めになってしまった。

「どうしてはつきり言っちゃダメなのよ！その方がちゃんと相手に伝わるじゃないの。リンみたいに黙ってちゃあ全然相手に伝わらないわよ！はつきりしない男は私キライなの。覚えておいて！」

せっかくオアシスに着いたというのに気まずい雰囲気になりたくなかったので、リンはテレサにそれ以上は何も言わないことにした。テレサは意地っ張りだが実はとても甘えん坊なところがあるので、リンがかまってやらなければテレサの方から折れてくるに違いなかった。

「ねえ…ねえリンってばなんで黙ってるの。怒ってる？」

「……………」

「リン：ごめんね。だって私はずうっと貧乏暮らしなのよ。ちゃんとご飯が食べられるようになったのはロイに買われてからよ。だから、つい憧れちゃうのよ：裕福な暮らしに。私ね、決めたの！絶対にお金持ちになってやるって」

リンはテレサの過去について、これまで触れたことはなかった。

奴隷になるからには皆何らかの事情を抱えているのは解っている。デリケートな部分には極力触れないようにしていた。

「テレサ：僕にはよく分からないけど、自分が正しいと思うなら頑張れよ。僕はテレサが幸せならそれでいいんだ。だからきつと幸せになってくれ：」

テレサはリンの腕の無い肩にそっと寄り添った。

その頃セオドアはアズバン家の裏山にある秘密の通路の入り口である人物を待っていた。

「ルシン様：ルシン様ですネ！？どんなにお捜しした事か：」涙を流す白髪の老人の肩を優しく撫でながらセオドアは厳しい表情で囁いた。

「すまなかった：：ランドン。父上は健在か？」

「実は：：去年の暮れに亡くなりました。ずっと：：ずっとルシン様を気にかけておいででしたよ」

セオドアは愕然とした。

「では：：ではライラは？ライラはどうしている？」

「ライラ様はザハト王に嫁ぐ事に決まりました。御婚礼は半年後です」

セオドアは通路の入り口を隠している大きな岩をドンと拳で突いた。

「ザハト王といえはもう御歳60を越えているはず：：まだ15歳のライラに釣り合う相手ではない！アルマの仕業だな：：そうだろう、ランドン？」

ランドンは厳しい顔でうなずいた。

「このラグマダーンは王様が亡くなられてからは側室アルマ様の一派に牛耳られています。実は：ラグマダーンは今、大変な状況なのです。ここ数年何度か水が枯れてしまい隣国サマダンから水を買わなくてはならない事態に陥っています。そこでなんとかサマダンと姻戚関係を作っておこうと考えたアルマ様はサマダンの王、ザハト様のもとにライラ様を嫁がせようとなさったのです」

セオドアはがっくりと肩を落とした。

「ライラのところに案内してくれ。話はそれからだ：」

セオドアは松明に火を灯し、秘密の通路の中に入って行った。

水の精霊ウンディーネ前編

秘密の通路はずいぶん長い間閉じられたままだったらしく、中に足を踏み入れた途端カビの匂いがツンと鼻腔を刺激した。

セオドアは昔、この通路を抜けてラグマダーンを旅立った日の事を思い出していた。

あの日：俺はこのラグマダーンを棄てた。

アルマに夢中になり、母を苦しめた父上に絶望し、家出同然にこの国から脱け出した。独り残されたライラはどんなに辛かったろう…。あの頃の俺は本当に子供だった。

周りを思いやる余裕もなく、ただ自分の感情に振り回されているだけだった。

さぞ恨んでいるだろうな：勝手なこの兄を。ライラすまない！

セオドアが昔を思いだしながら歩いているうちに、曲がりくねった通路の先から微かな灯りが漏れてきた。

ランドンは振り返り、セオドアにささやいた。

「ルシン様、地下牢の番人は私がひきつけておきます。その隙にウンディーネの祭壇に向かってください。ライラ様はそこにいるはずですよ」

セオドアはうなずいた。

ランドンは一足先に秘密の通路を脱け出し、そうつと番人の背後に回った。

「ご苦労！ どうだ囚人達はおとなしくしているか？」

番人達はフイをつかれて畏まった。

「こ、これはランドン様。はい皆暴れることもなく静かにしていますよ」

ランドンは満足そうにうなずきながら、囚人達と会話を続け彼らの注意をひきつけた。

その隙にセオドアは地下牢を脱け出し、ウンディーネの泉に向かってそっと移動を始めたのだった。

「やはり屋根伝いに移動した方が安全だな…」

セオドアはそうつぶやくと素早く抜け道を使って屋根に登って行った。

ラグマダーンの美しい街並みを見てセオドアの胸に熱いものがこみあげてきた。

「俺はこのラグマダーンを護るだけの力を得るためにこの国を出たが…それが正しいことだったのか、それとも間違いだったのか？それを決めるのは俺自身だ！」

セオドアは自分の心ともう一度向き合い、覚悟を決めるとウンディーネの泉がある棟の入り口そばの椰子の木陰に身を潜めた。

入り口には二人の巫女が武装して見張りに立っていた。

セオドアはあっという間に巫女達に当て身を食らわせ、スルリと中に入ってしまった。

祭壇の前には水の精霊ウンディーネの像がひっそりと置かれ、後ろに広がる澄んだ泉にその影を落とし、まるでそこにウンディーネがいるような神秘的な雰囲気醸し出している。

セオドアは泉をのぞき込んでいる金髪の美しい乙女を見つけた。

「ライラ…」

セオドアが思わず声をあげると、その乙女はビクッと顔を上げ声を漏らした。

「ル…ルシン兄様!？」

セオドアは驚くライラを力強く抱きしめた。

「ライラ…ライラすまなかった。ずっと独りで辛い想いをさせてしまった」

「兄様…帰ってきて下さったのね! わたくし毎日ウンディーネに祈りを捧げていました。1日も早く兄様がお帰りになってこの国を治

めて下さるように…と」

セオドアは腕を緩め、ライラの顔をじっと見詰めた。

「しばらく見ないうちに母上そっくりに美しく成長したな…ライラ、ザハト王に嫁ぐと聞いたが…本当か？」

ライラは顔を背けた。

「…本当ですわ」

「アルマの企みだな！お前と引き換えに水をよこせとザハトに掛け合ったか…おのれ、赦さん！あの女キツネめ」

セオドアは顔を真っ赤にして怒りを顕にしたが、ライラはブンブンと首を横に振った。

「いいえ、兄様！嫁ぐのは私の意思ですわ」

セオドアは眉を寄せた。

「なんだと！？お前の意思だというのか？」ライラはコクリとうなずいた。

「隣国と手を組めば水の心配は要らなくなります。それは私の望むところでもあるのですよ。私…役にたきたいんです。このラグマダーンを何より愛しています。その為なら私なんでもやりますわ」セオドアはこの勇氣ある妹を誇りに思うと同時に憐れに思った。恋も知らぬまま60歳の男に嫁ぐなど…

他に何か方法はないものか？

「ラグマダーンは水の精霊ウンディーネの住処だというのに…ウンディーネはこのオアシスを見捨てたのでしょうか？ウンディーネに一体なぜこんなことになったのか聞いてみたい」

ライラのその言葉にセオドアはハツとした。

「ライラ…では聞いてみるとしようウンディーネに」

ライラはセオドアの言葉にキョトンとしている。

「兄様、一体何をお考えですか？」

セオドアはニヤリと微笑んだ。

水の精霊ウンディーネ中編

セオドアはライラにリンの話をした。

「とにかくアイツは凄い奴だ。砂の精霊もリンを1の主と認めている。リンにウンディーネと話をして貰おう。そして元のラグマダーンに戻ったら、お前は晴れて自由の身だ！」ライラは興味深げにリンについて質問してきた。

「兄様がそんなに信頼していらっしゃるリン様とはどんな方ですか？」

「リンは精霊使いだ。歳は…そうだな。お前と同じくらいだ。可哀想に目が不自由でな。先日砂の精霊に左腕も食われてしまった。憐れな姿だがその心はまっすぐで澄んでいる。この泉のように…。リンをここに連れてこよう。ウンディーネもリンにならきつと従ってくれるはずだ」

セオドアはライラに今夜ここに来るよう言い残し、もと来た道を急いで戻っていった。

その頃リンは風呂に浸かり、身体中の砂を洗い落としサッパリした姿で宿のテラスで寛いでいた。

「こんなに贅沢させてくれるなんてロイもリンに感謝してるのね」

テレサはリンの胸に刻まれたラシードの契約印をしみじみと眺めた。いいや…テレサ僕はそんな立派な人間じゃないんだ！

僕は臆病で卑怯者なだけさ。リンはフウとため息を漏らした。

その時、テラスのそばの椰子の木がガサガサと揺れセオドアが姿を現した。

「リン……」

「セオドアさん！どうしたんですか？そんなところから」

セオドアは息を切らしながら

「リン：頼みがあるんだ！」

と叫んだ。

「どうしたっていうの？リンが驚いてるじゃないの。とにかく上に上がって来なさいよ！」

セオドアはリンの隣の椅子に腰掛けた。

眩しいくらいの夕日に照らされ、セオドアは目を細めたが眼球を失ったリンは只静かに涼しい風だけを感じていた。

「ずいぶん長い時間出掛けていましたね、なかなか帰られないので心配しましたよ」

「ああ…すまなかったな。ロイは？いないのか？」

「ええ、馴染みの商人と呑みに出掛けたわ。多分今夜は帰らないんじゃないかしら？ところでリンに頼みってなんなの？」

セオドアはどこから話したのか迷ったが、包み隠さず全てを話した。

「…というわけなんだ。リン、ウンディーネに聞いてくれ！なぜラグマダーンの水が少なくなったのか？まさかとは思うが…もうあの泉にウンディーネはいないんじゃないかと俺は心配なんだ。頼むリン！今夜一緒に泉に来てくれ」

テレサは身を乗り出した。

「なんですって！？あんたアズバン家の息子なの？ビックリだわ。ねえリンどうする？」

「………」

返事をしないリンを見てテレサはセオドアにたずねた。

「私、これ以上リンを危険な目にあわせるのは嫌よ」

セオドアはその場にひざまずいた。

「大丈夫だ！決して危ない目にはあわせない。ただウンディーネに

聞いて欲しいだけなんだ。一体何が原因なのか…頼むよりン！ラグマダーンを助けてくれ」

リンは途方に促れていた。

だんだんみんなの僕への期待が大きくなっていく…僕はその期待にこたえられるだろうか？

「どこまでお役にたてるかわかりませんよ？」

セオドアはホッとした表情を浮かべた。

「ありがとう。一緒に来てくれるんだな」

リンはコクリとうなずいた。

「じゃあ悪いが早速出発の用意をしてくれ。今夜ライラと泉でおちあう約束になってる」

「ちよっと待って！私も支度するわ」

セオドアは仕方なさそうにテレサに声をかけた。

「ついてくるのはいいが足手まといになるなよ」

「フン！あんたなんかリンを任せられないわ。私も行くから安心してねリン」

リンは深いため息をついて

「いい加減に仲直りしないと僕、本気で怒りますよ！」と釘を刺した。

リンの厳しい表情に二人は

「ハ…イ」と返事をしてショボンと首をうなだれた。

「さあ、そうと決まれば出発しましょう。セオドアさん案内を頼みます」

「おお、任せてくれ！」

3人はすっかり暗くなった夜のジャングルを抜け、アズバン家の屋敷に向かって出発した。

「どうやら動きだしたようだ」

3人の後ろにはピツタリと2つの影がついてきていた。

「お前は先に戻ってアルマ様に伝えよ！」

「ハッ！承知いたしました」

影は疾風のように走り去った。

もう一つの影は短剣を握りしめ、3人の背後に忍び寄る。

「ん？なんだか女の匂いがする」

テレサがふいに立止まった。

「なんだよいきなり！」

セオドアがイラついた声を発すると、テレサはセオドアの身体をクンクンと嗅ぎまわった。

「おかしいわね？」

「おい！急いでるんだ。余計な事は気にするな」

テレサはムツとした顔をしたが、すぐに

「うん、きつと気のせいね」と思い直した。

3人の目の前には広大なアズバン家の城壁が立ち塞がっていた。

城の周りには武装した警備兵が何人も立っている。

「これじゃあ忍び込めないわ！どうするつもり？」

セオドアは手招きして二人を呼んだ。

「こっちだ！」

3人は城の裏手に回り込み、秘密の通路の入り口までたどり着いた。

「ここはアズバン家の後継者だけに知らされている秘密の通路だ。

ここから潜入するぞ！」

セオドアが入り口の扉を開けようと手をかけた途端、辺りは松明の火で明々と照らされた。

「そこまでだルシン！」

松明を持つ大勢の兵を掻き分け、側室アルマが姿を現した。

水の精霊ウンディーネ後編

アルマは兵士にセオドア達を縛りあげるよう命令した。

「ルシン：何を企んでこのラグマダーンに舞い戻ってきたのだ。国王の葬儀にも顔を見せず、このように城に忍び込むとは！お前は知らぬだろうが国王はお前を勘当し、王位継承権はライラに移っている。お前はラグマダーンにとって邪魔なだけ。ここで、妾が成敗してやる。誰か剣を！」

アルマがそう命令したにも関わらず、誰も剣を差し出す者はいなかった。

「ええい、何をしておる！」

しびれを切らしたアルマはそばにいる兵士の剣を奪い取ると、その刃をセオドアに突き付けた。

「ちょっと待て！いいだろう。殺したければ殺せよ！だがその前に一つ頼みを聞いてくれ」

セオドアはそう叫ぶとギロリとアルマの顔を睨み付けた。

「ホホホ怖じけづいたかルシン！いいだろう。冥土の土産にその願いとやら話してみよ」リンは固唾をのんで事態を見守っていた。

テレサにいたっては真っ青な顔でガタガタ震えている。

リンはテレサに囁いた。

「テレサ、心配いらないよ。いざとなれば僕が助けるから：今はちよつと様子を見よう」

テレサはリンの言葉で身体の震えが止まったのを感じた。

「して、その願いとやらはなんじゃ？」

「俺達をウンディーネの泉に連れていってくれ」

アルマは眉根を寄せた。

「ウンディーネの泉とな、一体なにようじゃ？」

セオドアは隣のリンに視線を投げ掛けた。

「こいつはリンという精霊使いだ。こいつにウンディーネと話をしてもらいたい」

アルマは驚いた表情でリンをマジマジと眺めた。

「この薄汚い少年が!？」

「薄汚いは余計よ!おばさん、リンは凄い精霊使いなのよ。ラグマダーンになんで水がなくなったのか聞いてもらいなさいよ」

セオドアはアチャク!と絶句している。

それを聞いてアルマの顔色が変わった。

「それは国家機密のはず!誰から聞いた!？」

その時、ランドンが姿を現した。

「わたくしですアルマ様」

「ランドン、お前か!この裏切り者め」

アルマは唇を噛み締めた。

ランドンは王が亡くなってからというものアルマの影になり日向になりずっと支えてくれていた信用のおける家臣であった。

「アルマ様、あなた様はこれまでラグマダーンを守る為に必死で頑張ってこられた。それはこのランドンお側にいて一番わかっているつもりでございます。ですが：ライラ様を犠牲にするには僥倖ない。どうかこの方達のお力を借りようではありませんか!」

ライラはグツと言葉につまりフウとため息を漏らした。

「わかった：いいだろう。リンとやら、セオドアの言うことが本当であればウンディーネと会話できるはず!もし出来なければセオドアは嘘をついたことになるな。その時はそなた達の命はないと思え、よいな!」

リンは不敵に微笑んだ。

「わかりました。ですがこちらからもお願いがあります。もし、ウンディーネと話をして水不足の問題が解消されたらセオドアさんがラグマダーンの王位を継ぐことを許して欲しいのです」

「なんだと!？」

「水不足はラグマダーンにとっては死活問題でしょう？ 解消されなければ隣国の属国となりずっと囚われの身ですよ。それくらいの代償は頂きます。どうしますか？」

アルマはランドンの方を見た。

ランドンはゆっくりと深くうなずいている。

「：よいだろう。水がなければラグマダーンは死んだも同然だ。だが、もし上手いかなければその時はラシードの生け贄になって貰う」

セオドアはその言葉にハツとした。

「お前か！？ ラシードを怒らせた偽物精霊使いは！」

アルマは冷たい表情のまま

「妾は精霊使いなどと言った覚えはないぞ」

「お前のせいでリンは：リンは：」

リンはセオドアを制して

「いいんですよ。もう済んだ事ですよ。それより早く行きましょう。

ライラさんが待ってますよ」

アルマは冷たい表情のまま

「妾は精霊使いなどと言った覚えはないぞ」

「お前のせいでリンは：リンは：」

リンはセオドアを制して

「いいんですよ。もう済んだ事ですよ。それより早く行きましょう。

ライラさんが待ってます」と促した。

アルマを先頭に一行はウンディーネの泉に向かって歩きだしたのだった。

ウンディーネの泉のほとりには白いドレスを纏っているライラが立っていた。

「ライラ！」

「兄様！それにお継母様…」

アルマはライラに近づいた。

「ライラ：この人は兄様ではありませんよ。国を棄てて勝手に出て行った人にその資格はありません」

ライラは哀しげに首をうなだれた。

「そう言うのはまだ早いでしょう？約束を忘れたわけではありませんよね？」

ライラは目を布で覆い、左腕のないリンの姿に驚きの表情を浮かべた。

「あなたがリンさん？」

リンはその場にひざまづいた。

「はい、あなたがライラ様ですね。精霊使いのリン・ラディックです」

ライラはなぜかリンに懐かしいような不思議な感覚をおぼえた。

「さあ、皆さん後ろに下がっててください。ウンディーネを呼び出します」

リンは泉の水を右手で掬い上げた。

指の間から水がキラキラと反射しながらこぼれ落ちている。

「出ですよ！水の精霊ウンディーネ！」

リンがそう叫ぶと泉の表面が波打ち、金色に輝いて美しい女神が姿を現した。

女神は辺りを見回し、リンに声をかけた。

「私を呼んだのはあんたなの？」

「そうです。聞きたい事があったものですから」

ウンディーネはめんどくさそうな様子でリンに言った。

「何よ？私忙しいの、早くしてくれる？」

「ウンディーネ、このラグマダーンはあなたのすみかだ！なのにな

ぜ水の恩恵が少ないのですか？以前は豊富にあった水が渴れてきた原因を教えて下さい！」

ウンディーネは不機嫌そうに腕組みしてアルマに視線を投げた。

「どうして…ですって？そんなの私に聞くまでもないわ。王が契約を破ったからよ！」

セオドアは身を乗り出した。

「契約？そんな話聞いたことないぞ」

リンはウンディーネに尋ねた。

「その契約とはどんな内容ですか？」

ウンディーネはフン！とそっぽをむいて答えた。

「私と王は結婚していたのよ。それなのに二人も側室を迎えて私をないがしろにしたわ！私がここに寄り付かなくなったって責められる覚えはないわよ！」

「え？ええゝ！？」

これには一同皆驚愕して騒然となった。

ただひとりアルマを除いて…

「アルマさん、一体どういうことなのか説明してください」

リンの問いかけにアルマは重い口を開いた。

「ルシン解らないの？あんたの母も側室だってことよ。立場は私と同じだったの。ラグマダーンの王は代々独身だったはずよ。なぜだかわかる？皆、ウンディーネと婚姻を結びその恩恵を受けてきたからよ。だから国王はいつも見目麗しい美男が養子としてラグマダーンにきたわけ」

セオドアは呟いた

「ところが父上は違った…」

アルマはうなずいた。

ウンディーネは冷たい目で皆を見下ろした。

「これでわかったでしょ？先に裏切ったのはそっちよ！私を責めないでちょうだい」

なるほど：そういう訳か。

リンは何か思いついたらしく、近くの兵士にセオドアを泉の淵まで連れてくるよう指示した。

「ウンディーネ、王が亡くなった今あなたに伴侶はいないはず。ここにいるセオドア：じゃなくてルシンを夫に迎えては貰えませんか？」

「なんだと？この男を私の夫に：とな？」

リンはうなずいた。

思ってもみない展開にセオドアは口をあんどりと開け、リンを凝視している。

その言葉に衝撃を受けている人物が他にもいた。

セオドアが：セオドアが結婚？

どうしたのかしら？なんでこんなに胸が痛いのか？

テレサは自分の胸に手を当て痛みの正体を探っていた。

「ホホホ面白いことをいう子だねえ」

ウンディーネはセオドアをマジマジと見つめた。

「フン、なかなかの美男子なこと。だが私は美しいだけの男では物足りぬ。私よりも強い男でなくては！そなた私と剣を合わせてみよ。もしそなたが勝てばお前の嫁になってやる」

セオドアは暫し言葉に詰まった。

「どうしたのじゃ？自信がないのか？」

「な、なんだと？いいだろう受けて立つぞ！その代わり俺が勝って妻になったあかつきには素直に俺の言うことを聞け！」

ウンディーネは不敵に笑いその手に剣を握りしめた。

「そんなセリフは勝ってから言うがいい」

セオドアはそつと泉に足を置いた。水面は氷のように硬くなりウンディーネの前まで歩いて行くことが出来た。二人は向き合い剣を合わせた。

「さあ、いくぜ！ウオオオオ！」

ウンディーネはひらりと剣先をかわすと、セオドアの背後に回り斬

りかかってきた。

セオドアはウンディーネの剣を上手くうけてギリギリと2つの刃が音を立てている。

「なかなかやるなルシン！だがまだまだ甘い」

ウンディーネはぐると手首を回してセオドアの剣を撥ね飛ばした。

「クッ！」

セオドアはその場に片膝をついた。

「ホホホ私の勝ちじゃな！」

リンは唇を噛み締めた。

「俺の敗けだ！あんた凄い腕だな」

セオドアは素直に敗けを認めた。

「今日のところは…な。だがおまえはまだまだ強くなれる。私はおまえが気にいった！妻になってやっても良いぞ」

セオドアはハッと顔をあげた。

「えっ？本気か？」

ウンディーネはさっきとはうって変わり優しい微笑みを浮かべた。

「もちろん本気じゃ。だがそれには条件がある」

「条件？」

「私はさっきも言ったが強い男がすきなのだ。もう少し修行してく
るがいい。強くなって帰ってくるまで私は待つことにしよう」

リンはすかさず質問した。

「ウンディーネよ、ではラグマダーンはもう水不足に悩まされるこ
とはありませんね」

「ああ、ルシンが他の女にうつつをぬかすようなことがなければな」

テレサはその言葉を聞き、なぜだか一筋涙が流れた。

私…私一体どうしちゃったの？テレサは自分の心の動揺を見透かさ

れないようグイと涙をぬぐい去った。

秘められた恋心

ウンディーネは泉の水をすくいとり、フツと息を吹きかけた。すると水は指輪に形を変えた。

「さあ、これを受けとれルシン。私との婚約の証だ」

指輪はウンディーネの手からフワフワと宙を飛び、ルシンの指にすっぽりと収まった。

「もし、私の助けが欲しい時はその指輪に口づけして私の名を呼ぶがいい」

セオドアはげんなりとした顔で

「ああ：俺の青春も終わったなあ」とつぶやいた。

「なんだ、何か言ったか？」

「いやなんでもねえよ！さて、用事は済んだな。俺たちは引き揚げようぜ」

セオドアはアルマの方に向き直った。

「アルマ！どうやらお互い誤解があったようだな。今までのことは謝る、すまなかつた。ライラを嫁に出そうとしたのは赦せないが、ことの元凶は親父のせいだ。俺の母にもあんたにも苦労させちゃった。だから誓うぜ！俺は親父のようににはならない。ウンディーネだけが俺の妻だ」ウンディーネは嬉しそうにセオドアに抱きつきキスをした。

「愛しのダーリンよくぞ言ったな！それでこそ私のえらんだ男だ」

セオドアの脳裏にユーリの燃えるような瞳が浮かんだ。

ユーリすまない！どうやら約束は果たせそうもないぜ…

まだ覚えているか？あの約束を…

「ルシン！今誰か違う女のことを考えておったろう？」

な、なんつう勘の良さ！さすが女神。お見通しかよ！

セオドアは大きくため息をついた。

「オイオイ、ヤキモチもほどが可愛いぜ。今誓ったばかりで浮気もないだろうが！」 ウンディーンは目を細めセオドアに絡みついている。

「そうじゃな。その指輪は浮気防止も兼ねておるし：心配なからう」 ウンディーンはボソリとそう言うと、リンの方に近付き服を破いた。

「お、おい！ 何しやる」

セオドアが叫んだが、リンは微動だにせずされるがままになっていた。

「これは：ラシードの印だわ。なるほど、リンとやらあなたなかなかやるじゃないの。私は主は持たない主義なの。今までも夫以外に遣えたことはないわ」

リンはニツコリ笑った。

「ウンディーン、僕はあなたを従えようとは思っていませんよ」

「あら、ずいぶんと欲のない精霊使いだこと。でもそこが気に入ったわ。1の主は夫だけれどあなたを2の主にしてあげる。困ったことがあったら呼びなさい。暇だったら行ってあげてもいいわ」 リンはクスリと笑った。

「ウンディーン、あなたは僕をダシにしてセオドアに会いにくるつもりですね」

「あら、そ：そんなことないわよ。この子ったらおませさんね！」

「理由はどうあれ助かります！ 頼りにしてますよウンディーン」 ウンディーンはうなずいてリンの額に人差し指を当てた。

するとリンの額には水象った印が現れた。

「私を呼ぶことが許された証をのこしたわ。ルシンを頼んだわよりン！」

リンは深くうなずいた。

セオドアは泉のほとりでじっとしていたライラに近づいた。

「ライラ：もう大丈夫だ。ラグマダーンは生き返ったぞ。お前ももう自由だ！」

ライラはホウツと息を吐いた。

「兄様：これで良かったのですか？ ユーリ様のことは…」

「言うな、ライラ！ どっちにしろ結ばれる相手ではなかったさ」

「兄様…」

セオドアはリンにライラを紹介した。

「これが噂のリンだ！」

リンはモジモジと照れくさそうにしている。

「リンです。どうぞよろしく」

ライラはリンのその様子を見てなんだか可愛らしく思えた。

「兄から凄い精霊使いだと聞いています。噂にたがわずやり手ですね。見ていて感心しました」

リンは更に居心地悪そうにソワソワしている。

テレサはそんなリンの前に立ち塞がると眉間にシワを寄せて

「リンはこの通り恥ずかしがりやですの、失礼します！」と言い放ちグイグイとリンを引っ張っていった。

「なんだよテレサ、一体どうしたんだい？」 テレサはヒックヒックと泣いているではないか。

「テレサ…」

リンが途方に暮れているとテレサはリンにしがみついてきた。

「わからない：わからないの！ 自分の気持ちが：リン、リン側にいて」

「テレサ…」

リンは泣きじゃくるテレサの頭を優しく撫で続けた。

死者の街 前編

女の子の気持ちは良く分からないや。

リンはテレサがどうして泣くのか不思議だった。

緊張が解けてホッとしたのかな？

「テレサもう大丈夫だよ。さあ宿に帰ってゆっくり休もう」

テレサは泣き腫らした目を擦りながらコックリとうなずいた。

「セオドアさんはどうします？」

リンの問いかけにセオドアは即答で

「俺も一緒に帰るよ」と答えた。

「今晚くらいライラさんと過ごされたらどうですか？久しぶりの再会なんでしょう？」

ライラは笑顔でリンの手をとった。

ライラさん：なんていい香りなんだろう。

リンは思わず顔が赤らんでしまった。

「リン様、兄を頼みます。勇敢ですが向こう見ずなところがあってちょっと心配です。兄が暴走しそうになったらリン様が叱ってくださいね。兄はああ見えてとてもあなたを尊敬しています。ふつつかな兄ですがこれからもよろしくお願いいたします」

リンは高鳴る胸を抑え

「はい：僕でお役に立つのなら」と答えた。ライラは自分の首からペンダントを外し、リンの首にかけた。

「これは？」

「魔除けの御守りですわ。旅が無事に進みますように…それから、また逢えますように」

「えっ？」

「な、なんでもありませんわ。リン様、わたくしの事忘れないでい

てくださいませね」

「もちろんですよ！ 僕も…またライラさんと逢える事を祈ってます」

「リン様…」

そんな二人の様子を見てテレサが割って入ってきた。

「リン！ 何してるの？ 早く帰りましょう」

リンは、テレサがまた癪癪を起こさないうちに早々とこの場を引き揚げることにした。

帰り道は誰も一言も喋らなかった。

3人はそれぞれの想いを抱えながら爽やかな夜風に吹かれ家路にいった。

「おい！ 起きろよ」

ロイは死んだように爆睡している3人をゆすつてみたが全く反応しない。

「まったく、俺がいないのをいいことに遊び呆けていたな。ほら起きろ！ 出発の準備だ」

まずはリンが目を覚まし、二人の布団を片手で剥いだ。

「どうやら朝みたいですよ。美味しいご飯が待ってます。早く起きないと僕がみんな食べちゃいますからね！」 その言葉に二人ともガバリツと跳ね起きた。

「なに！ 飯か？」

「ご飯！ お腹空いたわー！」

ロイはガハハと笑い

「なるほど！ そうやって起こせばいいのか。さすがだなリン！」 と感心しきりだ。

朝食を囲みながらロイは地図を取りだし、次の街を指し示した。

「次はここ、死者の街だ」

「死者の街！なんだか気味の悪い名前ね」テレサは地図をじっとみた。

「どうみてもそこを通過せぬわけにはいかないようだな。野宿するなら別だが、どうするテレサ？」

セオドアは面白そうにテレサの反応を伺っている。

「野宿は嫌よく！分かったわ。行けばいいんでしょ、行けば」ロイは立ち上がり

「そうと決まれば出発だ。砂漠の旅もあと少しだ、砂漠を越せば旅も楽しくなるさ」と皆に声をかけた。

「そう願いたいわね」テレサは長い髪をまとめ、砂よけのフードを巻き付けた。

「待ってろよラグマダーン！遅くなって俺が帰る日まで」

だんだん遠ざかるオアシスを振り返り、セオドアは感無量の気分浸っていた。

「待ってろよウンディーネの間違いじゃないの？」

テレサが拗ねた顔でボソリと言った言葉にリンはハツとした。
もしかして…テレサ…きみ…いや、まさかね。

リンは苦笑いしてダンの長い首を撫でてやった。

風が砂漠の風景を目まぐるしく変えていく。

「風がすごくて息もつけないじゃないの苦しいわリン！なんとかならない？ラシードにどうにかするよう命令してよ」

リンは

「えっ？」と驚いた。

「僕に出来るかな？」テレサは砂が入らないよう薄く目を開けて

「やってみなくちゃわからないでしょ？お願いよ、なんとかして！」
リンは仕方なく胸の印に右手を当てた。

「出でよ、砂の精霊ラシード！」

「……あれ？やっぱりダメかな？」

ゴ…ゴゴゴゴ！

「キャアア！あれ、あれ何？」

それは巨大な竜巻であった。

砂煙をたてながら物凄い勢いでこちらに向かってくる。

一行は逃げようもなくその場に立ち竦んだその時、竜巻が割れてラシードが現れた。

「我が主リンよ！ラシード只今参りました」リンは思わず全身に震えが走った。

「ラ、ラシード！僕らに砂がかからないで快適な旅が出来るようはからって貰えませんか？こう風が強くては前に進めません」

ラシードは大きな翼を羽ばたかせ

「承知した！」と叫ぶと、また竜巻と共に去って行った。

「す、凄い迫力だったわねー！あ…あら？ねえ見てみんな！砂が、砂が私達を避けていくわ」

リン達の周りだけはまるで透明のバリヤーが張り巡らされたように完全に風が止んでいた。

「こんなことならもっと早くリンに頼めばよかったぜ！」

セオドアはすっかりはしゃいでいる。

「リンよ！まったくお前さんときたら…大した子供だ」

ロイは森で見つけた時の絶望にうちひしがれていたリンを思い出していた。

生きるってやっぱり素敵なことだと思わないか？リンよ…

リンは初めて精霊使いとして生まれたことを誇らしく思った。

僕…やっぱり精霊使いとして生まれてこれで良かった。

もっと力をつけて人の役に立てるよう頑張ろう。

「リン見て！街だわ。あれが死者の街でしょ？」

街には家が建ち並び、宿屋の看板も見える。

「どうやらそうらしいね。でもなんだかやけに静かだな」

リンは目が見えないぶん耳は人一倍敏感だ。

「どうしてかな？人の気配もあまりしないね」

ラクダの手綱を柱に結びつけると、ロイはみんなにここで少し待つよう言っただけで宿屋の中に入って行った。

テレサはキョロキョロあたりを見回し、何かを見つけたらしく嬉しそうにピョンピョンとび跳ねている。

「ねえセオドア！あそこに用品店があるわ。待ってる間、ちょっとだけのぞいてきていいでしょ？」

セオドアはめんどくさそうに

「ダメだ！ここで待ってろと言ったろう？」

とテレサをたしなめた。

「ちょっとだけよ。リンも一緒なら心配ないでしょ？」

リンは仕方なさそうに

「じゃあちょっとだけ見せてきますよ。すぐ戻ります」

とセオドアにことわった。

「リンが一緒ならまあ大丈夫だろう。すぐに戻れよ！」

「ハイ！」

テレサはリンを連れて用品店のドアを開けた。

店のカウンターには若い女が立っていた。

「すみません。リボンを見せてください」

テレサが声をかけたが店員らしき女は何も答えない。

「ちょっと聞いているの？」

テレサがおんなの袖を引っ張ったとたんその女はバツタリと倒れてしまった。

「キャアアア！一体どうしたっていうの？」身動き一つしない女に

二人は恐る恐る近寄って行った。

女は倒れたまま起き上がる気配はない。

「だ、大丈夫ですか？」

リンが声をかけてもピクリとも動かなかった。

テレサは脈があるか確かめようと女の手首を掴んだ。

「キッツ何これ、人形だわ！」

テレサは不気味に転がる等身大の人形に何か異様なものを感じて急いでリンと店を出た。

慌てた様子で駆け戻ってきた二人に、セオドアは何があったのかたずねた。

「どうした？ おまえら顔色悪いぞ」

テレサはブンブン首をふり

「なんでもないわ。さっきの店、誰も居なかったの。気味の悪い人形が店番してた」

「？ なんだそりゃあ。まあいいさ、もうすぐロイも戻ってくる。ウロウロしないでそこでじっとしてろ」

どうやら宿屋が見つかったらしくロイがいそいそとこちらに戻ってきた。

「さあ、こっちだ。ラクダはあっちに繋いでくれ」

一行は部屋に着くと早速荷ほどきして、テーブルに用意してあった茶で喉を潤した。

「リンのおかげで随分早く着くことができた。夕飯まで時間があるな。俺は酒場で一杯ひっかけてるからお前らもあそんでくるといい：と言ってもここじゃあ遊ぶ場所もないか」

酒好きのロイは早く酒場に行きたくてウズウズしていたようだ。

「セオドア、こいつらにこの街のルールを教えておいてくれ」

セオドアはあくびしながら

「了解！」と手を振った。

「じゃあくれぐれも頼むぞ」

リンはロイが出ていくと早速そのルールとやらをセオドアにたずねた。

「まずはなぜここが死者の街と呼ばれているのか教えてやる。この

街はな、街全体が墓場なのさ」

「墓場？」

「そうだ。この街の住人は10人にも満たないと思う。宿屋が一件、酒場：というか料理屋が一件。あとは番人が数人住んでるだけだからな」

リンは先ほどの用品店で出来事をセオドアに話した。

テレサは眉根を寄せて

「まるで人間みたいに良くできた人形だったわ。あれって一体なんなの？」

「ああ、その人形はな死んだ人間そっくりに作ってあるんだ。この先の街に生者の街がある。そこで死んだ人間は、親類がそっくりの人形を作らせてここに持つてくるのさ」

テレサは理解できないとばかりにため息を漏らした。

「そんなことしてなんになるのかしらね？」リンはなんだかその気持ち解るような気がした。

「生きてる人達は、亡くなった人がこの街で暮らしてるって信じることで救われてるのかな：その気持ち、僕にはなんとなくわかるよ」3人はなんだかしんみりした気分でその夜を過ごした。

ベッドに入ってからもしんな中々寝つかれないでいた。

久しぶりに死んだ父さんの顔が浮かぶよ：父さん、守ってやれなくてごめんなさい。母さんとカイは僕がきつと見つけ出してみせるから！

寝返りをうつリンを見てテレサが声をかけてきた。

「リン：眠れないの？」

「ああ、テレサすまない起こしちゃったかな？」

「ううん、いいのよ。私もなんだか眠れないの。この街のせいかしら：：なんだか死んだ母さんの事を思いだしちゃって」

リンはテレサの過去について今まで触れないようにしていたが、どうやらテレサはリンに話を聞いて貰いたい様子なのを察して、思い切ってたずねてみる事にした。

「テレサのお母さんってどんな人だったの？きっと凄い美人なんだろうね。僕はテレサを見たことないけど、テレサを見た人はみんな美人だと褒めてるもんね」

テレサはクスクス笑った。

「そうよ。私は母さん似なの。国でも評判の美人だったわ。父さんはそんな母さんをお嫁さんに出来て、とっても自慢だったみたい。でも母さんがそんな美人でなければもっと長生きできたかもしれないわ」

「何があったの？」

テレサの目から涙が溢れた。

「……グスッ」

「泣いてるの？ごめん、余計なこと聞いちゃったね…」

テレサは鼻を吸りながら

「いいのよ。今日は聞いてもらいたい気分なの。母さんはね、王様に殺されたの」

リンは意外な答えに驚きを隠せなかった。

「王様にだって！？一体なぜ？」

「母さんは王宮で働いていたの。洗濯番だったんだけど…どこで見かけたのか母さんを見そめて、側室に上がるよう命令してきたわ」
「なんだって？だってその時にはもう結婚して君という娘までいたんだろう？」

テレサはコクリとうなずいた。

「ええそうよ、それなのに無理やり父からとりあげたの。母は誇り高い人だった。王宮から迎えが来る朝、家の裏の谷から飛びおりたのよ」

リンはかける言葉が見つからなかった。

「いいのよリン：同情は要らないわ。こんな世の中ですものありふれた話よ。さあ、もう寝ましょう：明日出発ですものを休めておかなくちゃ」

リンは複雑な心境のままテレサにおやすみの挨拶を済ませ瞳を閉じた。

テレサは話してスッキリしたのかスヤスヤと寝息を立てている。

リンもやっとウトウト睡魔がおそってきたその時、窓の方からガタツギイイーと物音が聞こえてきた。

リンは隣のベッドのセオドアのシーツをそっと引っ張った。

セオドアは既に侵入者に気付いていたらしくその手にはしっかりと剣を握りしめていた。ミシツミシツと床を踏みしめる音が近づいてくる。

リンの額から冷たい汗が噴き出してきた。

侵入者の手がリンの首筋をとらえたその瞬間、セオドアが布団をはね除け侵入者めがけて剣をふりおろした。

死者の街 中編

カシーン！カシーン！と剣がぶつかる音がしてテレサは目を覚ました。

「キャア！こいつら何者なの？」

リンはベッドの隅でテレサに覆い被さるようにして成り行きを見守った。

「さあ、わからないな。でもセオドアさんに任せておけば大丈夫だよ」

リンの言葉通りセオドアはあっという間に二人の曲者に当て身を食らわせ気絶させてしまった。

「テレサ何してる？早くロープを持って来い！」

テレサは一階からロープを持ってくるとセオドアに渡した。

セオドアは二人を後ろ手に縛りあげフウとため息をついた。

「この人達は何者でしょう？やはりこの街の人間でしょうか？」

リンはセオドアにたずねた。

「さあな…おまえらまた何かやらかしたんじゃないのか？」

「なんにもしてないわよう。ねえリン？」

リンはふとあの用品店での出来事を思いだした。

「テレサ…もしかしてあれかな？」

テレサはギョツとして

「ええ？まさかあ」と言葉を得た。

セオドアは二人を見下ろし

「どうやらここあたりがあるらしいな」とにらみつけた。

「ウ…ウウ…」

「どうやら目を覚ましたらしいな」

捕らわれた二人組は憎々しげにリンとテレサを睨んでいる。

セオドアは二人の前にしゃがみこみ

「おまえら何者だ？なんで子供達を狙った？」とたずねた。

男はどうやら観念したらしく重い口を開いた。

「こいつらがヒトガタにいたずらしたからだ」

「ヒトガタってあの等身大の人形のことですか？」

男はうなずき

「彼岸の夜、霊はヒトガタに帰ってくる。おまえらのせいでローラのヒトガタにひびが入ってしまった。あれでは霊が帰れない！」

リンはなるほど…と膝を叩いた。
「そのヒトガタの代わりにテレサを身代わりにしようとしたわけですか」

「そうだ…ルー様にその子連れてくるよう言われたんだ」

「ルー様？それは誰だ！」

セオドアは男の襟首をギュッと掴んだ。

「ル…ルー様は霊おろしが出来る聖女だ。死神とも話が出来る凄なお方だ」

セオドアはニヤニヤして男にたずねた。

「で、そのルー様とやらは美人か？」

「セオドア！あんた何考えてるのよ」

今まで黙っていたテレサがキーキー騒ぎだした。

「いいじゃん！なんだかそのルー様とやらに興味がわいてきたぜ。

おい、その女のところに案内しろ！」

「！？何言っちゃってんのあんた、正気なの？私達の命を狙った相手なのよ」

テレサは断固反対の姿勢だ。

リンもルーが死神と話が出来るといふ事に興味を持った。

僕もルーさんにぜひ会ってみたい：

「テレサ、命を狙ったわけじゃないよ。身代わりにしようとしたんだ。それにもとはといえ悪いのは僕達じゃないか。会って謝って来ようよ」

テレサはハアと深くため息をつき

「まったくリンまでそんな事言うなんて：わかったわよ！行けばいいんでしょ？行けば！その代わり何があっても私は知らないからね」セオドアは嬉しそうに

「よし！そうと決まれば出発だ。おまえら、ちゃんと案内しないと承知しないぜ」

と脅して二人の男を歩かせた。

男達は人気のない閑散とした街を突き抜けボロボロで今にも崩れおちそうなバラック小屋の前で立ち止まった。小屋の前にあるドラム缶からは湯気がモウモウとたちのぼっている。

「おいおい、こんなところで立ち止まるなよ！さっさとルーのところに案内しろ」

セオドアはしびれを切らして男たちを急ぎ立てた。

「ここですよ。着きました」

「え？ここ？」

セオドアはあんぐりと口をあけたままそのバラック小屋を見上げた。

「なんじゃ？騒々しいのう」

ドラム缶の影からしゃがれた声がして、小さな老婆がのそのそ這い出てきた。

「ルー様、犯人を連れて参りました」

ルーはグフと笑い

「連れてきたというより連れて来られた、というほうが正しいようじゃが：」

ルーは目を細めて男達の手首のロープをじっと見た。

「あんたがルーか？」ルーはセオドアを見上げ

「ホホッこりやあまたイイオトコじゃな。いかにも、わたしがルーじゃ。そなた名はなんという？その指輪…ウンディーネにとりつかれておるの」

とサラリと言つてのけ、セオドアの度胆をぬいた。

「そっちのボウズは精霊使いか…といつてもまだまだじゃがな」

リンはドキリとして息をのんだ。

「そっちのお嬢ちゃんは…フッフ…こりやあまた面白い運命を背負つてるようだね」

テレサは目をみひらいて、その小さな老婆に問いただした。

「わたしの未来が見えるの？教えてお婆ちゃん、私これからどうなるの？」

ルーはからかうように

「わたしやあもう疲れたよ。これから風呂に入ろうと思つてたのにとんだ邪魔が入ったもんだ」と言うと、服を脱ぎ出した。

「ル、ルー様！我らはどうすれば…？」

ルーは下着姿で一瞥すると

「仕方ないねえ。うちでお茶でものんで待つてよ」というと手でシッシツと皆を追ひ払った。

セオドア達は仕方なくバラック小屋の中に入つて行つた。

「なんだこりゃあ！」

部屋の中はまるでオモチャ箱をひっくり返したように色とりどりの液体が入った瓶や壺、まじないの札や謎の道具が散乱していて座る場所もない有り様だった。

二人組の男は慣れた様子でガラクタを足でよけると、その場に座りこんだ。

「あんたたちもその辺適当に座つてなよ。ルー様は長風呂だからな。しばらく待たされるぞ」

テレサは気味悪そうに瓶をつまんでは横に寄せている。

リンは器用に近くにあった棒を使い、場所を作って座ろうとした瞬間セオドアが隣で悲鳴をあげた。

「ちょっと！びっくりするじゃないの、どうしたの？」

セオドアはその場にしゃがみこんでガタガタ震えている。

「そ…それ、それ！」セオドアが指差した瓶をテレサがもちあげた。

「なによ、これ？」

「キャアア！イヤアア！」

なんとその瓶の底には蛇がとぐろを巻いてぐったりと沈んでいた。それをみた男はガハハと大笑いしている。

「それはハブ酒だよ。この街にはハブがたくさんいるんだ。これは若返りの効果があってルー様が毎日飲んでおられる」

「気色悪いもん飲んでるんだな。しかし、なんの効果もみられんね。ルーもあんだけしわくちゃんだから今更若返りもないだろうよ」

セオドアがそう言うのと、扉がガラリと開いてルーが入ってきた。

「なんだと？ハブ酒の効き目は最高だぞ」

セオドアが振り返るとそこには黒髪の美しい女がしどけない姿で立っていた。

「待たせたな。どうだおまえもいっぱいやるか？」

その女はハブ酒を近くのコップにあけるとぐびぐびと飲み干した。セオドアが呆気にとられていると、男達が女にハブ酒をついでやっている。

「ルー様、ローラのヒトガタはどうですか？」

「うーん、やはり修理に2、3日はかかりそうだ」

セオドアは女の顔をじっと見つめ、信じられないとばかりに絶叫した。

「お、おまえルーなのか？」

ルーはウフフと微笑み

「そうじゃ。どうだハブ酒は効くだろう？」とからかって楽しんでいる。

「やつっぱり化け物だ」

ルーは

「今なんか言ったか？」とセオドアを軽く睨んだ。

「な、なんでもねえよ」

テレサは突然立ち上がりルーのハブ酒を取り返すとごくごく飲んだ。

「テ、テレサ！おまえ子供のくせに酒のんでんじゃねえよ」

テレサはみるみるうちに真っ赤になりフラフラと尻餅をついた。

「なによ！この浮気者、美人を見ればあっちにフラフラ可愛い娘がいればこっちにフラフラ。私はあんたみたいな軟派なヤツ大嫌いなんだからね！」

セオドアはテレサの様子に呆れ

「まったく酒癖の悪いガキだぜ」と自分の上着をすっかり寝ぼけているテレサにかけてやった。

「フッフ可愛いではないかすっかりそなたに夢中な様子。優しくしてやったがいいぞ。その娘は自分の好きな相手とは結ばれぬ定め、それは自分もわかっておろう。せめて自由でいる間は幸せでいさせてやるがいい」

リンはルーの言葉にハツとした。

テレサやつぱり君はセオドアが好きだったんだね；でもセオドアにはウンディーネが；。可哀想にテレサ、辛かったろう。

リンはテレサの酔いつぶれた姿が憐れでならなかった。

「まだテレサは子供だ。恋に憧れてるだけだろう」

セオドアはそう言いながらも複雑な表情を浮かべている。

「そなたには怖い女神様がついておるしな」

セオドアはルーをいぶかしげに見つめた。

「なぜウンディーネの指輪とわかった？」

ルーは楽しそうに

「わたしもウンディーネからプロポーズされたことがあるからな」と言うではないか。

「な、なに〜！？アイツ女にまで手を出してるのか？」

男達はセオドアの言葉に格拉格拉笑い

「ルー様は男にも化けなざるからなあ。しかも絶世の美男子に！」

セオドアはすっかり毒気にあてられクラクラしてきた。

リンはその間にも冷静に話を頭で整理していた。

ある時は老婆、そして美女、男にまで化けるとは…一体このルーの正体は何なのだ？

「ルーさん、あなたは死神とも交信できるとか？」

ルーの表情が一瞬固まったのをリンは見逃さなかった。

「誰からそれを？」

リンは男の一人を指差した。

「チッ！仕方ないな。まあそうだ。仕事から死神とは切っても切れぬ付き合いだね」

リンは思いきってルーにたずねた。

「ルーさん、あなた何者ですか？精霊使いとはまた違うようだ。だが死神と交信出来るという。死神と交信できるのは精霊使いだけのはずです。あなたは人間ですか？」

みな固唾をのんでルーの答えを待った。

死者の街 後編

ルーは頭をポリポリ掻きながら

「さあな。ルーはルーだ。おまえがリンであるように……だ」とめんどくさそうにそう言った。

「それじゃあ答えになっていませんよ。あなたは人間ですか？と聞いたんです」

リンは一步も譲る気はない。

「自分でもよくわからん。だがちゃんと母がいたから人間だろう。ま、あんまり深く考えるな。人生答えのないことのほうがずっと多いぞ。おまえはすぐ白黒つけたがる性格のようだが、曖昧なままにしておいたほうがよいこともあるんじゃない。まだ若いから私のいうことはまだわからんかのう」

リンはルーにうまく逃げられたなど感じたが、それ以上追及するのは止めた。

ルーの言うことも一理あるかもしれないな……僕は答えを急ぎすぎているのかもしれない。

「さて、本題に入るか。おまえ達に来てもらったのは例のヒトガタの件だ。用品店の娘、ローラのヒトガタにヒビが入って霊を呼び戻すことが出来ない。明日が彼岸だというのにそれじゃあ困るのだ。そこで、テレサにヒトガタの代わりをしてもらいたいのだ」

セオドアは隣で酔いつぶれているテレサを見た。

「こいつに霊をおろすのか？」

ルーはうなずいた。

「ああ、そういうことだ。もとはといえばおまえたちが原因だからな。ケリはつけて貰うぞ。用品店の親父もえらく怒っていて、そうでもせねばことが治まらん。セオドア、おまえからテレサに話しておいてくれ。明日の夕方5時にまたここに来い。いいな？」

「わかったよ。ロイにもう1日滞在を延ばして貰うしかないな……そ

うそう一つ確認しておかなくちゃな。霊おろしで何かテレサに危険なことはないんだろうな？無理矢理連れていこうとしたところをみると何かあるのかと疑っちゃうぜ。どうなんだ？」

男たちは顔を見合せ何も言おうとしない。

「なんだよ、何かあるのか？」

ルーはセオドアの背中でスヤスヤ眠っているテレサの髪を撫でながら答えた。

「テレサがローラの意識にのみ込まれなければ大丈夫だ。ローラは昨年亡くなったばかりでな。まだ霊となって日が浅い。力は弱いはずだからもし駄々をこねたとしても私がなんとかするから大丈夫だ」セオドアはうなずいて

「ルーを信じて任せるしかないな。リン、どう思う？」
リンもうなずいて

「ええ、ここはルーさんに任せましょう」と同意した。
宿屋への帰り道、リンはセオドアにテレサのことを話した。

「セオドアさん、テレサはどうやら本気であなが好きみたいです。僕：そばにいたのに気づかなくて。セオドアさんに婚約者がいるのはわかってますが旅の間はテレサに優しくしてやってもらえませんか？お願いします」

「……リン、おまえそれでいいのかよ？」

「……え？」

「おまえ：テレサのことが好きなんじゃないのか？」

「僕には誰かに恋する資格なんてないですから……」
セオドアはリンを睨んだ。

「資格？資格ってなんだよ。それをいうなら俺だって、テレサだつてないだろう？自由な身じゃないのは同じじゃないのか？ハン！優しくしてやれだど？カッコつけんなよリン！」

「カッコつけてなんか…。カッコつけてなんかないですよ…」

セオドアは深く息を吸うと満天の星空を見上げた。

「なあリン。俺たちがこうしているのって奇跡だと思わねえか？世の中こゝんなに広いのになんの縁か出逢い、そして一緒に旅してる。俺思うんだ、人が出逢うのって偶然なんかじゃない。きつと出逢うべくして出逢ってるんだって思うよ。だからみんな大切にしたいんだ。おまえもテレサもさ」

僕だって…僕だってそう思ってますよ。

リンは心の中でそうつぶやいた。

宿屋についた3人は疲れ切ってすぐに床についた。

リンは両目を覆う包帯をハラハラとほどくと、指で空洞化した両目を触った。

「両目を失って良かったことは自分の醜い姿を見なくて済むってことだな…」

リンはセオドアの言葉を思い出しながら新しい包帯を巻き付けていった。

次の日…

セオドアはロイに滞在を延ばしてもらいたいと頼みこんだ。

「なに？あと1日ここにとどまるのか？」

ロイは渋い顔で黙ったままだ。

「すまねえな。だがちゃんと責任とらないと次の生者の街でも居心地悪い思いをするぜ。なんせここはやつらの墓場なんだ」

セオドアの言い分はその通りなのでロイも仕方なく了承した。

「わかったよ。しかしな、先ほど番屋で聞いてきたんだがどうやらコロシアムのエントリーが早まるらしいんだ。だからこの後の旅程はスピードをあげていくぞ！いいな？」

3人はとりあえずほっとして朝食を食べ始めた。

「うう…気持ち悪い！」

テレサは二日酔いで苦しそうだ。

「馬鹿だな！子供のくせにハブ酒一気呑みすりゃあ当たり前だ」

セオドアはニヤリと笑いサッサと食事を済ませ出ていってしまった。
リンはそんなテレサの背中を優しくさすってやっている。

「リンは優しいわね。セオドアがリンの10ぶんの1でも優しくればいいのに」

リンはその言葉に苦笑いを浮かべた。

「テレサ：君、昨日のこと覚えてるかい？」テレサはえへへと照れくさそうに

「それが全然なの：ハブ酒呑んでからの記憶がないのよねえ。リン！私何か変なこと言った？」

リンは仕方なさそうに

「いいや：直ぐに酔いつぶれちゃっていたよ。それより今夜、ローラのヒトガタの代わりに君がその役をやることになったんだ。ルーは心配いらないうけど：少し身体を休めておいた方がいいよ。夕方起こしてあげるから少しおやすみ」

リンはテレサに布団を被せ、ベランダに出た。

宿屋の庭ではセオドアが剣の手入れをしていた。

「これも縁：か」

リンは最近とみに敏感になってきた聴覚と嗅覚で外の気配を読み取っていた。

今日は彼岸で霊おろしがあるため生者の街からやってきた人々が溢れ、昨日までの様子が嘘のように活気に満ちている。

露店商が立ち並び、甘いお菓子の匂いや子供達の楽しい声が宿屋の二階まで聞こえてきていた。

テレサはすっかり浮き足だっしまい、リンが目を離したすきに布団の中にクッションを押し込み、うまく形を整えると

「リン、ごめん。直ぐに戻ってくるからね！」と宿屋を脱け出してしまった。

テレサはあちこちの露店をのぞいてあるいた。

「うわゝ。素敵な帽子！」

その店には色とりどりの美しい帽子が沢山並べてあった。

テレサは真っ白い羽飾りがついた赤い帽子を手にとり被ってみた。

店にある鏡の前でポーズをとっていると、いつの間にか後ろに錫杖を持った男が立っていた。片目に眼帯を着け、残された目を細めテレサをじっと見ている。

テレサは男に気付いて振り返った。「私に何かご用ですか？」

男はニツコリと笑いかけ

「あんまり美しいのでつい見とれてしまった。申し訳ない」と謝罪してきた。

「あなたは誰？」

「私はグレン・リンデンハイムだ。君は？」

「私はテレサよ。旅の途中でここに寄ったの」

グレンは興味深げにテレサに尋ねた。

「どこに行くのかね？」

「月の城よ」

グレンはなるほど、と納得した様子で店主に帽子の代金を払った。

「その帽子はわたしからのプレゼントだ」

テレサは驚いて

「こんな高価なものは頂けないわ！」と帽子をグレンに突き返した。

「この帽子を君以上に素敵に被れるひとはいないさ」

「でも……」

「では取り引きしよう。もしまた逢えたらその時は私と一曲踊ってもらいたい。それでどうだい？」

テレサはうなずいた。

「お安いごようよ！」グレンは嬉しそうに微笑み

「じゃあ約束だよ」とテレサに言って去って行った。

「あの人がいったい何者かしら。ずいぶん身分が高そうだったけど…」
その時、霊おろしが始まる鐘がなった。

「大変！宿屋にもどらなくちゃ」

テレサはスカートの裾をたくしあげ走りだした。

その頃宿屋では、リンが大慌てでテレサを探していた。

「ごめんねリン！」

「テレサ、あれほど言っておいたのに仕方ないなあ！」

セオドアも気がついて近付いてきた。

「さあ行くぞ、ルーに怒られないようにさっさと支度しろ！」セオドアはテレサが見慣れない豪華な帽子を手に行っているのに気付いた。

「それは？」

「ああこれ？知らない人が買ってくれたの」

セオドアはやれやれといった表情でテレサをたしなめた。

「そんなこともうするんじゃないぞ！ただほど怖いものはないっていうぜ。ちよつとは他人を警戒しろ。いいな！」

「ハーイわかったわよ！」

テレサはまさかこの男が自分の人生に深く関わってくる事になるうとは、まだしるよしもなかった。

「さあ、日が暮れる前に出発しましょう」

リンはテレサの手をギュッと握りしめ部屋を出た。

「どうしたの？リン痛いわよ」

リンはなにも言わず黙ったまま歩き出した。

リンは急に不安になったのだった。

なんだかテレサが僕の手の届かないところに行ってしまう…そんな予感がするんだ。

リンは不安を振り払うように足早に歩いていった。

バラック小屋の周りには沢山の死神がフワフワと浮かび、ルーの号

令を待っているところであつた。

「ルーさん遅くなつてすみません」

今日のルーは黒髪を高く結び上げて黒いシンプルなドレスをスッキリと着こなしていた。

「遅いではないか！死神達が待ちくたびれているぞ。そろつたところで早速始めるとするか…さあ！死神達よ。あの世から霊達を連れてきておくれ」

死神達は一斉に天高く舞い上がっていった。ルーは死神を一人呼びつけ、ローラの霊を自分のところに直接連れてくるよう指示した。

「悪いがそうしておくれ、頼んだよ」

頼まれた死神は

「わかった！急いで連れてくるから待ってろよ」と言い残し仲間の後から天に昇って行つた。

リンは感心してその様子を見ていた。

「凄いな。あんなに沢山の死神がルーさんの言いなりだ」

セオドアは

「ふーん。俺には全然見えねえ！まあ見たい光景でもないがな。お前もそう思うだろ？」とテレサに声をかけた。

「私は見てみたいわ！リンは目がみえなくても心の目で見てるのね。そう考えると私達よりリンは沢山のものが見えてるんじゃないかしら」と言つてリンをハツとさせた。

テレサの考え方はいつも僕を驚かせる…そんなところに惹かれたのかもしれない。

ルーは3人を部屋によんだ。

部屋の中は整然と片付けられて、この前とはまるで違う部屋のようにだ。

部屋の一番奥の椅子にローラのヒトガタが置かれており、それをはさんで初老の夫婦が座っていた。

「こちらはローラの御両親だ」

テレサは両親に自分の過ちを謝罪した。

「申し訳ありません。大事な娘さんのヒトガタを壊してしまいました。どう謝ったらいいか…」

ローラの母親はテレサに優しい目を向け

「いいんですよ。ヒトガタはしよせん物なんです。壊れることもありますよ。わざとではないことルー様から聞いています」と許してくれた。

父親は哀しそうに目をふせて

「ローラに会いたい。この日をどんなに待ち望んでいたか…」と言葉を漏らした。

テレサは二人の手をとり

「今日は私の体にローラさんをお呼びします。どうかローラさんの霊を慰めてあげてください」と励ました。

「おや？　どうやら死神が戻ったようだ。テレサ、心を落ち着けて目を閉じていなさい」

ルーの言葉どおりテレサは静かに目をつむった。

セオドアは緊張した面持ちでテレサをじっと見つめた。

「ルー様々！　ローラをお連れしましたぞ」

死神はローラの手をとりルーに預けた。

「ごくろうだったな。さあローラ、こっちへ！　この少女の身体にそっと乗りなさい」

ローラはうなずいてルーの言葉に従った。

目を閉じていたテレサはパツチリと両目を開いた。

「お…父さん、お母さん！」

テレサの身体を借りてローラは両親に抱きついていった。

「さあ、我らは退散するでしょう。家族水入らずでな！　ローラ、分かっていると思うがこの肉体にいられるのはせいぜい2時間くらいだ。それまでの間、両親とゆっくり過ごすがよいぞ」

ローラは涙ながらにお礼を述べた。「ありがとうございますルー様」
ルー達はそっとバラック小屋を出て行った。

リンはローラ親子の姿が脳裏に焼き付いた。

「なんだか羨ましいな。僕も父親と会ってみたいですよ」

「なんだ、リンも父親がいないのか？」

セオドアは初めて聞くリンの過去に身を乗り出した。

「ええ：村が焼き討ちにあってその時に：」その時、リン達の頭上でフワフワ浮いていた死神が声を上げた。

「ああっ！あんたどこかで見たと思ったらあの時の子供か！覚えてるか？あんたが森に捨てられたときに会った死神だよ！」

リンも驚いて

「ええっ！あの時の？」と聞き返した。

「そうだよ。俺はあの時助けを呼びに行ったんだ。戻ったらすでにあんたは居なくて：心配してたんだぜ。無事でよかった。本当によかったよ」

ルーは面白そうに死神に話しかけた。

「死神のあんたが人を助けるなんて：よっぽどリンが気にいったんだね」

死神は当時をおもいだしたのかグツと胸がつまった様子で

「あの時この子は俺に殺してくれて頼んだんです：絶望しきった顔で：でも安心しました。あの時の顔とは全然違う！生気がみなぎってる。しかもなんだか精霊の匂いがあります。おまえ、しっかり励んでるようだな」

リンは力強くうなずいた。

「死神さん、僕は生まれ変わったんです。もう逃げません！」

死神はウンウンとうなずいている。

「リンよ。おまえ生きていて良かっただろ？」とルーが聞いてきた。
「はい！」

リンは今とても幸せだった。

この幸せがなるべく長く続きますように…

リンは夜空に瞬くたくさんの星に祈りをささげた。

海賊の若様 前編

幸せな時は瞬く間に過ぎてゆく。

そろそろ約束の2時間になろうとしていた。ルーは部屋に戻り、ローラの前に座った。

「ローラ、時間だよ。御両親にお別れの挨拶はすませたかい？」

ローラは両親の手をもう一度ギュッと握りしめ

「身体を大切にしていね。それから、あんまり淋しがらないで。私はいつも父さん母さんを天国から見ているわ」と言うと、ルーに向きなおる

「ありがとうございます。安心してまた天国に帰れます」と礼を述べた。

「じゃあ目を閉じて」ルーはローラの手をとり、そっと引っ張った。するとローラの霊はするりとテレサの体から抜け出てきた。

テレサはドサリと横倒しになり、リンは慌てて駆け寄った。

「ルーさんテレサは大丈夫なんですか？」

「霊が憑依するとえらく体力が奪われる。心配するな、疲れて眠っているだけだ」

リンはそれを聞きホッとした表情を浮かべた。

「ルーさん、僕らはそろそろ失礼します。明日の朝にはこの街を出発しなければならないので」

「そうか…気をつけてな！おまえ達と逢えて楽しかったぞ。またどこかであえるかもしれん、それまで達者でな」

セオドアはヨイショツとテレサをおぶってルーの小屋をあとにした。

「なんだかセオドアさん、最近いつもテレサおんぶしてませんか？」
セオドアはゲラゲラ笑い

「まったくだ、このお転婆娘に振り回されてるよ。俺もおまえもさ」

とリンにウィンクした。

「ほんとにそうですね」

セオドアは真面目な顔でたちどまった。

「どうしたんですか？」

「こいつの事だが：俺は妹みたいに思ってる。恋とかそんなのじゃなく：家族みたいな存在なんだ。だからおまえ、俺に変な遠慮はするなよ」

リンはセオドアの心づかいにちよつとジンときてしまった。

「どうした？　なんか言えよ」

「セオドアさん…」

「ん？　なんだ？」

「セオドアさんっていい人ですよ。なんだか兄さんみたいだ」

セオドアは顔を赤くして

「バ、バカヤロー今頃わかったのか？」と照れまくっている。

「きつとロイが心配してますよ。さ、急いで歩いて下さいね！」

「お、おう！　よし宿屋まで競争だ！」

セオドアはテレサをおぶったまま駆け出した。

「ちょ、ちよつと待って下さいよ！」

リンは温かい気持ちになってセオドアを追いかけて行った。

「こら！　こらおまえ達！　もう朝だぞ。早く支度せんと生者の街に着くまえに夜になっちまう。ほら！　早く起きろ」

ロイは3人の布団をガバツと剥いでニヤリと笑った。

「ほら！　飯だぞ、早くしないと俺が全部食っちまうならな」

するとセオドアがさっと起きてきた。

「飯！飯！」

リンもむっくり起き上がってきた。

テレサは死んだように眠ったまま起きてくる気配はなかった。

「やれやれ、また夜更かししたな！仕方ないギリギリまで寝かせてやるか」

ロイは諦めて朝食を食べはじめた。

朝食が終わると、皆旅支度を整え出発の準備をすませた。

リンはやっと起きてきたテレサにパンを渡し、ラクダの上で食べるように言い聞かせた。

「そろそろ出発するぞ！準備はいいか？」とロイは声をかけた。

「大丈夫です。セオドアさんもOKですか？」

セオドアは腰に水袋をくくりつけていた。

「俺も準備出来てるぜ！」

「よし、では出発だ！」ロイのかけ声で一斉にラクダが立ち上がり、ゆっくりと歩き始めた。

霊おろしの祭りが終わり、生者の街に帰る人々がたくさんいて道は混み合っている。

ロイは振り返り一番後ろにいるセオドアに、しっかり二人を誘導するよう声をかけた。

「大丈夫だ！しっかり見張ってるよ」

セオドアはロイに手を振って答えた。

その時、後ろのほうからざわめきが広がってきた。

セオドアは何事だろうと振り返ると、そこには豪華な装飾を施した象に乗った一団がこちらに向かって歩いてるのが見えた。

「なんだありゃあ？王様の行進か？」

セオドアが驚いているうちに象の一団はロイの一行の真横に並んだ。先頭の一番きらびやかな象の上には、グレン・リンデンハイムが乗っておりテレサに向かって声をかけた。

「やあ、昨日のお嬢さん！」

テレサはいっぺんに眠気が覚めた。

「グレンさん！あなた一体何者なの？」

グレンはフフフと笑い

「あなたが美しく成長したら迎えに行きます。それまで私の事忘れないでいてください」と言い残して行ってしまった。

「おいテレサ、おまえアイツと知り合いなのか？」

セオドアは厳しい顔でたずねた。

「ええ、この帽子を買ってくれた人よ。あの人の事知ってるの？」
セオドアは渋い顔で

「アイツはな有名な海賊団の頭領グレン・リンデンハイムだ！おまえ、

凄いやつと知り合いになったな」

そんな人だったなんて…さっきあの人言ってたわ。私を迎えに来るって。どういう事かしら？それにしても変な人！

テレサはフフフと笑い、この事について深く考える事はなかった。

日が西に傾き、風が涼しく感じられる頃に一行はやつと生者の街にたどり着いた。

街灯が幾つも灯り、街は買い物客でごった返している。

海が近いのか波の音と共に磯の香りがリンの鼻腔を刺激した。

「ここは港街なんですか？海の匂いがしてきますね」

ロイは振り返り

「うむ、この港は西と東の交易の場だな。ここではなんでも手に入る。旨い物も沢山あるぞ！久しぶりに新鮮な魚でも食おうじゃないか」と言って皆を喜ばせた。

「じゃあまずは宿探しだな。こんな大きな街なら案内所があるはずだ。セオドア、ちょっと行って探してきてくれ」
セオドアは

「了解！」と叫ぶと人混みの中に消えて行った。

「ええと、すみません！宿屋の案内所はどこにありますか？」

セオドアは八百屋の店主にたずねてみた。

「港の入り口のところにあるよ。あんた早く行った方がいいよ。」

明日は武術大会があるから今日は特に混んでるんだ」

「武術大会？」

セオドアは目を輝かせた。

「ああ、なんでもリンデンハイムが婚約祝いの余興として武術大会を開くらしいんだ。優勝賞金が半端じゃないらしいよ。だから近隣の武術家や剣士が沢山集まってきてるんだ。兄ちゃんもいい体してるし、いっちょ力試しに出てみちゃどうだい？」

セオドアはすっかりその気になってしまった。

「面白そうだな！親父、ありがとう」

セオドアは港の案内所に向かって走りだした。

「波の音が近いぜ、こっちか？」

セオドアはその場に立ち竦んだ。

目の前にはおびただしい数の巨大な船がまるで街のように並んでいるではないか。

「す、すっげえ！」

よく見ると船にはすべて竜のマークが入っている。

「あれは全部リンデンハイムの船なのか？俺が放浪してるあいだにずいぶんと力を蓄えたようだ。こりゃあ海賊なんて言われるわけだよ」

セオドアはしばしその光景に見とれていたが、本来の役目を思い出し港の隅にある案内所に入ってしまった。

案内所の中は結構広いようだったが、すでに行列が出来ていてギユウギユウ詰めたった。

「ああもう、これじゃあラチがあかねえな」その時、係の者らしい若い女が整理券を配りにセオドアのところまできた。

セオドアはすかさずその女に銀貨を一枚渡し、耳許で囁いた。

「美しいお嬢さん、俺に特別穴場の宿を教えてください？明日の武術大会に出場するんだけど、これじゃあ闘う前に疲れちゃうよ」
女はハンサムなセオドアにそう言われて、まんざらでもない様子で「あら、あなた大会に出るの？じゃあもってこいの宿屋があるわ。そこはね、リンデンハイムのホテルだから出場者とその関係者だけが泊まれるの。一般客は泊まらないからまだ空いてるはずよ。選手登録カードを見せれば大丈夫！」

「その登録とやらはどこでするんだい？」

「ホテルでも出来るから大丈夫よ。直接行ってごらんさないな」
セオドアは一石二鳥だな。とほくそ笑み、早速ロイ達のところに戻って行った。

その頃テレサはすっかり待ちくたびれてリンに愚痴をこぼしていた。
「セオドアったらどこまで行ったのかしら？もうすっかり夜になっちゃったわ。ああお腹空いた！お風呂も入りたい！」

リンは困った顔でテレサを慰めた。

「きつとセオドアさんはいい宿を探してるんだよ。こんな都会は久々だしね」テレサは

「そうかしら。変なところだったら赦さないから！」とふて腐れている。

その時

「オーイみんな待たせたな！」とセオドアが息せき切って駆けつけた。

「もう、遅かったじゃないの！」

「すまんすまん！だが安くていいホテル見付けてきたぞ」
ロイはホテルと聞いて目の色を変えた。

「ホテルだと？ダメだダメだ！そんな贅沢したら次の街では野宿に

なっちまうよ」

セオドアはそんなロイには構わずに

「大丈夫だよ。安心してオレについてきな！」とみんなを先導して歩き出した。

商店街を抜けると街の景色はガラリと変わり、由緒ある建物が幾つもそびえたっていた。

「ほら、ここだよ」

セオドアが指し示したのはレンガ造りの5階建ての立派なホテルであった。竜の紋章がついている門の両側にはベルボーイが立っており、リンの一行に近付いてきた。

ロイはすっかり緊張して顔を強張らせている。

「いらっしやいませ。武術大会の出場者の方々ですか？」

セオドアは悠然とうなずいて

「そうだ！」と答えた。

「ではこちらで手続きをお願い致します。関係者の方々はそのちらでお待ちを」

ロイはキツネにつままれたような気分でホテルの分厚い絨毯を踏みしめた。

「素敵なホテルねー！シャンデリアが耀いて光のシャワーみたいよ」

テレサはすっかりご機嫌だ。

手続きを済ませ戻ってきたセオドアにリンはたずねた。

「武術大会って、なんのことですか？」

ロイもハラハラしながらセオドアの返事を待っている。

「明日、リンデンハイムの婚約祝いがあるらしい。そこで武術大会が開かれるんだ。ここはリンデンハイムのホテルで選手はただってわけさ」

ロイはそれを聞いてすっかり慌てている。

「じゃあなにか？俺たちは料金とられるの？」

セオドアはロイの背中をバシンと叩いて

「大丈夫だよ。関係者は格安で泊まれるし、なんせ明日は賞金が入る。だから心配なし！」

と言ってベルボーイの後について行った。

「ほらみんな、早く来いよ！」

ロイ達はまだポウツとしたままセオドアのあとに続いた。

海賊の若様 後編

ベルボーイは3階の部屋の前でたち止まった。

「こちらでございます」

ドアの向こう側にはリン達が見たこともない世界が広がっていた。細かい刺繍が施されたベッドカバー、大理石のバスルーム、大きな鏡の前には本物の薔薇が溢れんばかりに活けてあった。

「うわぁ、素敵なお部屋ねぇ！」

テレサは白い薔薇を一本抜き取りその香りを深く吸い込んだ。

セオドアは受付で貰った武術大会の案内に目を通してている。

ロイはふかふかのソファーにぎこちなく腰をおろすと、真剣な表情のセオドアに声をかけた。

「ずいぶんと待遇がいいんだな。武術大会には何人くらい出場するんだい？」

セオドアは書類から顔をあげ

「締め切りが今日の夜8時までだからきつと俺が最後のエントリーだな。俺の受付番号はつと：158だから158人もいるってわけだ。こりゃあ楽しみだ！」と目を爛々と輝かせた。

リンはセオドアの身に危険がないか心配していた。

「ルールはどうなっているんですか？武器に規制はなしなのかな？」セオドアはもう一度書類に目を落としニヤリと笑った。

「武器に規制はないな。どちらかが参ったと降参するか、失神するか：死んだら負けだ」

リンは顔を歪めた。

「死んだらって…そ、そんな！」

「ハハハ、心配すんなよ。俺の腕前を知らんな？俺に勝てる人間はそうそういないと自負してる。任せておけ！」

ロイは仕方なさそうに今日は早く寝るようにいいつけると、また酒

を呑みに部屋を出て行った。

部屋の灯りを消した後もリンはなかなか寝つけなかった。寝返りをうつリンにテレサはそっと声をかけた。

「リン：眠れないの？」

「テレサも？」

「ええ：やっぱり心配なもの。ねえリン、もし：もしもよ？セオドアが危なくなったらリンが助けてくれない？」

リンはテレサの方に向き直った。

「えっ？」

「セオドアはああ言ってるけど、明日は腕自慢が沢山来るわ。絶対勝てるって保証はないもの。ね、お願いよリン！」

リンは暫く考えこんだが

「わかったよ、命が危なくなったら助けるしかないね。でも勝負に手を貸すのはなしだからね！」

とテレサに釘をさした。

「ええ、わかってるわ！ありがとうリン：」テレサは安心したように布団に潜りこんだ。

なんとか無事に済めばいいけど：

リンはため息を漏らして布団を被り直した。隣からはセオドアのイビキが煩いくらい聞こえてくる。

それを子守唄がわりにリンは眠りについたのであった。

次の日、リンはシュツシュツという音で目を覚ました。

音のするほうを眺めるとセオドアが気付いて声をかけてきた。

「おはようリン、よく眠れたか？」

「セオドアさんこそ朝から何やってるんですか？」

「闘いの準備さ。ジャガル族の剣は研ぐのが結構難しいんだ。時間をかけて少しづつ研いでいかないと…でも、もう出来上がるから朝飯頼んでくれよ」

リンは皆を起こすと、モーニングサービスを頼んでテーブルについた。

暫くするとベルボーイがフレッシュジュースや焼きたてのパン、卵料理を運んできてくれた。

「おいしそ〜！」

テレサは思わず跳びあがって喜んだ。

「さあ、食べようか。いただきます！」ロイのかけ声で一斉に朝食を始めたその時、窓の外からドーン！ドーン！と花火のうちあがる音が聞こえてきた。

「大会開催の花火ね。セオドアは緊張しないの？」

テレサの問いにセオドアは不敵な笑みで答えた。

「緊張？俺はワクワクしてるよ。どんな奴が出てくるか楽しみだ」朝食を済ませたセオドアは

「俺は先に行って体をほぐしてくる。じゃあな、しっかり応援頼むぜ！」と行って部屋を出て行った。

テレサはセオドアを追って部屋を出た。

「セオドア、待って。待ってちょうだい！」セオドアは振り返ってテレサを見た。

なんだか泣きそうな顔をしている。

「どうしたんだテレサ？」

テレサはセオドアが着ているシャツの襟を掴み、背伸びすると自分の唇をセオドアの唇に押し付けた。

「あなたが好きよ。」

私をおいて死んだりしないで！」

セオドアは混乱する頭で

「あ：ああ、大丈夫だ。俺を信じろ。じゃあな、行ってくるぜ！」と平静を装い、階段を降りて行った。

セオドアは

「：参ったな。一本とられたぜ」と呟き、早鐘をうつ胸を抑えつつ会場に向かった。

会場の入り口には沢山の人だかりが出来ていて、なかなか前に進めないでいると会場係とおぼしき男が選手専用通路に案内してくれた。

「ありがとう助かったよ。しかし凄い盛り上がりようだな」

その男は愛想よくセオドアに微笑みかけて

「ええ、なんせ西の海を治めるリンデンハイムの頭領グレン様と東の海を治めるサルサラーンのユーリ様との婚約祝いですからね！この婚姻がまとまればエルダ海の半分は征服したことになります。お互いの国が繁栄すること間違いなしです。この婚姻を国中の人々が喜んでるんですよ」と言うではないか。

セオドアは自分の耳を疑った。

「サルサラーンのユーリだと？」

男はにこやかにうなずいた。

「ええ、男勝りな方だと聞いていましたがその美貌ですっかり国民の人気を集めています。この武術大会もユーリ様たつの願いで実現したとか：今日も観覧席から試合をご覧になるそうですよ」

セオドアは厳しい表情で自分の拳をギュッと握りしめた。

そのころグレンは武術大会を観戦するため、婚約者のユーリのいる船に迎えに行くところであった。

ユーリを乗せた船はいかにも女性が乗るのに相応しい華麗な細工が施されている。

どこかで香を焚いているのか白い煙が細くたなびき、やわらかいジャスミンの香りがグレンを優しい気持ちにさせていた。

「ルシン：ユーリは今日君が来ると信じているようだ。もし本当に来たらどうするつもりなのかな？」グレンはひとりそう呟くとクス

リと笑った。

その時、支度を終えたユーリが数人の侍女を伴い甲板にaggってきた。

「待たせたわねグレン、さあ行きましょう」グレンはユーリの優雅なドレス姿に目を奪われた。

「ユーリ：とても美しいよ。なんだか連れて行きたく無くなってきた」ユーリは微笑んで

「なあにそれ？」

とグレンの腕に手を回してきた。

「さ、駄々をこねないでエスコートしてちょうだい」

グレンはユーリの手の甲に口づけするとその手をとって歩きだした。闘技場まで行くための車に乗り込んだグレンは外の風景を眺めながら懐かしい子供時代を思い出していた。

グレンの父はまだリンデンハイム商会という貿易商であったが、強力な軍事力も持ち合わせていて周辺の国々からはとても恐れられている人物であった。

その強引な商売のやり方をあてこすり、みな彼を西の海賊王だと陰で噂していた。グレンはそんな彼のひとり息子として常に側におかれ、父の生きた帝王学を直に学ぶことができた。

まずは商い、そして強力な軍隊の育て方、人の動かし方まで徹底的に教育され将来人々の上にたつ者としての器量を身につけていった。あれはグレンが10歳の時だ。父はいつものようにグレンを連れて東の小国サルサラーンに交易にでかけた。

サルサラーンは代々女王が国を治めてきた小さな国だが、金山が幾つもあり経済は豊かであった。しかし、それゆえに敵も多く常に他国からの攻撃を防がねばならぬ宿命も負っていた。

父はサルサラーンの金を格安で手に入れるかわりに、強力な水軍を率いて他国の侵略を防ぐボディーガードのような役割を果たしていた。

子供であったグレンはまだそのような事情も分からず、ただ無邪気

に遊んでいただけだった。

サルサラーンの宮殿は白く輝き広大な庭園には花が咲き乱れ、孔雀が美しく羽を広げている。

「素晴らしい国ですね」

と父にいうと

「この国はいずれおまえのものだ。よく見ておくといい」

と言われ、なんのことか分からないでいるとユーリ王女を紹介された。

ユーリは短い髪を無造作に束ね、まるで男の子のようだった。

「あんたがグレン？」

「そ、そうだけど？」

ユーリはニツコリ笑い剣を渡した。

「私に勝ったらお嫁さんになってあげる！」

「えっ？ ええ〜！」

その時は冗談だろうと思っていたが実は違っていたのだ。

ユーリは真剣にグレンに向かってきた。

グレンは毎日、剣術の稽古は欠かしたことがなかったのにアッサリとユーリに負けてしまった。

「なんだ、つまらないの！ やっぱ一番強い男はルシンね。私はルシンと結婚することにするわ」

その時、味わった屈辱感は今でもはっきりと覚えている。

その時、肩をトントン叩かれグレンはハッと我に返った。

「どうしたの？ ずっと黙っていたけど：何か考えごとでも？」

「ああ、昔君にフラれた事を思い出してた」ユーリは

「そんなこともあったわね」と懐かしそうにしている。

グレンは楽しそうに錫杖をひとふりするとユーリの腕をとり、自分の腕に絡ませた。

「僕をフルなんて：いったいどんな男なんだろうってずっと気になってたんだ」

「彼はそんなに強いのかい？」思い出の中のルシンはユーリの母である女王をも感服させる天才剣士の凛々しい姿であった。

「ええそうね。彼の剣さばきはそりゃあ見事なものだったわ。私はなんども手合わせしたけど一回も勝てなかった…」

ユーリの目は明らかに恋をしている。

グレンはそんなユーリをじっと観察していた。

「ルシンに会いたい？」

ユーリはピクリと肩を震わせた。

「ええそうね。会いたいわ。どんな男に成長したか興味あるもの」

グレンはお手上げポーズでユーリにウィンクした。

「未来の夫の前でそう堂々と告白するとは！益々君が気に入ったよ」ユーリはフフと笑って

「あなたは？誰か気になる女性はいないの？」と聞き返した。

グレンはテレサの柔らかい金髪を思い浮かべた。

「うん：気になる娘はいるよ」

ユーリもグレンにウィンクを返して

「あらあら私達って似た者同士ね」と微笑んだ。

実際、グレンとユーリは子供の頃からの付き合いでずっと身内のように接してきた。

恋人というより同士と言ったほうがピッタリくるとユーリは思っている。

「ユーリ、今日の優勝者と戦ってみるよ。君の予想通りなら優勝するのはルシンのはずだ。一度そいつと手合わせしたいとずっと思っていたんだ」

ユーリは一瞬目を見開いたがその目は爛々と輝いていた。

「グレン、死んだら嫌よ」

グレンはクククと苦笑いを浮かべた。

「言ってくれるね」

二人が観覧席に座ると試合開始をつげる銅鑼がドーンと会場に鳴り響いた。

武術大会 前編

観覧席からは下の闘技場が一望できる。

グレンはオペラグラスをとりだし戦士達の顔をぐるりと見渡した。

「こう沢山いたらすぐには見つかりそうにないな」

ユーリも身を乗り出して下を眺めた。

「大丈夫、彼が出てくればすぐにわかるわ」自信をもって言い切るユーリにちよつとムカついたグレンは

「もう何年も会ってないんだろう？きつと様子もずいぶん変わってるよ。そう直ぐには分からないとおもうけどね」と言い返した。

ユーリは闘技場に目を落としたまま

「本物の天才はね、自ずと人の視線を集めてしまうものなのよ。見てなさい、あなたにもこの意味が直ぐにわかるわ」

と言った。

グレンはフンツと鼻を鳴らし、面白くなさそうにドツカリと席に座りこんだ。

「グレン様、ユーリ様、ご婚約おめでとうございます」

声のするほうを見ると品のある紳士とスーツをピシッと着こなした少年が立っていた。

グレンは慌てて立ち上がり挨拶を交わした。

「これはシュバイツァー公爵、お久しぶりです」

紳士はニツコリと笑い

「今日は武術大会と聞いて急いでまかりこしました」と言った。

「公爵は今年もマッドコロシウムに参戦されるのですか？」

「ええもちろんです。実は今日、力試しも兼ねてうちの戦士を出場させているのです。これが中々みどころがある奴でして：クラレンス！こっちにおいで」クラレンスは渋々父親の隣にならんだ。

「この息子が奴隷市場で買ってきたのですよ」

グレンは驚いたふりをして

「ほう、お若いのに目利きですなあ」と褒めそやした。

クラレンスは一言も返さずプイと横を向いて離れて行ってしまった。

「不躰な息子で失礼を…」

シュバイツァー公爵は申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいですよ。私もあの年頃の時はそうでした。さあ、そろそろ始まるですよ。一緒に観戦しましょう」シュバイツァー公爵は苦笑いを浮かべてグレンの隣に腰をおろした。

ユーリも公爵に気付き

「公爵、戦士の名は？」と尋ねた。

「レオといいます。きっと見たら驚きますよ！」

ユーリは愛想笑いを浮かべて

「それは楽しみですこと」といいながら、グレンに（きっと大したことないわよ）と目で合図を送った。

グレンはやれやれといった様子で闘技場に目をやった。

闘技場ではすでに最初の戦いが始まっていた。

一回戦は力の差が大きくあつという間に勝負はついていく。

「レオのヤツ緊張してないかな？ちょっと様子を見に行こう」クラレンスは退屈しのぎにレオを探すため、戦士の控えの間に降りていった。

闘技場の周りは観客がぎゅうぎゅう詰めに座っていて凄い熱気がたちこめている。

クラレンスはカインにうまく誘導してもらい、やっと控えの間に着くことができた。

控えの間は強靱な肉体の眼光鋭い男たちで埋めつくされていて、小さなレオなど何処にいるか全く見えない有り様だった。

「レオー！どこだ？レオー！」クラレンスは力一杯叫んだ。

近くにいた海坊主みたいに体の大きな男がギロリとクラレンスを睨

んだ。

「うるせえぞ坊主！邪魔だ、あっちにいけ！」

クラレンスはかまわず、また大声でレオを呼び続けた。

「うるせえって言ってんだろうがチビ！」

男はクラレンスの襟元を掴み、持ち上げた。

カインはとっさに男に飛びかかっていったが一撃でやられてしまった。

その時、一人の男が歩み寄り海坊主の手首を捻りあげた。

「そのへんにしておけ。坊主、大丈夫か？」その男はクラレンスが見たどんな女より美しかった。

「この野郎、女みたいな顔しやがって。俺が可愛がってやるぜ！ほら、こっち来いよ」

海坊主がその男のウエストに手を回した途端、海坊主はドウツと地響きをたてて崩れ落ちた。

「い、一体どうやって!？」

クラレンスが驚いていると

「大丈夫、峰打ちさ。しばらくすれば目を覚ますよ。それより人を探してるのか？」クラレンスはコックリとうなずいた。

「どれ、一緒に探してやろう。どんなヤツだ？」

男がそう言った瞬間、後ろから声がかかった。

「俺はここだ！クソ坊主、こんなとこまで一人でのこのこ来るんじゃないやねえよ」

クラレンスはレオに飛び付いた。

「レオ、レオ！あゝうるせえ。おい！手ぶらで陣中見舞いか？ジュースでも買って来いよ！」

クラレンスは急いで走りだした。

「ところでオッサン誰だ？」

「オッサンはないだろうオッサンは…俺はセオドアだ。おまえは？」

レオは鼻の下をこすりながら叫んだ。

「俺はレオ！聖獣使いのレオだ！」

セオドアは聖獣使いと名乗るその少年をまじまじと見た。

「おまえ…：武術大会にエントリーしてるのか？」

レオは力強くうなずいた。

どう見ても10歳くらいにしかみえない。

「オイオイ、年齢制限ないのかよ。悪いことは言わん痛い目を見ないうちに家に帰れ！まったく呆れたもんだぜ。こんな子供を出場させるなんて…：いったいどんな親だ！」

ブツブツ文句を言うセオドアにレオはキツパリと言った。

「兄ちゃん、俺に親はいねえんだ。それに人を見た目で判断してるそっちこそ痛い目みるぜ。命が惜しかったらどんな相手でも油断しちゃ駄目だ」

あいた口が塞がらないでいるセオドアを尻目にレオは

「さて…：そろそろ俺の出番だ。ちょっと行ってくらあ。兄ちゃん、俺のジュースやるよ！じゃあまたな」と走り去った。

セオドアはアイツとは当たりませんように！と心の中で祈った。

「あれ？レオは？」

両手にジュースの瓶を持ったクラレンスが、荒い息を吐きながらセオドアにたずねた。

「そろそろ出番だからって駆けていったぜ」

クラレンスは残念そうにセオドアにジュースを手渡した。

「さっきのお礼です」

「おっ！気が利くな坊主。ところでアイツの武器ってなんなの？教えてくれよ」

クラレンスはフツツと微笑んで。

「もうすぐ出番です。一緒に観戦しましょうよ。百聞は一見にしかずですよ」

どうやらこの子供達に口では勝てそうもないな。と悟ったセオドアは黙って闘技場を見つめた。

舞台の上では、レオと両手に剣を携えた男が対峙していた。

「オイオイ、レオのヤツ何も武器を持ってないぜ!? まさか…素手?」

セオドアは慌てて隣のクラレンスの腕を掴んだ。

クラレンスは対戦表をポケットから取り出すとセオドアに広げて見せた。

「もしかしてこれ、見てないんですか? 対戦 相手の名前と武器がちゃんと書いてあるでしょう?」

セオドアは対戦表を奪いとり、レオの名前を探した。

「…あった! ええと武器は亀。カ…カメ…?」

セオドアは頭を抱えた。

「オイオイ冗談キツイぜ。もうついていけんわ! それより相手だ相手! 弱いヤツならなんとかなるだろ」

対戦表を目で追っていくと、セオドアは渋い顔で紙から目を離した。

「ガダラ流師範だによ。アイツ…殺されないか心配だぜ」

クラレンスはそんなセオドアの言葉を気にする様子もなく目を爛々と輝かせ、試合開始の合図を待っている。

「ドーン!」

銅鑼の大きな音が闘技場に鳴り響いた。

「オイ小僧、痛い思いをする前に参ったと言ったほうが利口だぞ!」

レオはニタリと笑い

「そのセリフそっくりそっちに返してやる」と叫ぶと懷から何かを取り出し、相手に向かって投げつけた。

それはシュルシュルと凄いスピードで飛んで行き、相手の服をかす

めた。

男はすかさず剣でその飛んできた物体を切り捨てたつもりだったが逆に剣の方がパキン！と音を立てて折れてしまった。

「な、なに！？」

相手の男はさすがに焦ったがそれも一瞬だった。

もう一本の短刀を持ち変えてレオめがけて飛びかかって行ったのだ。

レオは小さな両手でその刃を挟み、ぐっと力を入れた。

「ウギヤアアア！」

その時、短刀から火花が散り、相手はビクビクと痙攣を起こしバツタリと倒れた。

相手の男からは煙がたち昇っている。

会場は一瞬鎮まりかえり、その後は割れんばかりの大歓声と拍手でレオの健闘を讃えた。

いつの間にか玄武はレオの頭の上にちゃっかりと鎮座している。

観客席で見ていたテレサは、隣にいたリンを興奮のあまりバシバシ叩きながら

「驚いたわねーリン！まさかレオがこの大会に出てるなんて。しかも勝ったわよ！」と、叫んだ。

そんなテレサをリンは複雑な表情を浮かべて制した。

「落ちていてテレサ！レオがどうなったか気になってたんだ…。まさかこの武術大会にでてるなんて…一体どんな人を買われたんだレオ？そこにいるのは君の意思なのか？」

リンは舞台から降りて行くレオの後ろ姿を思い浮かべ、大きなため息をついた。

舞台袖では、試合を見守っていたクラレンスが飛び上がって喜んでいた。セオドアは冷静に今の戦いを頭の中で再現させていた。あれはまるで雷に撃たれたように見えた…と、いうことは感電だな。しかし、アイツ自身でそんなことは出来っこない。キーポイントはあの亀か？

「だしたら正攻法では勝てないぜ！」

思わず声に出して頭をかきむしっているセオドアを見て、クラレンスはニヤリとほくそ笑んでいた。

すました顔で舞台から降りてきたレオにクラレンスは飛び付いた。

「やったねレオ！会場は大興奮だ」

レオは鼻の下をこすりながら

「まだ一回戦だぞ、喜ぶのはまだ早いぜ！」と、ニヤケそうになるのをこらえながら言い放った。

「よくやったな坊主。おまえの腕も大したもんだが、あの武器には参ったぜ！あれは一体何なんだ？ただの亀じゃあ無さそうだ」

レオはそう言うセオドアをからかうように

「さあね。あんたが勝ち残ればいつか俺と当たるだろ、まずはあんたも勝って俺と戦えよ。そうすれば判る！」とニヤニヤしている。なるほどね、そうきましたか：

こりゃあその鼻っばしらをへし折ってお灸をすえてやらないとね。教育的指導ってヤツが必要だな！

セオドアは心の中でそうつぶやき、しゃがみこんでレオと視線を合わせた。

「坊主、おまえこそ途中で負けるなよ。対戦表を見てみる、決勝まで残らないと俺とは当たらないぜ」

レオは負けじとセオドアの顔に自分の顔を近付けて

「兄ちゃんこそちゃんと対戦表見た方がいいぜ。こんなとこにいいのかい？対戦相手が待ちくたびれてるようだけど？」

セオドアはハツとして舞台を見ると、既に審判が時間を計っていた。規定では3分待っても相手が舞台に立たなければ棄権したとみなされ失格になってしまう。

「ヤッバー！！」

セオドアは観衆をかき分け舞台に駆け上がった。

「よ、よう！待たせたな」

審判はセオドアをチラリとみてもう一度時計を確認した。

審判はうなずき右手を高々と挙げると、それを合図に試合開始を告げる銅鑼が会場に鳴り響いた。

相手は立派な髭をたくわえたまるで仙人のような老人であった。

蒼白い殺気のようなオーラが辺りを覆っている。

セオドアは相手の出かたを見るために直ぐには飛びかからず、ギリギリと距離を縮めて行く。

武器は槍か…。

こいつかなりの使い手だ！

セオドアは目の前に立ち塞がる老人の全く隙のない構えに、どう斬り込んでいくべきか思いあぐねていた。

その頃、観覧席ではレオの勝利にシュバイツァー公爵が大喜びしていた。

「どうですウチのレオは天才でしょう？ まだ子供だというのに既に敵なしなのですよ」

得意満面といった様子にグレンは苦笑いを浮かべた。ユーリの方を見ると、舞台の方に目が釘付けになっている。その目は次第に見開かれ、驚きの表情に変わり頬には一筋の涙が流れた。

「見つけたわ…ルシン！」

グレンは観覧席を立ち上がりユーリの肩に手を置いた。

「どうやら見付けてしまったようだね」

君の愛しいルシンの腕前、しかと見せて貰うよ…

グレンは白髪の老人と向かい合う、美しい剣士をじっと見つめた。

「どうしたお若いの？ そちらから来ないのなら、こちらから参りますぞ！」

老人は槍を両手でぐるぐると回し、セオドアに向けて飛び掛かって行った。

セオドアは回転する槍をじっと見詰めながら攻め込むポイントを見きわめた。

「そこだぁ！」セオドアはそう叫び円を描くように回転する槍の中心に剣を突き刺した。

回転は止まり、老人の両手は血でまみれていた。

「フフフ、さすがに勇者の剣の持ち主だけありますな。楽しませて貰いましたよ」

老人はそう言うと、すうっと姿を消してしまった。

「！…お、おい？どこに行ったんだ？おっちゃん。オーイ！」

会場では一体どうしたのだろう？と観客がザワザワしている。

審判は時計を見て、カウントを始めた。

「：3分です。セオドア選手の勝ちとします」

セオドアは納得いかない顔つきで舞台を降りた。

試合を見ていたクラレンスとレオは不機嫌そうな顔つきのセオドアに声をかけた。

「おめでとうございます。見事な戦いぶりでしたね！」
そう言うクラレンスに

「納得いかねえ！最後まで戦えってんだ。逃げ出すなんて…ああもう！もう一度戦いたいぜ。あのおっちゃん、相当な腕前だった。もう少し相手をしてもらいたかったな」とぼやいている。

隣にいるレオはずっと黙りこんで何か考え込んでいるようだ。

「どうしたのレオ？何か気になることでもあるの？」

「あのじいちゃん…どこかで会ったことがあるような…どこだったかなあ。ウーン思い出せねえ」

その頃客席にいるテレサ達はセオドアの勝利を祝い酒盛りを始めていた。

「かつこよかったわーセオドア！リンにも見せてあげたかった」

リンは見えはしないが空気の動きとオーラで充分、先程の試合が相当レベルの高いものだったことを感じていた。

相手はかなりの使い手だったなあセオドアさんががんばりましたね！それにしてもあのオーラ…どこかで感じたことがあるような…。どこだっけ？

リンはしばらく記憶をたどってハッと思い出した。

そうだ！あの時だ、奴隷市場でレオを競り落とそうと貴族の少年と競り合っていた老人。間違いない！

そこまで思い至った時、リンは何か釈然としない思いにかられた。これは偶然？それとも…何かあるんだろうか？

「テレサ、僕をレオのところに連れて行ってくれ！」

テレサは

「レオですって？どうしたの、私会いたくないわ生意気で腹立つもの」

リンはため息をついて

「じゃあセオドアのところに行こう！お祝いを言わなくちゃ…ね？」

テレサは歓喜で頬が赤らんだが、それとさとられないように

「ええ、仕方ないわねえ。じゃあちよつとだけよ」

と言うと、リンの手をとり人ごみに入って行った。

武術大会 中編

テレサはリンとはぐれないようにしっかりと手を握りしめながらセオドアを探した。

「テレサ、どうだい？そこから見える？」

リンは暑さでハアハア息を切らしながら声をかけた。

「ええ、しっかり見えてるわ！もう少しなんだけど凄い人ごみで中々近づけないのよ」テレサはそれでもなんとかリンを庇いつつセオドアのところにたどり着いた。

テレサはしばしの間、声をかけずにセオドアの姿にみとれていた。戦いが終わってもまだ興奮が冷めないのかセオドアの顔は厳しさを残しており、凜々しい横顔はまるで彫刻のように美しい。少しだけ：少しだけこうしてあなたを見詰めていたい。

どうしよう：私本気でセオドアのこと：。

「テレサ？どうしたの？」

リンの声でテレサはやっと我に帰った。

「ご、ごめんねリン。ちょっと暑さでボ～ッとしちゃった！」

テレサはセオドアの隣にレオの姿も見つけた。

「セオドア！それにレオもいたのね。二人とも勝って二回戦進出ね。おめでとう」

セオドアは驚いた顔でテレサを見た。「おまえ達、知り合いだったのか？」

「あら、セオドアだってレオのに会うのは初めてじゃないはずよ」
「：？」

「セオドアがロイに買われた日、あの競りにレオも出ていたのよ」
レオはうなずいて、後ろに隠れていたクラレンスを引っ張り出した。

「そう、そこでこれが俺のご主人様ってわけ」
クラレンスはもじもじとレオの後ろにまた隠れてしまった。

「レオ、向こうで少し休もうよ。次の試合までに体を休めておかなくちゃ！」

クラレンスはどうもこの場の雰囲気馴染めず、レオを連れ出した
いようだ。

「ちょっと待って！聞きたいことがあるんだ」リンのよびかけに、
クラレンスは動きを止めた。

「あ、あの…どうして君はレオを選んだの？最初から戦士にするつもりで選んだのかい？」

クラレンスはみるみるうちに不機嫌な顔つきになった。

「一体何が言いたいのかな？」

そこにセオドアが割って入った。

「リン、止めておけ！みんな事情があるのさ。それがいいことか悪いことか判断するのは自分自身なんだからな。周りがあれこれ言うことじゃない！」

「……………」

リンはそう言われて黙りこんでしまった。

「ふん、よくわかってるじゃないか。僕だって無理やりレオを試合にだしてる訳じゃないさ！レオ、行こう」

「あ…ああ！じゃあな。兄ちゃん、決勝で会おうぜ…またな」

レオは仕方なさそうにクラレンスに引きずられて行ってしまった。
まだ言いたいことはいっぱいあったのに…。リンは唇を噛みしめて
首をうなだれた。

セオドアはリンの肩をポンポン叩き、慰めた。

「すみませんセオドアさん。僕余計なこと言っちゃいましたね…次の試合もまた頑張って下さい。じゃあ僕達、席に戻ります」

テレサはまだセオドアのそばに居たかったが、リンの元気のない顔を見てやはりその場を退散することにした。

「じゃあ私達行くわ、セオドア：あの、あの私！」

セオドアはテレサの方をじっとみた。

「ん？なんだ？」

その時、透明だったセオドアの指輪が真っ赤に輝きだした。

すると人混みからずっと赤いドレスを着た美女が現れた。

観客達の視線は一斉にその女に吸い寄せられている。

女は美しい脚をドレスの裾から覗かせてゆつくりとこちらに歩いてくる。

「お、おまえ！どうしてここに？」ウンディーネはニツコリと微笑みセオドアの左手をとって指輪を撫でた。

「これがね、危険を知らせたのよ」

ウンディーネは赤く輝く指輪にキスをした。すると指輪はみるみるうちに元の透明な指輪に戻っていった。

セオドアは不思議そうに指輪を眺めて

「別に何も変わったことは無かったがなあ」とブツブツ文句を言っている。

「ダーリンは鈍感だからな、まあよい！こうして会えたのは嬉しい限りじゃ。今日はゆつくりと試合見物でもしてゆくとしよう」

ウンディーネは席に座り、二階の観覧席に目を止めた。

「フフ、凄い殺気じゃな。犯人はあやつか？だとしたら少し牽制しておく必要があるそうじゃ！」

ウンディーネはおもむろにセオドアのあごに手をかけると、思い切り唇を重ねた。「ん：んんん：！お、おい急なんだよ」ウンディーネはチラリと観覧席に目をやり、セオドアに抱きついた。

「しばらくぶりなのでつい：な」

セオドアはすっかり先ほどまでの尖った気持ちは吹き飛んでいた。

「ダーリン、次の相手はどんなやつなのだ？セオドアは対戦表を開いた。

「ネブル族、武器はマリオネット…ってなんだ？」

「マリオネット…操り人形じゃな。なんだか面白そうではないか」
ああ、まためんどくさそうな相手だな。

レオの相手は…クリステイナー？女かよ！

「どうした？ダーリン」

「いや、なんでもねえよ。世の中広い！どんなヤツが出てくるか楽しみだぜ！」

ウンディーネが観覧席を振り替えると、すでに殺気を放っていた女は消えていた。

あの女、何を企んでいる？

ウンディーネはセオドアの腕にしっかりとしがみついた。

テレサはウンディーネの登場にびっくりして、ただその場に立ち尽くしていた。

私ったら…私ったら何を言う気だったの？

バカみたい！見てよセオドアのあの顔！鼻の下伸ばしちゃって。

大嫌い！大嫌いよ…。

「行きましようリン！邪魔しちゃ悪いわ」

テレサは拳をギュッと握りしめ、怒りで肩を震わせながらそう叫んだ。

ウンディーネはやっとテレサ達に気付いてニコツと笑いかけた。

「おやまあ、おちびちゃん達も来てたのかい。ダーリンの応援してくれてるんだね。ありがとう」

テレサは女房気取りのウンディーネにとうとうキレた。

「おばさん、私達レオの応援に来たんですよ。セオドアなんかレオにコテンパンにやられちゃえばいいのよ！アッカンベ〜」

キョトンとしている二人を残して、テレサはリンの手をとり駆け出しました。

悔しい、悔しいけど今の私じゃあの女には勝てないわ！決めた、私絶対魅力的な女になる。セオドアが振り向かずにはいられない女に！

テレサは泣きながら走り続けた。

「待って…待ってよテレサ！ああっ…！」

リンはテレサの足に追いつかず転んでしまった。

テレサは慌ててリンを助け起こした。

リンの膝は少し皮が剥けて血が付いていた。

「ごめんね、痛い？何か被う物はないかしら…」

テレサが周りをキョロキョロ見回していると、ずっと白い手が伸びてきて薔薇の刺繍のあるハンカチを渡してくれた。

「これをどうぞ」

「すみません助かります。でも…いいんですか？こんなに素敵なハンカチ」

女は微笑み

「いいのよ。気にしないで使って頂戴」

「ではありがたく使わせて頂きます。後で洗濯して返しますね。あの…お名前は？」

「クリスティーナよ。ハンカチはあなたにあげる。ではまたね！」
テレサはポツツとしてクリスティーナを見送った。

「優しい人ね。顔は仮面を着けてて見えなかったけどスタイルいいし、きつと美人よ」

膝に結んだハンカチからは薔薇の香りが微かに感じられた。

「なんだか洗練された感じの人だね」

「見えなくても分かるのね。ええ、なんだか高貴な感じの人だった

わ」

テレサはリンの手をギュッと握りしめ、ゆっくりと歩き始めた。二階の観覧席ではグレンがやれやれといった顔で下の様子を眺めている。

全くユーリときたら相変わrazuのじゃじゃ馬だな。ライバル登場でさすがに焦ったとみえる。しかし：あれは一体誰なんだ？今まで見た中でも最高の美女だ！ルシン：ますます君を倒したくなったよ。ユーリは戦闘服に着替えて、鳳凰の文様が入った剣を背負い試合の準備をしていた。

「待ってろよルシン！今こそあの約束を果たして貰うぞ」前の試合が終わり、審判が右手を上げた。

レオは鋭い目つきで相手を睨んだ。「ふん、お前がクリスティーナか、女のくせに生意気だな！仕方ない、なるべく早く片をつけてやる。おら、かかってきな！」

ユーリはプツと吹き出して

「お前こそなんでこんなところにいる？ここは子供の遊び場じゃないんだぞ。早くお母さんのところに帰れ」と言い返した。

レオは顔を真っ赤にして怒り出した。

「俺を本気で怒らせたな！もう手加減なんかしてやらねえぞ！」

レオは片手を天にかざして叫んだ。

「雨を司る北の聖獣玄武、出でよ！」

すると、高く掲げた手がキラキラと金色に輝き玄武が現れた。

ユーリは一瞬驚いたが、現れたのが小さな亀だったので拍子ぬけしてしまった。「さあ、かかってきな！」

ユーリは小さな亀をつきだして構えているレオを見て途方に暮れた。会場からはクスクスと笑い声が聞こえてくる。

仕方なくユーリは剣を構えた。

その時、舞台のそでから声がかかった。

「ユーリ！その亀は電流を出すぞ、油断するな！」ユーリはハツとして声のする方を振り返った。

そこには恋焦がれたルシンの姿があり、ユーリは思わず心が躍った。それにひきかえセオドアは惘然とした目でユーリを見ていた。

相変わらずの跳ねっ返りだな！

婚約者もなんで止めないんだ？こんなことバレたらおおごとだぞ！とにかくここは無事に収めないとい……

ユーリの態度に業を煮やしたのか、レオの方から攻撃を開始した。玄武はみるみるうちに大きくなって宙に浮き、ユーリを押し潰そうとドタン！と落下してきた。ユーリは間髪で避け、玄武の背中に乗ってその剣を突き刺そうと剣を構えたが、すぐにレオが飛び乗ってユーリと揉み合いになっている。

その様子を見ていたウンディーネが、突然大声で叫んだ。

「玄武！玄武じゃないの！？」

セオドアはウンディーネを不思議そうに眺めた。

「お前なんであの亀のこと知ってるんだ？」ウンディーネはプリプリ怒って答えた。

「知ってるも何も、あの子は私のペットなのよ！ずっと行方不明で心配してたんだからあ！玄武、私よ。さあ帰っていらっしやい」

玄武はウンディーネに気付くと、あつというまにもとの小さな体になりピーピー鳴いてウンディーネのところに這っていつてしまった。振り落とされたレオとユーリは呆然としている。

レオは思わず舞台を降りてウンディーネの胸に抱かれている玄武のもとに走り寄ったその時、審判の笛がピリリと鳴った。

「反則によりクリスティーナの勝ちとします」

「な、なんだと！？」

レオは審判にくってかかった。

「試合中に舞台を降りたら負けですよ！」

ショックでしゃがみこむレオをクラレンスが助け起こした。

見兼ねたユーリも舞台から降りてきた。

「残念だったわね坊や。その亀なかなかやるじゃないの！あんたが育ててるの？」

レオはこっくりとうなずいた。

ユーリはウンディーネを睨み付け

「その亀はこの子のよ、返しなさい！」と言い放った。

「な、なんですって！？この子は私のペットなのよ！」

睨み合う二人の女を前にセオドアはおろおろするばかりであった。

玄武はそんなことはお構い無しにすっかりウンディーネの胸でくつろいでいる。

「玄武！どうしたんだ。俺の事忘れちゃったのかよ？」

レオは目に涙を貯めてその光景を見ていた。

その時、一人の老人が姿を現した。

「ウンディーネ様、玄武をその子に返してやって下さいませ」

ウンディーネはその老人をギロリと睨んだ。

「バルト、お前の仕業だったのね？」

セオドアはアツと声をあげた。「さっき俺と対戦したじっちゃんじゃないか。ウンディーネの知り合いなのか？」

ウンディーネは仕方なさそうにうなずいた。

「ええまあね。それより、なんでそっちのかたを持つのよ！私がどんなに玄武を可愛がっていたか知らないわけじゃないわよね？」

バルトは目を見開いて答えた。

「だからこそ！でございます。このところの玄武ときたら、あなた様が甘やかしてばかりいるのですっかり霊力が弱まってしまいました。これではとても聖獣とは呼べません！ですから私も玄武に仕える神官達はあえてあなた様から玄武を引き離し、修行させることにしたのですよ」

ウンディーネは苛立たしげに地団駄を踏んだ。

「勝手なことを！見ろ、玄武のこのやつれぶりを。可哀想にとんで

もないヤツに拾われてしまつて……」

ウンディーネは玄武の甲羅を優しく撫で擦った。

バルトは深いため息をついて玄武に尋ねた。

「玄武よ、レオはお前が選んだ相手だ。レオを放ってウンディーネ様のもとに帰りまた惰眠を貪るつもりか？ 本当にそれでいいんだな？」

玄武は短い首を精一杯伸ばしてウンディーネの顔をのぞきこんだ。
ウンディーネはウンウンうなずき

「もう充分修行したでしょ？ 帰っておいで私のところに」と玄武のつぶらな瞳をじっと見返した。

玄武はおもむろに後ろを振り返った。

そこには今にも泣き出しそうなレオが独り寂しげにたたずんでいる。
玄武はフワリと浮かんでウンディーネに何事か訴えろと、くろりと踵をかえしてレオのもとにプカプカ飛んで行き、その頭にドツカリと座りこんだ。

「玄武ったら……！ 本当にそれでいいの？」

玄武はすでにスヤスヤと眠ってしまったている。

「玄武……！ やっぱりお前は俺の最高の相棒だぜ」レオは涙をゴシゴシ腕で拭った。

バルトはレオの肩に手を置いて、頭の上の玄武に目をやった。

「レオ、玄武に仕える我々神官はずっとお前を見守ってきた。玄武がえらんだ主ならば我々にとっても主なのだ。玄武共々修行を積んで、立派な聖獣使いになりなさい。朱雀、白虎、青龍それぞれの聖獣使いも皆、修行に明け暮れておる。いずれ会う機会も訪れよう。

その時を楽しみに励むがよい」

ウンディーネはレオに

「そうよ！ 私に恥をかかさないようにね。あの生意気なサラマンダーやシルフ、ノームには負けられないわ！ 10年に一度、四神は互いの力を確認するために試合する事になってるのよ。前回の屈辱は晴らさないと……」ブツブツ言っているウンディーネは放っておいて

セオドアはレオに話しかけた。

「とりあえず良かったな坊主、次に会う時は楽しみにしてるぜ！マツドコロシアムにも出るんだろう？」

「もちろん出るよ。その時は絶対兄ちゃんに負けないぜ！なあ玄武？」

玄武は大きなあくびをしている。

「兄ちゃんは今から試合だろ？頑張れよな！」

「フフッありがとよ！」

レオはユーリにも礼を言った。

「姉ちゃんもありがとう。試合には負けちゃったけどおかげで玄武は戻ってきたぜ。姉ちゃんも試合頑張ってくれよ」

ユーリはニツコリと笑い

「もちろんよ！お姉ちゃんね、このお兄ちゃんには絶対負けたくないの」と、セオドアの顔を見ながら言った。

セオドアはニヤリと笑い

「ユーリ、久しぶりだな。しばらく見ないうちにスゲー美人になっちゃまって驚いたぜ！婚約者の男は果報者だな。おっと、まだ祝いも言ってなかったな。婚約おめでとう！」

ユーリはぐっと唇を噛んだ。

ウンディーネはセオドアに尋ねた。

「ダーリン、知り合いなのか？」

「ああ、昔からの：な」

ウンディーネは胡散臭げに二人を見ながら口をひらいた。

「では話しておかねば！実は私達も先日婚約したばかりでな」ユーリはエツと息をのんだ。

よく見ると、セオドアの指には婚約指輪がはまっていた。

「そ：そうだったの。おめでと～」

セオドアは複雑な表情でユーリの歪んだ頬を見ていた。

「おや？そろそろダーリンの試合ではないか？」

セオドアはうなずいてその場を離れようとしたその時、ユーリが叫んだ

「ルシン！あの約束覚えてる？」

セオドアは一瞬立ち止まったが、そのまま振り返らずに歩み去った。

「ダーリン、約束とはなんじゃ？」

セオドアは不機嫌そうに

「なんでもねえよ。それよりお前はそろそろ帰れ、神様がサボッてばかりじゃあ困るだろ」

と諭した。

「ウム、そうするでしょう……どうやら心配は無くなったようだな」

「ん？何か言ったか？」

ウンディーネは首を振り

「いいや、なんでもない。ダーリンに会えて嬉しかったと言ったのじゃ！それではまたな」

セオドアはウンディーネがキラキラと光を放ちながら消えてゆくのをみながら、ユーリの哀しげな顔を思い出していた。

武術大会 後編その1

セオドアはまずは試合に集中しなければと自分に言い聞かせた。

ユーリ：この試合に俺が勝てば次は決勝であたるはずだ。

あの約束：か。もうお互い別々の道を歩み始めた。もう無効だよユーリ、お前もわかってるはずだ…。

セオドアは剣を布で拭きながら精神統一をはかろうと只ひたすらに剣の耀きを見つめていた。

その時、背後から異様な臭いが漂ってきてセオドアは思わず鼻をつまんだ。

「なんだ？この魚の腐ったような臭いは！」セオドアは思わず立ち上がって周りを見渡した。

すると風上に、ひどく美しい若い男と異様に背の小さな男がこちらをじっと見ているのに気がついた。

「あんたがセオドアさんかね？」

「そうだが：あんたは誰だ？」

セオドアはあまりの臭さに目がしみて、涙が浮かんできた。

小さな男は奇妙なくらい目と目が離れていてまるでナマズを思い起こされる容貌だった。

そのナマズ男はニヤニヤしながら

「そうか。あんたがね。こりゃあイイ男じゃないか！欲しい、ぜひ欲しい。俺のコレクションにぴったりだ」と、嬉しそうにしている。

「俺はあんたの対戦相手の口ロだ。こっちは相棒のダニエル。試合前に挨拶に来たんだ。よろしくな。俺はあんたが気に入った！だから傷つけんように戦う事にする」
セオドアはイライラしながら

「何をごちゃごちゃ言ってるんだか知らねえが、こう臭くちやたまったもんじゃねえぜ!」と鼻が紅くなるのも構わず、さらにギョツとつまんだ。

「フヒヤヒヤヒヤ、楽しみ楽しみ!」

ロロはウキウキした様子でダニエルを連れて戻っていった。

「ああ、また変なのに当たっちゃったな。せつかく研いた剣に臭いに移りそうだな。よし!今回は短期決戦でいこう」

舞台に上がったセオドアをじっと見つめるグレンの手には銀の短刀が何本も光っていた。どれも銀製で柄には龍の紋様が施しており、目の部分はアメジストで出来ている大層手のこんだ物だ。

「頑張って勝ってくれたまえよ!でなきゃ僕の出番がなくなるからな」

セオドアは舞台に上がり、観覧席を見た。しかしユーリの姿はない。代わりに眼帯を着けた男がこちらに冷たい視線を送っているのが見えた。

あれがユーリのフィアンセか?

セオドアとグレンの視線は一瞬火花を散らしたが、直ぐにグレンは立ち上がりどこかに行ってしまった。

あの目:ユーリのヤツ何かしでかす気か?

セオドアは舞台に上がってきたロロとダニエルに視線を移した。

「オイ!審判、なんでそっちは二人なんだ?そんなのありかよ!」

セオドアの大声が会場に響き渡り、観衆たちからもブーイングが聞こえてくる。

「これは武器でからくり人間です。ちゃんと武器の審査も受けて合格しとりますよ」

ロロは平然としている。

「嘘だというならどうぞ、こっちに来て確かめて下さいよ」

審査はセオドアに許可を出したので遠慮なく、ダニエルに近づいて行った。

「触ってもいいか?」

「もちろんですよ。よく見てやってください。美しいでしょう？まるで芸術品だ！」

セオドアはダニエルの頬に手を触れた。

「こ、これは人間の皮膚だ！」

ロロはニンマリと笑い

「そうです、外側は人間ですよ。しかし中身は私が造った機械なんです。綺麗に中身だけくりぬくのは中々大変な作業でしたよ」と、平然としている。

まるで人間の剥製じゃないか！コイツ完全に狂ってる！

セオドアは一気に背筋が寒くなった。

「君もういいかね？」審判の声でセオドアはハッと我に返った。

「は、はい！すみませんでした」

審判は右手をあげ、試合開始の銅鑼が鳴った。

セオドアは不気味にたたずむダニエルに斬りかかっていった。

「この化け物め！俺が成仏させてやる」

セオドアは様子を見るため、まずは正面から斬りこんでいった。

キーン！！

と金属同士がかち合う音がして、セオドアはギョツとした。

ダニエルは金属で出来た腕でセオドアの剣を防いだのだ。

「チッ！びくともしねえ」

ダニエルは腕を真っ直ぐに伸ばしセオドアを指差した。

ずっと無表情だった顔が初めて笑顔を浮かべたその瞬間、指先から毒針が発射された。

セオドアは素早くかわしたが、次々に毒針は発射されてくる。

クソッよく出来たお人形さんだな！

ロロのヤツ、楽しそうな顔しやがって！

じゃあそろそろ本気出して行きますか！

セオドアは目にもとまらぬスピードで毒針を剣でなぎはらった。

その毒針は口ロに向けて真っ直ぐに飛んで行った。

「ギエエ〜！」

ロロの頭には毒針がビッチリ突き刺さっている。舞台袖で見ていたレオは腹を抱えて笑っている。

「アハハハまるでサボテンじゃねえか」

痛くて悶えているロロの滑稽な姿に会場は笑いの渦に包まれた。

ロロのジタバタする姿をみた審判が、試合続行不能とみなしセオドアの勝ちを宣言した。

「なんだ、もう終わり？」

すっかり武装を固めたユーリはつまらなそうに舞台を眺めた。

もっとルシンの戦う姿を見ていたかったのに！

ユーリは舞台のセオドアに向かって叫んだ。

「ルシン、私はあの約束忘れてないわよ！私が勝ったらあなたは私の夫になるの！婚約者なんて関係ないわ。なんせ女王は3人の夫を持てるんですもの」

セオドアはぎょっとして後ろを振り返った。

武術大会後編その2

セオドアが後ろを振り向くと、白い甲冑を身に付けたユーリがニヤリとこつちを見ていた。

セオドアはため息をついてその熱い視線から逃げると舞台から降りてきた。

ユーリの方に全く目もくれず、スタスタと控えの間に向かって歩いている。

「ちょっと！無視するつもり？私が怖いよね、卑怯者！」

セオドアはユーリに背を向けたまま答えた。

「ああ怖いね。そんな事を平気で口にする女は怖くてたまらんよ」
去っていくセオドアの背を見詰めながらユーリは小さくつぶやいた。

「平気じゃないわ：平気なわけじゃないの！ルシンのバカ」
その様子を影から見ていたグレンは思わず

「可哀想にユーリ：」と眉を寄せた。

「次はルシンとユーリの対決か：さて、どうしたものか」

グレンは暫く考えていたが、答えを見つけたのか意を決した様子で審判団のところに歩いていった。

その頃ロイ達はセオドアが優勝した場合、手にはいる賞金をどう使うかウキウキしながら相談していた。

「ここまでくればセオドアの優勝は決まったも同然だ！なあリン」
興奮しているロイをたしなめるようにリンは

「まだ分かりませんよ。なんせ決勝ですから相手も相当な腕でしょう？」
と言ったがロイは全く耳を貸さず、今度はテレサに聞いている。

「テレサ、どうだ？旨い物でも食いに行くか」

「そうねえ：そのお金を元手にまた奴隷を買えばいいじゃない？も

ちろん私達みたいに見込みのありそうな子でなくちゃダメよ。そうすればロイはもっとお金を増やせるし、私達も旅が楽しくなつて一石二鳥だわ。そう思わない？」

ロイはすっかり感心して

「テレサはしつかり者だなあ。よし！そうするか、なあリン？」と、隣のリンの肩を抱いてご機嫌だ。

ロイさんたらもうセオドアさんが勝つと決めてかかっているんだから…僕はなんだか嫌な予感がするな。

リンの心配をよそに、舞台上では決勝戦の準備が整えられていた。いよいよ決勝戦とあつて会場は異様な盛り上がりを見せている。夕闇迫る空には花火が何発も打ち上がりその度に観客から歓声が上がった。

舞台上に上がったセオドアはクリステイーナと名を変えて出場しているユーリの登場を待った。

ところがユーリはなかなか姿をあらわさない。

どうしたユーリ？

なぜ来ない…

その時、一人の男が舞台にひらりと上がってきた。セオドアはその男の不敵な笑みに見覚えがあつた。

「ユーリはどうした？フィアンセ殿」

「フフ…なぜ僕が彼女のフィアンセだと？」グレンの言葉にセオドアはニコリと笑った。

「そりゃあ気付くさ。さっき上からスゲェ怖い顔で俺を睨んでたかな。だがそれはお門違いってもんだぜ。俺はユーリの結婚を喜んでいる。可愛い妹同然なんだ。ユーリをよろしく頼む！あいつは中々頑固だが、誰よりも優しい女なんだ」

グレンはやれやれといった顔で

「ああ、その通りとても頑固だね。どうしても君を諦めきれないよ。うだ。しかし、僕らは結婚するよ。これは国と国との結婚なんだ。

お互い恋愛は自由だが伴侶は一人だけだ。彼女の国は一妻多夫が認められてるようだが、僕の国では残念ながらそんな制度はないのでね。彼女には悪いが君を夫の一人に認めるわけにはいけない」

グレンは舞台の袖に目を向けた。

「そういう訳だ。すまないなユーリ。だから僕が君の代わりに彼と戦う事にするよ。これは最高の余興だろ？ 見ろ！ 観客達も大喜びだ」ユーリは後ろ手に縛られながらも声を張り上げた。

「グレン！ 酷いじゃない！ 私、私この日をどれだけ待ったか」

ユーリは目に涙を溜めてガックリとその場にうずくまった。

セオドアはそんなユーリを見たのは初めてでさすがに胸が傷んだ。

「：仕方ねえな。じゃあさ、もしも俺が勝ったらユーリの恋人くらいには認めて貰えねえかな？」

その言葉にユーリの顔はみるみるうちに生氣を取り戻した。

グレンは苦笑いを浮かべて

「いいだろう認めるよ。その代わりに僕が勝ったらもうユーリには関わらないでもらいたい」

と宣言した。

「いいぜ、約束だ！」ユーリは二人の間で取り交わされる約束を複雑な面持ちで聞いていた。

とうとう試合開始を告げる銅鑼が周りの歓声を打ち消すがごとく鳴り響く。

武術大会後編その3（前書き）

武術大会編がとうとう完結です。

武術大会後編その3

グレンの父は周りの国々からも一目置かれる存在で、セオドアも自分の父からその辣腕ぶりをよく聞かされていた。

「海賊王の息子か、お手並み拝見させてもらうぜ！」
ユーリが見守る中、二人の王子は互いににらみ合っていた。

グレンの両手にはまるで扇のように沢山の短刀が煌めき、その構えはまるで白鷺のように優美に見えたのもつかの間、短刀はまるで矢のようにセオドアめがけて飛んでいった。セオドアは自分の剣でそれをなぎ払いながらもグレンの真の目的を推し量っていた。
グレン！俺を試すつもりか？負けるつもりの戦いなのについ本気になっちまいそうだぜ。

グレンの放つ短刀はルシンの服をかすめてゆき、すでにボロ雑巾と化したシャツをセオドアはビリビリ引き裂いて投げ捨てた。

「ああもう！やっぱりお前とはちゃんと戦いたい、我慢できねえよ」
グレンもニヤリとして背中の剣を引き抜いた。

「そうだな。僕も我慢出来なさそうだよ。この剣はリンデンハイムの頭領に代々受け継がれる伝説の青龍剣だ。今までこれを使う機会はなかったが、やっと出番がきたようだな」
その剣は不思議なことにうつすらと青い炎をまとっていた。

「青龍剣か！さすがリンデンハイム、スゲー剣だな。しかし、俺のジャガル族の勇者の剣だって負けてねえぜ！」

座席でじっと静かに舞台の気配をよんでいたリンは、ふいに立ち上がった。

「どうしたのリン？」テレサは驚いてリンの手を引っ張った。
リンは心なしか震えているようだった。

テレサもそっと立ち上がり、リンの緊張した横顔を不安げに見つめた。

「何か感じた？」

テレサの問いにリンは微かにうなずいた。

「龍が：青い龍が現れた！」

テレサは舞台に目を移した。

「龍？そんなもの私には見えないわよ。リンには見えてるの？」

「うん。凄いパワーだ！セオドアさんが危ない」

リンはいつの間にか辺りの空気が湿った沼の底のように、じつとりと肌にまとわりついてくるのを感じて鳥肌がたっていた。

リンがこんなに緊張している：グレン、あなたは一体何者なの？私を迎えにくる。そう言ったわね。なんだか怖い：あの人が怖いわ！テレサはなぜかあのグレンから逃げられない予感のようなものが全身を駆け抜けていくのを感じて身震いした。

舞台ではそんな二人の思いなどお構い無しに激しいつばぜり合いが続いていた。

セオドアの逞しい背中から夥しい汗が流れているのが見える。

対してグレンは汗ひとつかかず、涼しい表情でセオドアの剣を跳ね返していた。

「リンどうしよう、セオドアのほうがおされ気味よ！」

「うん：あのグレンって人ももしかしたら聖獣使いかもしれない」

「なんですって！？」

「テレサ、僕をレオのところに連れて行って！レオなら何か知ってるかもしれないよ」

テレサは広い会場をざっと見渡したが、あまりの人の多さにクラクラしてきた。試合も済んでしまっただけは控え室などはいないだろう。「ダメよリン、凄い人でとても見付かりそうにないわ！」

「仕方ないな、じゃあ自分で試してみるしかないね」

「え？どうするつもり？」

リンはおもむろに手を胸に当てると、小さな声で囁いた。

「出でよ！砂の精霊ラシード！」

すると、会場に一陣のつむじ風が吹き抜けた。

観客達の帽子やハンカチなどが空に舞い上がっている。風が過ぎ去ると、いつの間にかセオドアの背後には白い翼をもつ獅子ラシードが控えていた。

観客達はキャアキャア叫びながらパニックを起こして、会場から逃げ出して行った。

グレンは突如として現れたラシードに思わず目を丸くした。

「驚いたな、君は精霊使いなのか？それとも聖獣使い？」

ルシンはグレンの視線が自分の遥か上にあるのに気付き、頭上を見上げた。

「ああっ！ありやあラシードじゃないか。どういうことだ？リン！おいリン！なんだよ、こりやあどういうことだ？」

すっかり人気の無くなった会場でぽんと残された人々はみんな顔見知りばかりだ。リンはテレサに手を引かれ、舞台の上上がった。

「グレンさん、あなたのその剣には青龍が封印されています。その事はご存知では？」

「いや：知らなかった。この剣に青龍が？」リンは深くうなずいた。

「ええ、僕にはハッキリと見えています。あなたは聖獣使いだ。まだその力に目覚めてはいないようですがね。青龍もまた、その剣から出られないようです。そこでラシードの力を借りて青龍を目覚めさせてはと思ったのですが：どうやら急ぎすぎたようです。皆さん玄武を見ても怖がらなかったもので、てっきり大丈夫だと思ったんですけど：どうやらダメだったみたいで：すみません！」

すっかりへこんだ様子のリンを見てグレンは思わずプツと吹き出した。

いつの間にかレオ達も駆けつけてすっかり鼻息を荒くしている。

「全くなんだってあんなにラシードの事は怖がるんだ？玄武だって

迫力は負けてないぞ！なあ玄武！」

レオの頭の上では小さな玄武がイビキをかいて眠りこけていた。ユーリもいつの間にか縄をとかれていてツカツカとグレンに近づくとパシン！とその頬をぶった。

一同、言葉もなく立ちすくんでしまった。

「グレン！私に縄をかけるなんて、酷すぎよ！」セオドアはそんなユーリを厳しく睨むとパシンとその頬を打った。

ユーリは驚いてセオドアの顔をキッと睨み返した。

「お前、グレンの立場ちゃんと考えろ！そして自分の立場もな。いかユーリ。お前は女王だ、自分の感情くらい飼い慣らせ！」

ユーリの頬を大粒の涙が伝っている。

「グレン、すまんが今日のところはこれまでだ。またいつか戦える日がくるだろう。その剣に住む青龍を拝める日を楽しみにしてるぜ！」

「ああ、そうだな。ラシードの威嚇にも姿を現さないなんて中々頑固者らしい。だがきつと手なずけてみせるさ！」

二人はがっちりと握手した。

その様子を見ていたロイはおずおずとグレンに尋ねた。

「あ、あのう。ところでこの試合の結果はどうなりますか？」

グレンは笑って

「もちろん優勝はセオドアさんですよ。ユーリは決勝戦を辞退したわけだし、この試合はおまけみたいなもんです」

それを聞いたロイは笑いが止まらないといった様子でテレサの手をとり、踊りだした。

「もうロイったら！痛いわよ」

「ワッハハハこれが踊らずにいられるかってんだ！やったぞリン大儲けだ」

ユーリは女王の威厳を取り戻し、

「さあ、あとは表彰式と晩餐会がありますよ。夜は迎えの馬車をホテルによこします。皆さんでいらしてください」と言い渡した。セオドアはひざまづいて手を胸に当てると感謝の意を示した。

「それからリンさん、その獅子をどうか帰してください。でないと表彰式を始められませんわ」

リンはしまった！とばかりに慌てて叫んだ。

「ラシード、もう戻っていいよ。どうもありがとう」

「我が主リンよ！仰せのままに」ラシードは小さく竜巻を起こすと、そのままそれに乗って帰って行った。

会場の外で様子を伺っていた観衆はもう大丈夫との呼び掛けにより座席に戻ってきた。

もう空は夕暮れが迫っており、試合終了を告げる銅鑼が鳴り響いていた。

武術大会後編その3（後書き）

次はいよいよ舞踏会です。ここでテレサの運命を左右するような出来事があります。お楽しみに！

一夜の夢その1

ホテルのベッドではセオドアが倒れこんで、すでに大きなイビキをたてている。

リンはそんなセオドアのそばに腰かけて、ロイとテレサの衣装選びの様子をうかがっていた。

「ちよつとロイ！それじゃあまるでピエロだわ。もっとう上品な服はないの？」

テレサはホテルに呼んだ洋服店の店員達にあれこれと注文をつけている。

「それではこれなどいかがでしょう？ぐつとシックになりましたわ！」

「うーん、いいかも？でもタイがねえ。そっちの少しピンクがかったやつを持って来てくださる？そうそう、それよ！」

ロイはテレサに言われるまま、ピンクのタイをつけてもらいニコニコとご機嫌だ。

「よし、次はリンね！さあこつちよ」

リンはビクツとして尻込みしたが、テレサに引っ張られ部屋の中央に立たされた。

「そうねえ。リンは精霊使いなんだからそれなりに威厳がないと！」

リンはおどおどしながら

「テレサ、僕はいよいよこのままで」と言ったが聞き入れて貰えるわけもなく、次々と服を着せ替えられて疲れがピークにきた頃にやっと「これよ！これに決めたわ！」とテレサのOKが出た。

リンはやつと解放してもらえたが、やたらと歩きにくいので一体自分は何を着せられているのか気になった。

「ロイさん、僕なんだか変じゃありません？」

ロイはリンの周りを一周して

「いいや、全然！どっからどうみても立派な仙人様のように神々しいぞ。さすがはテレサだ」

アチャ／＼やっぱりね。そんなことだろうと思ったよ。ああ嫌だこんなの！でもそんなこと言ったらテレサがなあゝし、仕方ないもうなるようになれだ。

リンはまるで高位の僧のように重い裾をひきずりながら、転ばぬようにしずしず歩いた。

「さてと、最後に今日の主役にビシツときめてもらわなくちゃ！さっさと起きて頂戴、セオドア！セオドアったら！」

「ん！ああっ？なんだあ？」

まだ寝ぼけまなこのセオドアの尻を叩いてシャワーを浴びさせ、その間に床いっぱいの衣装からいくつかの正装を選びだした。

「うお／＼い、終わったぜ」

バスタオルで頭をガシガシふきながらセオドアが出てきた。

「な、なんだこりゃあ？しかも何それ、君たち仮装パーティーにでも行くのかな？」

「な／＼に寝惚けたこと言ってるのよ！今日の主役はセオドアあんたなんですからね！もう時間ないんだから早く支度するわよ、さあどれがいいの？」

テレサはベッドの上に衣装を並べた。

「あっ、俺自分の着ていくからいいや」

「自分ですって！？あんた舞踏会よ、普通のパーティーじゃないんだから！」

セオドアは大きく一つあくびをすると頭をボリボリかきながら

「わかってるわかってる。大丈夫だから、じゃあちよつと着替えるね。のぞくなよ！」

「だ〜れがのぞくもんですか！変な格好だったらすぐ脱がすからね！」

「お〜怖！はいはいじゃあちよつと待っててね」

と言うと、袋を引きずりながら隣の部屋に入っていった。

テレサはイライラしながら部屋の中をうろうろ歩き回っている。

「ねえテレサ、君自分の支度はどうするの？もう終わってる？」

リンは心配になってテレサに声をかけた。

「きゃあ！そうよ、私も支度しなくちゃ。ちよつとあなたたち、床の服をどけてドレスを並べて！」

店員たちは慌ててドレスを広げだした。

「やっぱり白かしら？それとも大人っぽく黒がいいかな」

その時、テレサの脳裏にウンディーネの深紅の艶やかなドレス姿が浮かんだ。

「やだ、私ったら：なによあんなドレス！私だって負けないんだから」

テレサは真珠色に輝くシルクのドレスに決めた。ンプルなデザインだが肩のところに薔薇のコサージュが付いていて、とても可憐な印象のデザインがテレサの愛らしさを際立たせていた。

店員達が器用な手さばきで、テレサの美しい金髪を高く結い上げて服のデザインに合わせ、ピンクのミニバラをさしてくれた。

すっかりテレサの支度が整ったところ、やっと隣の部屋からセオドアが姿をあらわした。

「待たせたな、ではそろそろ出かけるとするか」

みんなセオドアの姿を見るなり、釘付けになってしまった。

「ん？なんだ、どうした？」

テレサはポウツと頬を染め

「ス、ステキよ。セオドア！」と声を震わせた。

店員達もウンウンとうなずき、その王族のみに許された豪華なラグマダーンの衣装を纏った若きプリンスにうっとり見とれている。

「オイオイ、照れるじゃんか！さあ主役が遅れたらマズイだろ。行くぞ！」

テレサはホテルの赤い絨毯の上を、セオドアに手をとられ誇らしげに歩いて行った。

一夜の夢 その2

ホテルの外にはすでに迎えの馬車が着いていた。

4頭だての馬車にはリンデンハイムのシンボルである龍が巻き付いている。

「こりゃあ立派な馬車だ！」

ロイは龍の頭を撫でながら、まるで子供のようにはしゃいでいる。

御者は恭しくテレサの手をとり馬車に乗せてくれた。

ああなんだか夢みたいだわ！まるでどこかの国のお姫様になったみたい。

テレサは向かいに座っているセオドアを見つめた。

そうよね。これがこの人の本来の姿なんだわ。いつも風来坊みたいな格好してるからついこの人の身分を忘れてしまう：

私の絶対手の届かない人なんだってことも忘れてしまっていたわ。

テレサの視線に気付いたセオドアがパツと顔を上げた。

「なんだよ、元氣ないじゃん！疲れたか？」

「うん、ちよつとね」

「な～んて実は緊張してるんじゃない？らしくねーぜ、お前はいつも生意気なくらいが可愛いんだからよ」

テレサはカァツと赤くなり、プイツと横を向いてしまった。

「オオ～ッ見えてきたぞ港だ！凄いな、リンデンハイムの船がぎっしり海に浮いとるわい。まるで街だなこりゃあ」

思わず叫んだロイの言葉で、リンの胸はドキドキと高鳴ってきた。

「うわ～。僕なんだか緊張してきました！」

「みんな、落ち着け！急に紳士淑女を気取ったところでボロが出るだけだ。ここはあまり気張らんで普段通りにいこうじゃないか！」
そう言っているロイさんこそ一番舞い上がっているのでは？とリンが思ったのもつかの間、馬車が止まりまるで城壁のようにみえる巨大な船と陸とを繋ぐ栈橋から、出迎えの家臣達が降りてくるのが見

えた。

「いらっしやいませ。皆様お待ちかねですよ。今日は、3回戦まで勝ち残った方々も招待させて頂きました」

リンは思わずセオドアの手を掴んだ。

「じゃあレオも来てるんだ！もう一度ゆっくり話したかったです」

「あの亀を頭に乗せた少年ですね。ええ、いらしてますよ。さあ、こちらです」

リン達は緊張した面持ちで棧橋を渡って行った。

船にはたくさんさんの松明が灯され、まるで昼間のように明るい。

優雅なハープの音色が夜風に乗ってリンの耳に心地よく響いてきた。セオドアが先頭に船の中に入って行った。

天井にはシャンデリアがまるで光の滝のように輝いており、着飾った紳士淑女が一斉に振り替える。

家臣の一人が高らかにセオドアの名を告げた。

「武術大会の栄誉ある優勝者セオドア様のお着きです」

セオドアは皆の視線に臆することなく、王者の風格を漂わせながらホールの中央まで歩いて行き、一段高い席に座るグレンとユーリの前にひざまずいた。

「勇者セオドアようこそリンデンハイムへ、今宵はあなたの優勝を祝う舞踏会です。どうか存分にお楽しみください」

グレンはそう言うど皆にシャンパンを配るよう家臣に言いつけた。

テレサはシャンパングラスの弾ける泡を眺めながら、これまでの旅の道程を思い出していた。

ああ…なんて幸せなのかしら！

これもセオドアのお陰ね。

リン、セオドア、ロイ本当にあなたたちに出会えて良かった！

あら？なんだかこれじゃあまるでお別れのセリフね。私ったら：一体どうしたのかしら、なんだかあなたたちが離れていくような気がして…。バカね余計なことは考えないでいましょう。今夜は思い切

り楽しむわよ！

「では、セオドアさんの優勝を祝って乾杯！」

ロイはあっという間に飲み干してしまい、リンのグラスも受け取っている。

オーケストラがワルツを演奏し始め、みんな一斉に輪になって踊り出した。

「テレサ、レオを探そうよ」

リンはまだ夢見心地のテレサの袖を引っ張った。

「ええそうね。子供はきつと私達とレオ達くらいしかないからすぐ見付かるはずよ。ちよつと探してくるからリンはここで座って待ってて」

テレサは壁際のソファアーにリンを座らせると、ホールの端に並ぶ立食コーナーの方に向かって歩いて行つた。

「あの子の事だもの絶対あそこに違いないわ」

立食コーナーにはテレサの大好きな色とりどりのケーキが、まるで花畑のように沢山綺麗に並んでいてテレサは思わずゴクリと唾をのみこんだ。

「おい、見てないでサツサと食べよ！こんなご馳走めつたにありつけないだろう？」

テレサは驚いて辺りをキョロキョロ見回したがレオの姿はなかった。

「おかしいわね、今の声は絶対レオだったわ！」

テレサは皿を手にとりイチゴのショートケーキを一つと、ナッツが山ほど盛り付けてあるチョコタルトを一つその皿にのせた。

「あら、このオレンジゼリーも美味しそう。こっちの桃ババロアもすてがたいわー！」

テレサの皿はあっというまにスイーツで埋めつくされてしまった。

「あゝあ、それじゃあいくらなんでも食いすぎだろう！腹壊しても知らねえぞ」

テレサが声のする方に目をやると、大きな豚の丸焼きの腿がプルプルと動いているではないか。

しばらくすると、ブチッと音がして腿は見事に引きちぎられた。

「ハァーやっとなれたぜ、こいつ手間かけさせやがって！ウキヤウキ、頂きますまゝす」

「レオ！見つけたわ。あんたを探してたのよ！」

レオは豚にむしゃぶりついていてテレサの言葉など聞いていないようだ。

「ちよつと、この野蛮児！ちゃんと人の話聞きなさいよ！」

「ああん？なんだよ。俺を探してたって？そんな風には見えなかったがなあ」

レオはテレサの大皿に載っている沢山のスイーツに目をとめてからチラリと横目でテレサを見た。

「こ、これはリンに持って行ってあげようと思って…」

「ふうーんそうなんだ？」

「そ…そうよ！それよりあんたのご主人様はどうしたの？いつつもあんたにべったり張り付いてるのにさ」

「今日はローザンヌ様に来てるからな。ダンスの相手でもしてるんだろ」

「ローザンヌ様？」

「クラレンスの母上みたいなお方だよ。ほらあそこで踊ってるだろ」
テレサはレオの指差す方に目を向けた。

薄い紫のオーガンジを幾重にも重ねたドレスをエレガントに着こなした美しい女性をエスコートしているクラレンスはいつになく柔らかな表情で、その女性に微笑みかけていた。

「お母様ではないんだ？」

レオは豚の汁を手で拭いながら答えた。

「ああ、クラレンスの実の母上はもう亡くなられてる。彼女は元々奴隷だったって噂だな。俺にもとても優しくしてくれる」

テレサはクラレンスも実は母親がいないのだと知って、彼のレオに対する甘えた態度も納得がいった気がした。あんなにお金持ちでもやっぱり寂しかったりするのね…。

「ねえレオ、私達といましようよ。このパーティー大人ばかりでつまらないんですもの。私、リンに頼まれてきたのよ。レオを探してきてくれって」

レオは豚の腿を平らげて満腹になったのか、

「いいぜ！俺も退屈してたんだ。ちよつとリンデンハイムの中を探険でもしてみようぜ。スゲエ広いし、何があるかちよつと気にならねえか？」

テレサはレオが元々スリで捕まったのを思い出し、ギロリとレオを睨んでみせた。

「レオ！あんた性懲りもなくまた何か企んでるんじゃないでしょうね？」

「バ、バカ言うなよ！俺のこの格好を見ろよ。金に困ってたあの頃とは違うんだぜ。なあ玄武？」

いつの間に現れたのかレオの頭の上にはトレードマークのように小さな玄武がしっかりと張り付いていた。

「あら、ごめんなさいねえ。レオの言うことはあてにならないけど玄武ちゃんのこととは信じてるわよ」

玄武はテレサに撫でられて目を細めている。

「チェッなんだよ。玄武ったらいつから女に甘くなったんだあ？だらしないやつ！」

玄武はレオの髪をくわえてブチッと数本引っこ抜いた。

「イデデデッ！止めてくれ玄武、ウソウソだから！冗談だよ」

玄武は、フンツと鼻を鳴らしてまた静かに腰をおろした。

「あゝもうなんで俺がこんな目に…もう、サッサとリンのところに案内しろよ」

テレサはクスリと笑うと

「こっちよ!」と駆け出して行った。

一夜の夢 その3

二人はダンスホールを横切ってまっすぐにリンのもとまで走り抜けた。

その途中にテレサはクラレンスと踊っているローザンヌとすれ違った。

ん？誰かに似ている！誰だったかしら？

「おい、テレサ！こんなところで立ち止まるなよ」

「う、うん。ごめん！」

テレサはローザンヌの寂しげな横顔がなぜか気になってしかたなかった。

その時、ダンスホールの端で心細げにちょこんと座っているリンの姿が浮かんできた。

そうよ！リンだわ。リンにそっくりじゃないの。ローザンヌさん…か。後でちょっと話してみようかしら。

色とりどりのドレスの森をやっと脱け出した二人は、やっとリンのところまでたどり着いた。

「ようリン！元気だったか？」

「レオ！会いたかったよ。ずっと気になってたんだ。あんな別れかたしなかったから…」

レオは鼻の下をゴシゴシ指で擦りながら

「気にするなよ。俺はなんとも思っちゃいねえよ！それよりさ、テレサとも話してたんだけどちょっとこの船の中を探検してみねえか？こんだけ広い船は珍しいぜ、まるで要塞だ」

リンはレオの言葉に眉をひそめた。

「そんなことしたらリンデンハイムの人に怒られちゃうんじゃない

？」

「大丈夫だって！なあテレサ？あれ、オ－イテレサどこだ？」

「こ…こっちょ！もう、レオったら私にお構い無しでどんどん先に行っちゃうんですもの」

「ああ悪いな、しっかしお前それ持ってきたのかよ」

テレサは両手でしっかりとケーキの載った皿を掴んでいた。

「当たり前じゃない。リンに持っていくって言ったでしょ！」

「はい、リンの大好きなケーキ沢山持ってきたわよ」

リンは

「うわあ！ありがとう」と礼を言うと、

「みんなで食べよう」と微笑んだ。

「それ！その顔よ」

テレサの突然の叫び声にレオもリンもびっくりして食べようとしたケーキを床に落としてしまった。

「ど、どうしたの？突然」

「ほんとだよ。あゝあもったいねくな」

「ごめんなさい。でもね、さっきローザンヌさんを見かけた時に誰かに似てるなって思ったの。そしたら今のリンの顔にそっくりだったんだもの」

リンはその言葉にドキリとした。

「僕に似た人…その人はどんな感じだった？詳しく教えてテレサ！」
テレサはリンの尋常でない表情に慌てた。

「そうね、リンと同じ黒髪で寂しげな感じの美人よ」

「歳は？歳は幾つ位に見えた？」

「そうね…。30歳位かなあ？しっとりした大人の女性よ」

「ああ、多分それくらいだったぞ。まあ気になるならクラレンスに

直接聞いてみればいいさ。ローザンヌさんはクラレンス付きの侍女だからさ」

「レオ、じゃあ君も知っている人なんだね！じゃあ僕に紹介して。もしかしたら僕の母さんかもしれない。ずっと捜していたんだ！」

テレサはレオにリンと出会った経緯を全て話した。

「僕が目さえ見えたなら直ぐに母さんだって分かるのに：」

テレサはリンのギュッと握られた拳をそっと自分の掌で包みこみ、優しく声をかけた。

「大丈夫よ、リンのお母様だってリンを見ればすぐに自分の息子だって気付くはずだわ！レオお願いよ。リンとローザンヌさんを会わせてあげて」

「ああ、もちろんだ！もうすぐダンスが終わる。そしたら直ぐに会いにいこう」

リンは高鳴る胸を抑えてじっと曲が終わるのを待った。

レオはクラレンスとローザンヌのダンスを複雑な気持ちで眺めていた。

もし、ローザンヌさんがリンの本当の母さんだったらやっぱりローザンヌさんはリンと一緒に暮らしたいだろうな。そしたらクラレンスは：。

そこまで考えてレオはブンブンと頭をふった。

今は親子の対面が一番先だ。後はなんとでもなるさ。クラレンスだってそれは解ってるはずだ、心配いらないさ。

レオは心の中でそう呟くと

「じゃあ俺、迎えに行ってくるよ。ここで待っていてくれ！」と言
い残し、ダンスホールの出入り口に向かって走って行った。

一夜の夢 その4

ダンス曲が鳴りやんで踊っていた人々は一斉にお辞儀をしているところだった。

「どこだろ。あついていた！クラレンスこっちこっち」

クラレンスはレオの呼び声に気付いたらしく、ローザンヌの手を引きこちらに歩いてきた。

「レオ！さっきからうろちょろして、一体何やってるんだ？またあの連中と一緒になのか？」

「ああ、実はなローザンヌさんにリンが会いたがってるんだ」

「リンが…一体なぜ？」 「テレサがさっきローザンヌさんを見かけてさ。リンとローザンヌさんが似てるっていうんだ。それで、もしかしたらローザンヌさんはリンの生き別れたお母さんじゃないかって言うんだよ」

クラレンスはそれを聞いてハハハと笑いとばした。

「レオ、お前だって知ってるだろう？ローザンヌは身寄りはいない。子供はいたが死んだんだ。ローザンヌはそれが受け入れられず精神が病んでしまった。哀れなひとだよ…僕を息子だと思いこむことでやっと平穏な日々を取り戻した。それなのにまた波風たてて彼女の気持ちを揺らそうっていうのか!？」

レオはクラレンスの剣幕に驚いて引き下がるほかなかった。

「ご、ごめん！俺そんなつもりじゃあ…」

クラレンスは表情を緩ませレオの肩をトンと叩いた。

「お前なら解ってくれると思うていたよ。悪いがリン達にはお前からちゃんと断っておいてくれ。それから…もし僕に無断でまたローザンヌと会おうとしたら、ただじゃおかないよ」

レオは底光りするクラレンスの瞳に、もはや抵抗する気持ちはすつ

かりなくしていた。

「分かったよ。リン達には俺からちゃんと話しておく」

クラレンスはニコリとレオに笑いかけ、ローザンヌに手招きした。
「ローザンヌ疲れただろう。僕達は先に失礼する事にしよう。レオはゆっくりと楽しんでおいで。父上は今日はお帰りにならないだろう。どうせ何処かの愛人のところに行くつもりだろうから、レオには別に馬車を差し向けるようにするよ。じゃあお先に失礼」

「あ…ああ、気をつけてな」

レオは二人を出口まで見送った。

「何もそんなに慌てて帰らなくてもいいじゃんか！なんだかますます怪しいぜ。とにかくリン達に報告しておくか」

レオは大きいため息をつく

「リンのやつ…がっかりするだろうなあ。ああ、俺も辛い役回りだなあ」

その時、ふいに背後からニュツと太い腕が伸びてきてギュツとレオを抱き締めた。

「よう！何をたそがれちゃってんの？」

レオは鋼鉄みたいな腕の中であがきながらうめいている。

「ギャア、痛いんだよオッサン！手加減しろってんだ！」

「オ…オ…なんだ元気じゃねえか。どうしたんだよずいぶんシケタ面して、何か悩み事か？」

セオドアは腕の力を弛ませるとレオと向かいあい、じっとその目を覗きこんだ。

「悩みっていうか…ちょっと相談が…」

「おう、どうした？」

「実は……」

レオはここまでの経緯をセオドアにすべて話した。

「なるほどな、で？お前はどう思ってるわけ？そのローザンヌさん

がリンの母親だと思うのか？」

「わからないよ。証拠もないしな。だけど可能性はゼロじゃないだろう？もし、俺がリンならやっぱり確かめたいと思うよ」

「ならなぜ悩む？あの小僧が言うようにローザンヌさんが傷つくのが怖いかな？それともクラレンスを怒らせるのが怖いかな？」

レオは首を横にふって腕組みした。

「クラレンスのあの態度……。もしリンがローザンヌさんの息子だったらクラレンスはきっと傷付くよ。クラレンスはローザンヌさんを実の母さんみたいに大事にしてるもの。誰にも渡さないっていう態度だったよあれは」

「なるほどね。まだ子供だからなくあいつも。もう少し大人になって気持ちに余裕が出来ればみんな丸くおさまるんだけど」

そう言うってからセオドアはクスリと笑ってレオの肩に手を置いた。

「お前もあいつらと同じ位の歳だろ？しっかりしてるな。良く解ってるよ人の気持ちの機微をよ。苦労してきたんだなお前……」

レオは照れくさそうに鼻の下をゴシゴシこすると

「これも生きていくための知恵ってやつよ」と呟いた。

「で？どうするか決まったかな？」

「うん。俺、なんとか調べてみるわ。結果はどうあれやっぱりハッキリさせてやらないとリンが可哀想だからな」

「もし、結果がわかったら俺に先に知らせてくれ」

「わかった！そうするよ。じゃあ俺リンのどこに行ってくるわ。ありがとよ」

「おい、待てよ！俺も行くぜ」

レオは顔をしかめた。

「ダメだよついてきちゃあ。今日の主役と一緒に目立ってしょう

がねえや。これから俺達はちよっくらやる事があるんだ。兄ちゃん
はあっちで美人とダンスでも踊ってこいよ！」

レオはそう言い残して走り去ってしまった。

「ハハアンあいつら何か企んでるな。暇だしちよっと探ってみるか」
セオドアはそっとレオの跡をつけて行った。

一夜の夢 その5

レオはセオドアが後をつけているとも知らず、一目散に走って行った。

ホールの隅で、待ちくたびれたのか椅子にもたれ掛かってあくびをしているテレサが見える。

「お〜いテレサ！」

テレサは椅子から飛び降りた。

「遅かったじゃないレオ！ローザンヌさんは？一緒じゃないの？」

「ああ、もう帰ったよ」

レオの言葉で膨らんでいた期待がみるうちに萎んでくるのをリンの表情から見てとれたレオは、慌てて言葉を繋いだ。

「リン、俺がちゃんと調べてみるよ。ローザンヌさんが奴隷としてシュバイツァー家に来る前の事を調べれば何かわかるはずだ。分かったらすぐに知らせるよ。だからそうがっかりするなよ」

リンは力無く微笑んで

「うん。焦らない事にするよ。希望が持てただけでも僕は本当に嬉しいんだ。ありがとうレオ、ローザンヌさんの事頼んだよ！」

「おお、任せておけって！もし何か分かったら玄武に手紙を届けさせるから心配するな」

「良かったわね。リン！レオはローザンヌさんのそばで暮らしているんだもの安心して任せておけばいいわ」

リンの表情がやっと明るくなったのを見て、レオは話題を変えた。

「さっきセオドア兄ちゃんと会ったぜ。俺についてこうとするからダメだって断った」テレサはそれを聞いて口を尖らせた。

「なんでよ！セオドアはこういう所苦手なんだから一緒に居てあげてもいいんじゃない？」

レオは解っていないあとばかりにチツチツと口を鳴らした。

「ダメだよ。これからリンデンハイムの内部に忍びこむっていうのに主役が一緒じゃ動きにくいだろう？」

なるほどね。とリンとテレサはうなずいた。

「どこから忍びこもうか？」

テレサ達は頭を寄せあって相談を始めた。

「外側から見た感じじゃあ、船と船はぴったり繋がれててすぐに隣の船に行けるようになってたぜ」

「でも一度甲板に上がってからでないと移動はできないわね」

「それぞれの船には見張りが立っているでしょ？あんまり無茶すると危険ですよ」

リンはなんとなく嫌な予感がしていた。

海の覇者として君臨するリンデンハイムは元をたどれば凶悪な海賊なのだ。

もし本気で怒らせれば子供だからと赦してくれるとは限らない。

「うーん。どうするか。リン、何かいい知恵はないか？」「そうですね。じゃあ意表をついて一番遠い船に忍びこみましょう。そうすれば見張りも手薄なはずですよ。なんせ見渡せないほどの船団ですからね。まさか客が紛れているとは分からないと思いますよ」

テレサとレオは顔を見合わせた。

「ええっ！？そんな遠くまで一体どうやったら行けるんだよ」

リンはニッコリ笑ってレオの頭を指差した。

「玄武く！？」

レオは思わず絶叫した。

「そうですよ。玄武の背中に乗せてもらいましょう」

「さすがはリンね！上手い作戦だわ。レオ、早速行きましょうよ。大人達もだいぶお酒がまわってきたみたいで注意力も散漫になってきているわ、今がチャンスよ！」

「リン、お前って普段大人しくせにホント大胆なところあるよね。まったく驚かされるぜ」

リンはそんなレオにはお構い無く、法衣のような上衣を脱ぎ始めた。

「テレサ、悪いけどこの服動き難いんだ。ここに置いていくよ」

テレサはリンから服を受けとると、椅子の上に畳んだ。

「よし！準備OKだな。じゃあ、とりあえず甲板に出よう。目立たない場所で玄武を発進だ！」

甲板にあがると、途端に潮の香りが鼻をくすぐった。

海を渡る風は涼しくて上衣を脱いだリンの肌は、あっという間に湿気で濡れている。

さっきまでの人いきれで、いささか息苦しく感じていたリンは爽快な気分ですぐ甲板の手すりに掴まった。

「リン、テレサ！あそこに倉庫みたいなのがあるだろう？あの影で玄武に乗ろうぜ」

3人は倉庫の裏に身を潜め、レオは頭からそつと玄武を外した。

「玄武、オイ玄武ったら！起きろよ！」

玄武はグッスリ寝ていたのを起こされて、少し不機嫌そうな顔でレオをじとつと睨んでいる。

「怒るなよ。悪かったな起こしちゃって！ちよっとお願いがあなんだ。俺達をあの一歩遠い船まで連れて行ってくれないか？」

玄武は大きなあくびを一つすると、スルスルと頭を甲羅の中に引っ込めてしまった。

「玄武くっ頼むよ！屋敷に戻ったらお前の大好きなチクワを5本
：いや10本やるからさ！な？頼むよ」

玄武は仕方なさそうにゆっくり甲羅から顔を出した。

「ありがとう玄武！」テレサは玄武にチュッとキスをした。
玄武はデレッと嬉しそうにしている。

「玄武さん、すみません。お世話になります」

リングが丁寧な礼を言うと、玄武はみるみるうちに大きくなり3人を
背に乗せると、ザブンと海に飛び込んだ。

水上を滑るように進んでいく玄武を眺めながら、セオドアは唸って
いた。

「ウーン中々やるな、あいつら。さて、俺はどうしたもんだか」

下のダンスホールからはまた賑やかに曲が流れ始めた。

セオドアは何か思い付いたのか、急いでダンスホールに降りて行っ
た。

一夜の夢 その6

リン達を乗せた玄武はぐんぐん波を掻き分けて行き、あっという間に最後尾の船までたどり着いた。

「ヒュ〜すげえなあ52隻もあつたぜ！」

「レオ、数えてたの？」 テレサが呆れ顔で聞くのにへへっと得意気に笑って、船の帆の先にはためく旗を指差した。

「ほらあそこに52って書いてあるじゃん！ 前の船の旗は51だからな順番に並んでるんだろ。しかしこれじゃあちよつとした国がそのまま海上にあるようなもんだぞ」

テレサはブルツと身震いした。

「いつでも戦が出来るわね。なんだか恐いわ」

レオは船の横に開いているずらりと並んだ穴をじっと見た。

これが全部大砲の穴だとすると武器も相当搭載してるはずだ。

リンデンハイムめ、この婚約披露で周りの諸国に力を見せつけておくつもりだな。

「ねえ、どうしたの？ 黙っちゃって。早く船に上がりましょうよ」

レオはハッと我にかえった。

「そうだったな。玄武！ そのままゆっくり浮上してくれ」

玄武は船縁まで上がったところで一旦停止した。

レオは、甲板の上に誰もいないのを確認してみんなを玄武から降ろした。

レオはみるみるうちに小さくなった玄武を掴むとまた頭の上に置いた。

玄武はすっかり疲れたのか、レオの髪の中に潜りこんでしまった。

「リン、これから船の内部に入るぞ！俺の手を離すなよ」

「わかりました」

「テレサもはぐれないようにしっかりとついて来てくれ」

「ラジャー隊長！」

レオはあたりの様子を伺いながら船内に通じる階段から中の様子を覗き見た。

広い甲板とは違って意外と中への入り口は狭くなっている。薄暗い船内はあまりよく見えなかった。

「どうですか中の様子は？」

リンはヒソヒソ声でレオに囁いた。

「あんまりよく見えないけど人の気配はないな。よし！入るか」

3人は恐る恐る、階段を降りて行った。「ギイ…ギイイ」
階段の軋む音がやけに大きく響いて、リンの額からは冷たい汗が流れた。

「どう、レオ何か見える？」

テレサは特に怖がる様子もなく、かえってこの状態を楽しんでいるようにさえ見える。

「いや、まだ何も変わった様子はないよ。しかし広い船だなあ。下手したら中で迷っちゃいそうだよ」

「ちよっと冗談止めてよね。これくらいで迷ったりしないわよ。もしかしてレオは方向音痴なの？」

「ハハハ：実はそうなんだ。テレサ頼りにしてるぜ」

リンはそれを聞いてますます不安になってきた。

「よくそれで探険しようなんて言えますね。無責任ですよ」

「大丈夫だよ。みんな得意なことあれば苦手なこともあるさ。3人それぞれの力を出しあえばなんとかなるもんだよ」

その時、テレサは更に下にのびる階段を見つけた。

「ねえ、これを見て！もっと下に降りて行けるみたいよ」

「へえ凄いな、この船は3層に別れてるんだな。よし！行ってみよ」

うぜ」

下に行くにつれてどんどん暗闇は深くなって行く。足元もおぼつかない位の闇の中を手探りで進んでいくうちに、奥のほうから何やら声が聞こえてきた。

「海の覇者たるリンデンハイム！世界の脅威となるために、今日も私の命捧げん」

レオは二人を待たせておいて、一人様子を見に声のするほうに歩いていった。

ガチャ：ジャラ：

金属を引き摺るような鈍い音が聞こえてきた。

松明の灯りがポツリポツリと並んでいて、大勢の男達が薄灯りの中パンを頬張っていた。

その足首はまるで奴隷の証のように鉄輪がはめられ、鎖で繋がれていた。

「一体何人でこの船を漕いでるんだ！？この人数が52隻：想像もつかねえ数だな。どれだけ他国を侵略してきたんだか：」

レオは二人の元に戻り、先ほどの様子を話してきかせた。

「とにかく、ただの貿易商だったリンデンハイムが短期間で国家にまで発展したのは影で何かやってるに違いないな。俺はただの遊びのつもりで忍びこんだけど、こりゃあ凄い秘密が掴めるチャンスかもしれないぜ」

「秘密を掴んでどうするつもりですか？」

リンは厳しい顔でレオにたずねた。

「そりゃあ：この国をのっ盗るのさ！」

それをきいたリンとテレサは思わず

「ええっ！？」と叫びそうになり、慌てて口を手で塞いだ。

一夜の夢 その7

レオは驚く二人を前に更に言葉を続けた。

「別に今すぐじゃなくていいのさ。いつか然るべき時に使う切り札は大事にしまっておけばいい」リンの目は光を失っていても、この時確かにレオの頭上に王冠が見えた。

いつか本当にレオが国を造るのならば、その時自分も傍らにいたい。リンは身体の奥から熱い情熱が噴き出してくるのを感じて身震いした。

テレサはリンデンハイムの秘密と聞いて、益々好奇心がわいてきたらしく大きな董色の目をキラキラさせている。

「それを聞いてワクワクしてきたわ！じゃあ早速上の階を見てきましょう。時間は限られてるんだから早くしないとね」

レオはうなずいて、リンの手をとった。そろりそろりと階段を上がると、周りの景色が先ほどよりもはっきりと見えてきた。

沢山のカゴが並べてあり、中には果物やら豆やらが山盛りに入っている。

レオはリンゴを取ってズボンで拭くと、リンに渡した。

「リン、紅くて旨そうなリンゴだぜ。喰えよ。ほれ！テレサも腹ごしらえしとけ」

テレサはレオが放り投げたリンゴをキャッチした。

「こんなの呑気に食べてていいの？」

レオは真面目な顔でテレサに言った。

「腹が減ってちゃ戦は出来ぬって言うじゃん。俺は今までの経験から食える時にはしっかり食っておくようにしてる。次に食物にありつけるのはいつになるかわからないからな」

テレサはレオに言われるままリンゴにかじりついた。

腹ごしらえが済むと、カゴの間に隠れながら前に進んで行った。小麦粉やら砂糖やらの袋もまるで山のように重ねられていた。

「どうやらここは食物を積んでる船みたいだな。特に怪しいこともないだろ。次の船に移ろうぜ」

一行は甲板に上がり、次の船に行くために架けられた橋を素早く駆け抜けて、すぐに近くの物影に身を潜めた。この船は先ほどの船とは違い、武装した兵士が見張りに立っている。

「どうするレオ？これじゃあこの船は諦めるしかないかしら」

「でも：だからこそこの船は調べる必要があるんじゃないですか？」
レオはリンの言葉にうなずいた。

「ああ、俺もそう思う。ほら周りを見渡してみろよ。こんなに見張りが立っているのはこの船だけだ。怪しいぜ！」

武装した兵士は入り口に4人、船の前後にも数人控えている。「どうする？何か作戦はあるの？」

テレサの問いに、レオはニヤリと笑った。

「あんなの簡単さ！まあ見てろって」

レオは髪の毛を掻き分けて、玄武を取り出した。

「さあ玄武またお前の出番だぞ。今回は：そうだな作戦その3で行こう」

玄武はもぞもぞと頭、手足を全て引っ込めると身体が金色に輝き出した。

「さあ行け、玄武！」

玄武はフワフワと宙に浮かぶと、そっと低空飛行で兵士に見つかるギリギリの位置に着地した。

「よし、いいぞ玄武！」玄武は更に輝きを増し、兵士達が思わず目をそらしたその瞬間、レオは躊躇せずリンの手を引っ張り入り口に向かって駆け出して行った。テレサも慌ててそれに続く。

目眩ましにあった兵士達は玄武めがけて弓を引いたが、固い甲羅は矢傷も負わずドボンと海に滑り落ちた。

その頃、レオ達は階段を降りてまた薄暗い内部に潜りこんでいた。目が暗闇に慣れてきたので辺りをキョロキョロ見渡すと、先ほどの船とは全く違う光景に戸惑いを覚えた。

目の前には細かい彫刻が施された門のようなものがあり、その両端には魔除けの水晶玉が台座に乗せられて置いてある。

「なあにこれ？」

テレサは門の前に立った。

近づいてみると、柱の細工は何か古代文字のようにもみえる。

「リン何か感じるか？」

「うん：感じる。怒り哀しみ：マイナスのエネルギーが充満してるよ」

リンはこの船全体が強力な磁場となり、なにか強大なパワーを封じ込めていることに気がついた。

「この門、開けられないかな？レオちよつと押してみてよ」

テレサにそう言われたものの、レオはなんだか気が進まなかった。

「うーんなんだか嫌な予感がするんだよな」

「何よ怖いの？」

「そ、そんなわけないじゃん！よし見てろよ！」

「あ：待ってよレオ！」

レオはリンが止めるのもきかず、門を力一杯蹴りとばした。その時：

「ウオオオーン！オオオーン」

と、何か巨大な生き物の唸り声のようなものが響いてきた。

船全体がその音に共鳴してビリビリと震えている。

「うわ！なんなんだ？一体」

空には暗雲が垂れ込め、突然雹が落ちてきてバラバラと凄い音がリン達の恐怖をさらに強いものにした。

外では兵士達が異変に気付き、船の中に入ってきた。

「まずいな、兵士達の足音が近づいて来てる。下に降りよう」

レオはリンの手を引いて階段を降りて行った。
さっきの船と同じように大勢の奴隷達が船を漕ぐために集められていた。

ボロ布に包まれた浅黒い肌、筋肉で盛り上がった逞しい腕をもつ男達の目が一斉にレオ達に向けられた。

「ヤバイ…万事休すだぜ」

レオ達はすくみ上がってその場に立ち尽くした。

嵐の予感

その時、男達の間から太い腕がニュツと伸びてきてレオ達はその足元に押し込められた。

汗臭さに息を詰まらせながら上を見上げると、上半身裸のセオドアがニカツとウインクしていた。

「オツチャン！こんなところで何してるんだよ？」

セオドアはシツ！と人差し指を唇に当てると大きな声で歌い出した。

「偉大なるリンデンハイムよ我らの故郷この海原、命生まれる恵みの母よ」

その声に合わせて周りの奴隷達も歌い出した。

雪崩れこんできた兵士達は「ここに子供達が来なかったか？」と聞いてきた。

「ああ、来たけど俺達見て恐がってどっか行っちゃいましたぜ！」

兵士はチツと舌打ちするとまた慌ただしく出て行った。

「オイ！もう出てきていいぞ」

奴隷達はヒョイヒョイとレオ達をつまみ上げセオドアの前に突きだした。

「フヘェー！オツチャン達ありがとう助かったぜ」

白髪頭の奴隷がハハハと豪快に笑った。

「なあに、ルシン様には借りがあるからな。お安いご用さ！」

レオはセオドアの顔の広さに呆れながら、さっき見た神殿のことを聞いてみた。

「あれはこのリンデンハイムの守り神だ。なんでもあの化物に頼めば海を自由自在に操れるらしいぜ。そのお陰でリンデンハイムは立国出来たって話だ。あの坊っちゃんがそいつを手なづけたって聞いたな」

「グレンが？」

セオドアは暫く何か考えていたが、レオの肩を叩くと「よし探偵ご

っこはこれで終わりだ。充分収穫はあったからな」とこのゲームの終了を言い渡した。

「うん、そうだな。ここからは捕獲作戦に変更だ!」

3人は一斉に「エエッ!？」と驚きの声をあげた。

「レオったら：正気なの?」

「そうですね!リンデンハイムの守り神なんて：グレンさんが黙ってませんよ?」

セオドアはというと、反対するかと思いきや頭をボリボリ掻いて「うん：無謀だけど、もし出来たらスゲェよな」とまんざらでもなさそうだ。

レオは奴隷達の真ん中に陣どり、声を潜めた。

「だって考えてもみろよ。あの聖獣をてなづければリンデンハイムを戦わずして手に入れられる。違うか?俺の見たところあの聖獣はあそこに無理やり封じ込められてる。可哀想だよ!グレンの剣を見ればわかるだろ?：あの剣は青龍剣：と、いうことはあそこにいるのは青龍だ。あんなところに封じ込めるなんて酷すぎるぜ!だ・か・

ら助けてやるのさ！俺は聖獣使い、リンはその上をいく精霊使いだ。それにくらべてあっちは、まだ聖獣使いとして目覚めていないグレンだけだ。勝ち目はこっちにある！」

奴隷達はザワザワし始めた。

皆レオの弁舌に魅了されてしまったのは明らかだった。

リンは思ってもみない展開にただ呆然とするばかりであった。

青龍を捕まえろ！？

リンの気持ちはさておき、レオの提案に奴隷達は希望の光をみたようだ。

白髪混じりの逞しい奴隷が拳で脚を結わい付けてある鎖を力任せに引っ張った。

「俺はこんな船底で一生を終わるなんて絶対嫌だ！みんなもそうだろう？ どうだいここはこいつらの作戦に手を貸してやろうじゃないか！」

まだ顔に幼さが残る奴隷が立ち上がった。

「うん、俺ここから出られるならどんなことでもするよ！」

レオは満面の笑みを浮かべた。

「よし！ 決まりだな。じゃあ俺達は一旦パーティーに戻るよ。作戦を始まる前に捕まったら元も子もないからな。夜中、みんなが寝静まったところにまた来るぜ！ それまでに作戦を考えておくよ」

レオ達は目立たぬようにセオドアとは別れて別々に会場に戻って行った。

テレサはレオをどついて「あんなこと言ってどうする気よ！もし失敗したらあの人達だって無事じゃいられないのよ？」と、恐い顔で睨み付けた。

「テレサ、お前本当にこのままでいいと思ってるのか？リンデンハムは奴隷なんて使い捨ての道具くらいにしか考えてないんだぞ。見たろ？あの人達は死ぬまであの船底から出られないんだぜ」

リンは冷静に二人の意見を聞いていたが、やはりこのままでいいはずがない！との結論に達した。

「やってみよう！そして青龍もあの人達も助けるんだ。テレサ、協力してくれるよね？」

テレサはリンに頼まれるとなぜだか嫌と言えなかった。

「…仕方ないわね。で、どうやって助けるの？」

レオはウーンと唸ってチラリとリンの方を見た。

「リン、ひとつお願いがあるんですけど…」

リンは嫌な予感がしてテレサの後ろに隠れた。

レオはすかさずリンの後ろに回ってポンポン肩を叩いた。

「そんな逃げなくても…ねえ？まず話だけでも聞いてくれよ」

テレサはリンの肩に置いたレオの手を払い落とし、「聞かせて貰おうじゃないの。その作戦ってやつをね！」と息巻いた。

その頃セオドアは酔い潰れたロイを担いで、今夜泊まる船に案内して貰っていた。

「こちらでございます」

案内された船は他の船にぐるりと包囲されていた。

ひとたび反乱でも起こそうものならあっという間に攻め落とされてしまうに違いない。

甲板には小さな庭園までしつらえてある一際洗練された豪華客船で

はあるが、それは表向きのことで実際は敵に変わるかもしれない客を監視するための檻でしかないとセオドアはよくわかっていた。

「ウーシ…グレンの奴さすがに抜け目ないなあ。さて、どうしたもののか…」

セオドアはそう言いながらも自然と笑みが溢れてくるのを抑えようがなかった。

「見てろよ…一泡ふかせてやるぜ！」

セオドアは遥か遠くに見えるユーリの船の灯りをじっと見つめた。

青龍を捕まえろ!?

会場に戻るともうすでにパーティーは終わっていて、入口には赤い制服を着た二人のボーイがリン達の帰りを待っていた。

「お帰りなさいませ。セオドア様とロイ様はもうお部屋でお休みに
なっておりますのでこれからそちらにご案内させていただきます」

もうひとりのボーイはレオの前にかしずいて「シュバイツァー家の
馬車がお迎えに来ております」と告げた。

レオはボーイにチップを渡し、「悪いけど俺は今日こっちに泊まる
から馬車は返していいや。クラレンスにもそう伝えるよう御者に言
っておいてくれ」と、チップを渡した。

ボーイはチップをポケットに挟み込んで丁寧にお辞儀した。

「かしこまりました、お伝えしておきます。それではすぐにレオ様
のお部屋を用意いたしますので少々お待ち下さいませ。

メイドを呼ぼうとするボーイをレオは止めた。

「ああ、いいっていいって！俺もリン達の部屋にやっかいになるよ。久しぶりの再会だから一緒に過ごしたいんだ」

ボーイはニッコリと微笑んで「では、ご一緒に案内させていただきます」と歩き出した。

欄干を幾つも渡り、やっと宿泊する船に着いた。

3人はそつと部屋に入ると、ベッドの上で大の字になっているセオドアを叩き起こした。

「オッチャン！寝てる場合じゃないぜ。作戦会議だ！」

「ん？なんだよ…やっと来たか。待ちくたびれて眠っちゃったぜ。アフ…アアア！」

セオドアは大きな欠伸をして、ピンと背筋を伸ばした。

「よし！レオ話してみろ」

「じゃあみんな耳を貸せ！」

しばらくゴニョゴニョとレオがひとしきり喋り作戦内容を話した。

それを聞いたリンはため息をつき、テレサは不機嫌そうに頬を膨らませた。

セオドアは膝をポンと叩いて「うん！それでいこう！」と乗り気な様子だ。

「じゃあみんなパジャマに着替えて出発だ！」

レオはパジャマの両腕を付け根からビリビリと引き裂いた。

「これでヨシ！さあ行こう」

グッスリ寝ているロイの脇をそうっと通り抜け、船のドアをゆつくりと開いた。

セオドアが先頭で左右の安全を確認する。

「見張りも無し…か。なんだかひっかかるな。みんな、ちょっと船に戻れ！」

「何よ、どうしたの？見張りがいないなんてラッキーじゃない。早く行きましようよ！」

セオドアはテレサの頭をギュウギュウ押し戻した。

「いいから俺の言うことを聞け！」

「痛っ！もう乱暴ねえ」

レオはニヤリと笑って「やっぱり駄目かあ。すっかりマークされてるな。グレンの奴俺達を泳がす気らしい」とリンに話した。

「僕達を消したいなんてずいぶん怨まれたもんですね。セオドアさんの企みにグレンさんが気付かないわけないですもんね」

セオドアはアチャッ！と顔を歪め、「なんで分かったの？」とリンの頬を突ついた。

レオはセオドアの前に仁王立ちになって「どういふことか話して貰おうか？」と睨み付けた。

テレサはとっさにセオドアの腕をつかみじつとその目を見つめた。

青龍を捕まえろ!?

言いにくそうにしているセオドアを氣遣ってリンが口を開いた。

「ここでハッキリさせておきましょう。レオの目的は奴隸の解放と青龍を自分に従えること…そうですね?」

レオは普段大人しいリンがハッキリとものを言うのに驚きながらもしっかり頷いた。

「ああそうだ! リンだってそうだろう?」

「この際僕の意見はとりあえず後に回します。ではセオドアさん、あなたの目的はリンデンハイムの解体…そしてユーリ女王だ。違いますか?」

セオドアは参った! といったふうに大きな手で自分の顔をツルンと撫でた。

「そうだ、その通りだよリン!」

やっぱり!

リンはセオドアの性格からいって大人しく身を退くようなまねはすまいとにらんでいた。

テレサは掴んだ手にさらに力を込めた。

セオドアの心が逃げていかないようにしつかりと…

「そんなこととしてどうするの？ リンデンハイムとサルサラーンが戦争になるわよ！ あんただってただじゃすまないわ。ウンディーネが黙ってるわけないもの」

セオドアはすっかり忘れていたとばかりにポンと膝を打った。

「そうだったな。でも…まあなんとかなさ！ それよりどうなんだ？ 利害は一致したかいレオ隊長？」

レオは腕組みしてじっと考えこんでいた。

リンデンハイムの解体だと？

セオドアの奴…とんでもないこと言いやがる！ でも、まあどっちにしろ危ない賭けなら得物は多い方がいいに決まってる。

「ヨシ、やってやろうじゃん！ 今から俺達は反乱軍だぜ。もし上手

くいつても賞金首になるのは間違いない。覚悟は出来てるか？」

「もちろん!!」

三人は声を揃えて叫んだ。

「ウニャ？ 煩いぞおまえら！」

ロイは寝がえりを打ってまたイビキをかき出した。

「シート！シート！さあ行きましょう、夜は短いのよ」

「そうだったな。さて、どこから出る？ 神殿のある船までは遠いぜ」

リンはそう呟くセオドアの手をとり、ウンディーネの指環を触った。

「ここはひとつ奥さんの力を借りますよう」

「ウゲッ！」

セオドアは変なうめき声をあげて顔をひきつらせた。

「な…ななななんで？玄武じゃダメなの？」

「ああ、玄武はさっきので力を使い果たしちゃったんだ。頼むよオツチャン！」

「ハアアアア…」

ながくいため息を漏らした後、セオドアは指環にキスした。

「愛する愛する可愛いハニー出てきて俺を助けてちょよ！」

テレサはアツカンベーツと舌をだし、「バーカ！」と毒づいた。

青龍を捕まえろ！？

セオドアの指環が青く光り、水しぶきを振り撒きながらウンディーネが姿を現した。
相変わらずの美しさに皆息をのんでいる。

「お呼びか？ダーリン」

ウンディーネは早速セオドアにまわりついた。

セオドアはコホンと咳払いして「ああ、ちょっと聞きたいことがあってな。どうやらこの船に青龍がいるらしい。お前知っていたか？」と威厳をただして問いかけた。

「さあ？私のペットはそこにいる玄武だけじゃが…確か青龍は前回の四神の戦いで朱雀に負け、主を探しに旅に出たときいたがのう」

リンは興味深げにうなずいた。

「聖獣の力は主の実力で大きくも小さくもなるんですよね？」

ウンディーネは忌々しくレオを睨んだ。

「その通り！見てみるこの玄武のみすばらしい姿を：お前、ちつとも成長しとらんな」

レオはプウツと頬を膨らませフンツ！と鼻息を荒くした。

「それで？妾に何をして欲しいのだ？」

セオドアは真剣な顔でウンディーネを見つめた。

「これから俺達は青龍を捕まえに行く！それでお前にも力を貸して欲しいんだ。俺達を神殿のある船まで運んで欲しい。それから波を起こしてンデンハイムの船を拡散して欲しいんだ。この鉄壁の要塞を破るぞ！」

ウンディーネはホホホと笑い、「容易いこと！このウンディーネにおまかせあれ：さあ、命令を下しておくれ小さな精霊使いよ」

「：えっ？僕ですか？」

ウンディーネは厳かに告げた。

「我々は精霊使いの命令にしか従わない。1の主はダーリンだから

ラグマダーンに恵みを与えている…だが、私に命令を下せるのはお前だけなのだよリン！」

「そ…そうでしたか」

ウンディーネはフワリとリンの前に佇んだ。

「さあ、命令を！」

「水の精霊ウンディーネよ！我々を青龍の前に運んでくれ！」
リンの額の刻印が白く輝いた。

「御意！」

ウンディーネはリン達を大きなシャボン玉で包みこんだ。

シャボン玉はコロコロと転がりながら海の中を走って行き、青龍のいる船までくるとポンと弾んで甲板に出た。見張りの兵達にリン達の姿は見えていないらしく、のんびりと大きなあくびをしている。

シャボン玉は船内に入り、神殿の扉を通り抜けたところでパチンと弾けた。

「す…凄いわね。なんだか目が回っちゃったわ」

テレサはフラフラと床にしゃがみこんでしまった。

レオは神殿の天井に描かれている不思議な紋様に目を奪われている。

「なんだろうあれ？　そういえば神殿の柱にもびっしりこの模様が彫られていたよな？」

リンはこの部屋にきてから妙な胸苦しさを感じていた。思わず膝をつき、うずくまってしまった。

「リン！　どうした？」

セオドアは青い顔のリンを抱え起こした。

「…す、すみません。ちょっと気分が悪くて…でも大丈夫です。この部屋には結界が張ってあるんだと思います。だから青龍も出られないんでしょうね」

セオドアは眉を寄せたて呟いた。

「結界だと…？」

リンは静かに首を縦に振った。

「オイ！それより肝心の青龍の姿が見えないぜ。一体どこに隠れてるんだ？」

必死でさがしまわったレオは、部屋の奥にもう一つ立派な扉があるのを見つけた。

「みんな来てくれ！きつとこの中だ」

耳を押し当てると、中から「ゴオオン！ガアアア！」と青龍の鳴き声らしき音が漏れてくる。

リンは勇気を振り絞りドアを肩で押し開けた。

ギイイイ…

恐怖で思わず目を閉じてしまったが、うっすらとまぶたを開けてみると、蓮の花が浮かぶ美しい池が目前に開けていた。

「ウワァ！なにこれ？船の中に池があるなんて不思議ね」

セオドアは池をのぞきこもうと首をのばしているテレサを押し留めた。

「安易に近づくな！青龍に襲われるぞ！」

テレサはそう言われてジリジリと後ずさりした。

「レオ！様子を見てきてよ」

「ええっ！俺かよ？」

「あつたりまえでしょ？仮にも聖獣使いじゃない！早く捕まえて来てよ」

そう言われて仕方なくレオは、そおっと池の端から水面をのぞきこんだ。

「何か見えた？」

テレサは目を輝かせてレオの返事を待っている。

「うーん…別に変わった様子はないなあ…あれ？なんだこれ？」

いつの間にかレオの手の甲に小さなトカゲが張り付いていた。

レオがトカゲの尻尾をつまみあげると、その体からは信じられないようなうなり声が発せられた。

「ゴオオン！ギャオウー！」

トカゲが鳴くたびに部屋がガタガタ揺れるくらいの大音量だ。

「嘘…まさか…これ？」

みんな目を丸くしてその小さなトカゲを凝視した。

青龍を捕まえろ!?

よく見ると、それは青銀色の鱗をもつ美しい龍であった。

「トカゲ：じゃないわね、紛れもなくこれが青龍よ！それにしてもどうしてこんなに小さいの？トカゲどころかミミズにしか見えないわよ」

セオドアは笑いたいのをぐっところえて「どうやら青龍はお前が主と決めたみたいだな：ププッ：」と微妙な顔のレオを覗き見た。

「いま笑ったろ？」

「：ププッ笑ってないよ。いやあ聖獣を二匹も従えて凄いなあって感心してただけさ」

レオはジットリした目でセオドアを睨み付けた。

「フンッ、まあいいさ。目的は叶ったんだ。さあ次はどうする？」

「次なんてないさ！お前達はここで死ぬのさ。ルシン、馬鹿なやつめ俺がお前の魂胆に気付かないとでも思ったか？」

声の方を振り返ると、柱の陰でグレンがニヤリと不敵に笑っていた。後ろには弓矢をつがえた兵士達が一斉にレオ達の方に的を絞っている。

「…いや、わかっていたさ。お前は俺を殺したいほど憎んでる。ユ―リを愛するようになってずっとこのチャンスをうかがっていたんだからな。だがな、俺も黙ってお前に殺られるつもりはない！お前達の大事な守り神である青龍はこのレオを主に選んだ。さあレオ！青龍に命令を！」

レオは手のひらに青龍を乗せると、大声で叫んだ。

「雷を司る東の聖獣青龍よ！今こそ封印を解き放ち嵐を巻き起こせ！」

青龍はぐつと身を引き起こし唸り声を上げた。すると、ピカリと一瞬静電気のようなものが起こりレオの前髪を揺らすていどのつむじ風が吹いた。

シーンと静まりかえる中、青龍はレオの掌の上でモジモジとぐるを巻いて眠ってしまった。

「…あれ？これでおしまい？そんな〜！」

兵士たちからは大爆笑が起こった。

「ククク可哀想な青龍！なぜよりによってこんな奴を主に選んだ？」

セオドアはグレンの前に歩み寄った。

「そりゃあ無理矢理封印するような呪術使いより、正統な聖獣使いの方がいいに決まってるだろ！」

グレンの目が妖しく光った。

「ユーリにしてもそうだろう？無理矢理閉じ込めて側においておけばそれで満足か？」

その時、正面の扉を開いてユーリが入ってきた。

「ルシン！それは違うわ。私はね、嫌々グレンといえるんじゃないの。グレンは父上の築いたリンデンハイムを立派に護り、大きくしたわ！あなたみたいな自分勝手な風来坊じゃないの！私はね：私は自分の意志でここにいるのよ」

セオドアはユーリの意志の強そうなツンと上を向いた可愛らしい唇を見て、正直負けたと思った。

間違いなくユーリは自分に恋をしている、だけど彼女は恋だけじゃ生きていけないこともよくわかっている大人の女なのだ。

「…そうかそれなら仕方ないな。だがな、やっぱり俺は力だけで征服していくようなやり方は納得出来ない！奴隷達をこんなふうに使って捨てるやり方は特にな！」

セオドアとグレンは剣を抜き睨み合った。

船出

グレンは吐き捨てるように「綺麗ごとを言うな！」と怒鳴った。

剣が激しくぶつかりあうたびに火花が散る。

「それならお前は殺されそうになってもハイどうぞと言って身を投げ出すのか？ 違うだろう、違うからこそ剣を抜いたのさ！」

グレンの気迫に負けじとセオドアも荒い息をしながらも言い返した。

「グレン、力で支配するものはまた力で征服されるのが定めなのだ！ 今にきつとそれが分かる！」

テレサは二人の戦いに気をとられているレオの腕を掴んだ。

「何をグズグズしてるのよ！？ 早く船団をバラバラにしなきゃ！」

レオはハッとしてリンの方を向いた。

「リン！ 俺の今の力じゃどうにもならない。お前の力でなんとかしてくれ！」

リンは難しい顔でうなずいた。

「分かりました。やってみます！」

リンは胸に手をあてて叫んだ。

「出ですよ！砂の精霊ラシード、船を遠くに飛ばしてくれ」

ゴオオオオ！！

遠くから物凄い号音が近付いてくる。

見張りの兵士が怯えた顔で甲板から慌てて駆け降りてきた。

「た…大変です！浜辺の方から巨大な竜巻が砂煙をあげて近付いています。このままだと転覆の恐れが！」

ユーリはその報告を受けてすぐに命令を下した。

「船と船をしっかりと繋ぎ止めるのよ！すぐに各船に伝えなさい！」

兵士は慌てて甲板に上がり、すぐにまた引き返してきた。

「船をつなぐ鎖が…鎖が総て断ち切られてます！もうすでに前方の船は離散してしまいました！」

レオはくたびれた様子の玄武を撫でた。

「でかした玄武！」

ユーリは急いで甲板に上がった。

まるで陸地のようにビッシリと海を埋め尽くしていた船団がすでにちらほらと数えるくらいしか残っていなかった。

「フフッ…やられたわね」

ユーリはその光景を見て、いっそ清々しい気持ちになった。

「また最初からやり直したわね」

ユーリは目の前の戦いに夢中の二人に向かってパンパンと手を叩き「もうおしまいよ二人共！」と戦い終了を宣言した。

「グレン、私達の負け。外をご覧なさい」

グレンは急いで甲板に上がり、その光景を目にして息をのんだ。

「船が…船がない！どこだ、どこにやった！？」

狼狽えるグレンにユーリはゆっくりと言い聞かせた。

「グレン…船団は漂流して行っただわ」

「そ…そんな！」

「もし船が散り散りになったとしても愛国心や忠誠心があればみんなお前のところに帰ってくるさ。しかし、ただ力で抑えつけていただけならきつと彼らは帰って来ない。グレンそうだろ？」

ガックリと肩を落としたグレンをユーリが優しく抱き締めた。

「ええセオドアあなたの言う通りだわ。私達はここで皆が帰ってくるのを待つ事にする。そしてその家臣達ともう一度理想の国家を創るわ！」

グレンは顔をあげてユーリに微笑みかけた。

「そうだな。もう一度やり直した！ルシン、今回は俺の負けだ。この船はお前達にやろう。だが、今度会う時は必ず勝ってみせる！」

セオドアは嬉しそうにうなずいた。

「ああ、楽しみにしてるぜ！」

グレンとユーリそして残りの兵士達は近くの船に移って行った。

「さて！これからどうする？」

テレサが嬉しそうに言った。

「みんなで旅をしましょうよ。リンは精霊使いとして修行しなくちゃだし、レオだって同じでしょ？セオドアも色んな国を回って剣豪達と腕比べしたいだろうし、私は…幸せを探すわ！私にとっての幸せを探す」

新しい船出を祝うように青龍が高らかに鳴き声をあげた。

第2章 冒険の始まり（前書き）

第2章が始まります。不思議の国のアドベンチャーどうぞお楽しみに！

第2章 冒険の始まり

海の色がクリスタルブルーからエメラルドグリーンへといつの間にか変化している。

だいぶ沖の方に流されたようだ。

風は凪いで舟はゆったりと波間に漂っていた。

テレサは食糧庫を漁り、真っ赤に熟れたリンゴを4つ取り出してスカートでくるんだ。

「これだけあればしばらく海の上でも大丈夫だわ」

食糧庫には果物や日保ちしそうな堅焼きパンが沢山入っていた。

テレサはチーズをひときれとパンも幾つかスカートに放り込んだ。

「もしもの時を考えて普段着の上にパジャマ着ておいて正解だったわね。陸地に降りたらまずはみんなの服を買わなくちゃ！…それにしてもロイは今頃驚いてるでしょうね」

どこまでも続く地平線を眺めながらテレサは今までの旅を懐かしく振り返っていた。

「オーイ！テレサばっくとしてないで早くメシにしようぜ。腹減ったよ」

レオはセオドアが広げた地図をよけて手招きした。

「はいどうぞ。いっぱい食べてね！どう？陸地は近いの？」

セオドアはリンゴを頬張りながらうなずいた。

「この方角に真っ直ぐ進めば明日には陸地が見えてくるはずだ」

「楽しみね！私達、好きなところに自由に行けるんですもの。ロイには申し訳ないけど歌劇団なんか売られなくて本当に良かったわ」

「へっっ！もう買い手が決まってたのか？」

レオは意外そうな顔つきでテレサを見つめた。

「当たり前じゃないの。こんな美人ならすぐに買い手は決まるわよ」

「へっ…よく言うよ！」

「それで？その物好きな買い手は一体誰なんだ？」

「聞いて驚きなさい！なんと月の城のルイザ様よ」

セオドアは興奮した様子で膝をポンポン叩いた。

「なんだって！？そりゃあホントかよ？お前：勿体ないことしたなあ。月の城といえば誰ひとり知らない者はない有名な歌劇団じゃないか？女どもの憧れのまどだ。なんでも、その女主人のルイザはやり手で団員はみな王族や貴族の妃に納まってるって話だぞ」

「でもセオドアさん：月の城の訓練は相当厳しいと聞いています。果たしてテレサについていけるかどうか…」

リンの言葉にセオドアも納得したように「そうだな。ワガママだし、色気もないし：向いてないかもな？」とニヤニヤしながらテレサの顔を見た。

「色気がなくてすみませんね！ふん、もう知らない！」

テレサはかじりかけのリングをセオドアにぶつけると、船の中に入ってしまった。

「あゝあ行っちゃったよ。すぐムキになっちゃって！なんか可愛いなアイツ」

リンはレオの声の優しい響きにハッとした。

レオ…もしかして？

レオはリンの想いなどしるよしもなく、地図を広げて新しい世界への期待で胸を躍らせていた。

人でなしの国？

セオドアは船のイカリを降ろし、陸地に降りるための橋桁を渡した。

「ヒャッホー！見ろよ、この活気。俺にはやっぱり田舎より都会が合ってるぜ。」

「レオ、初めての場所では何事も慎重にね！その国によって人の考え方も違うものだよ。いたずらになんにでも首を突っ込むのはやめてね。とりあえず自分からは剣を抜かないって約束してよ。セオドアさんですよ！」

セオドアは首をすくめて苦笑いした。

「分かったよ。約束する！なあレオ？」

「ええ？そんなの約束出来ないよ。甘いなリンは！やられる前にやらなきゃ幾つ命があっても足りないぜ」

渋い顔のリンを慰めるようにテレサが肩をポンポン叩いた。

「ああいうヤツは自分で体験しないと納得しないわよ。言うだけム

ダムダ！」

レオはすでに船から降りてみんなを手招きしている。

「早く来いよ！」

全員船から降りて改めて乗ってきた船を眺めた。

「立派な船ねー！でもリンデンハイムのマークがあちこちにあってこれじゃあまるで私達グレンの配下だわ」

「ハハハ気にするなよ。船を離れちゃえばわかんないだろ？早く行こうぜ！」

「それもそうね…行きましよう」

海岸線を少し入るとまるでお祭りみたいにびっしりと露店商が軒を連ねていた。

「いらっしやい！その坊や、このリチャの実はナラカンの特産品だ。一口食べてみな、舌がとろけるくらいに甘くて旨いよ！」

坊やと呼ばれてプリプリ怒りながらもレオは差し出されたりチャの実を口に放り込んだ。

「旨い！こんなに旨い果物初めてだぜ」

レオは指先に付いた赤い果汁を舐めながら叫んだ。
店の親父は得意げな表情で胸を叩いて自慢した。

「そうだろう？このリチャの実はずちの果樹園で採れたものだ。ほら、そっちの坊やもお食べ」

親父はリンにもリチャの実を渡そうと数粒つかんで差し出した。

「すみません、この子目が見えなくて…リンほら！」

レオが代わりに受け取り、リンに渡してやろうとした途端、店の親父の顔色が変わった。

「ま…まさか…あんた…そんな…た、大変だ！！」

ガタガタ震えながら恐怖で顔をひきつらせているのに気付いたセオドアは、本能でこれはヤバイ！と判断した。

「テレサ、どうやらまずいことになりそうだ。全力で走り抜けるぞ！リンの手を離すな。もし、はぐれたら船に行け。いいな？」

テレサは小さくうなずいてリンの手を握りしめた。
その瞬間、店の親父が大声で叫んだ。

「大変だ！ホロンが…ホロンがいたぞ！誰か、誰か捕まえてくれー！」

テレサは騒然とする広場を猛然と突っ走った。

異変に気付いた警備兵がワラワラと集まってきている。

セオドアとレオは兵たちの注意をひきつけるため店の品物をひっくり返しながら逃げていった。

人でなしの国？

ホロン？ 一体何の事だろう…

リンは訳もわからずテレサに手を引かれるまま迷路のような裏路地を突っ走っていた。

「ハアツ…ハアツ…痛っ！」

テレサがガムシヤラに走るのでリンの体はあちこちに打ち付けていた。

いつの間にか二人は街を抜け、里のほうにまで降りてきてしまったようだった。

景色は一面の麦畑で収穫間近の金色の穂が風にそよがれザザッザッと音を立てている。

二人はその中にスッポリとしゃがみ込んで息を整えていた。

「な…なんとか巻いたわ！ リン大丈夫？ なんせ夢中で走ったから…どっか怪我してない？」

テレサはリンのズボンをめくりあげた。

「うわっ！やっぱりアザ出来てる。早く船に戻ったほうが良さそうね。セオドア達もなんとか逃げ切ったかしら？」

「…ねえテレサ、ホロンって何だろう？あのおじさんそう叫んだよね？何か…声が凄く怯えてた」

テレサはなんとなく察しがついていた。

生まれてこのかたテレサはずっと旅ばかりしてきた。その中には疫病にやられて動けない人達を一ヶ所に集めて隔離しておく村や街が幾つもあったのだ。きつとさっきのオヤジもリンの姿を見て誤解したのだろう。

「…さ、さあね。きつとあんたと誰かを見間違ったんじゃないかしら？」

「そうかなあ…それにしてもなんで捕まえようとするの？別に何も悪い事してないのに…変だよ」

「…そ、それは…私だって分かんないわよ！」

その時、テレサの大声に驚いた鳥達が一斉に飛び立っていった。

「そこにいるのは誰だ！俺の畑で何してやがる？隠れてないで出て

こい！」

パーン！パーン！と乾いた銃声が鋭く耳に突き刺さる。

二人は小さく固まって震えていた。

「どうするテレサ？」

「どうするったって…相手は銃を持ってるのよ。ここは大人しく言う通りにするしかないわ」

テレサは両手を上げてゆっくりと立ち上がった。

「撃たないで！ちょっと道に迷ってただけよ」

農夫は銃を構えたまま「こっちに出てこい！手は上げたままできな」と怒鳴った。

リンもゆっくり立ち上がってテレサのあとに続いた。

農夫の前まで来ると、やっと銃をおろしジロジロと二人を眺め回し

た。

「ここらじゃ見かけない顔だな。ん？お：お前ホロンだな！なんだ
ってこんなところに居るんだ？さては脱走してきたな！」

農夫は慌てて銃を構え、引き金に指をかけた。

「ちょっと待ってください！ホロンってなんですか？僕達、船で旅
してるんでこの国のことは全く知らないんです」

「ホロンを知らんだと？お前：その腕はどうした？目もだ！ホロン
にかかって腐っちまったのと違うのか」

「違うわ！リンは精霊使いなのよ。腕はラシードにやられたの。目
は：目は戦争で無くしたのよ！」

農夫は胡散臭げにリンの周りを一回りした。

「この坊主が精霊使いだっていう証拠でもあるのかい？」

テレサはリンの上着をはだけた。

「これがラシードの契約印、こっちの額のはウンディーネの契約印よ！」

農夫の表情はそれでも厳しいままだった。

「そんなの何の証拠にもならねえよ。ヘッ！本当に精霊使い様なら試しにそのラシードとやらを呼んでみてくれねえか？実際見て見なくちゃ信じられん！」

「仕方ないわね！リンこうなったら目にも物を見せてやりなさい！」

「そんなことのために呼べないよ…」

テレサは怖い顔でリンを睨んだ。

「どうして！？このままじゃあ二人とも監獄入りよ！じゃあ…そうね。この麦を砂嵐で吹き飛ばしちゃえば？」

「そんな！可哀想だよ」

「じゃあどうするっていうの！？」

リンは困り切って農夫に聞いた。

「どうしたら信じてくれますか？」

「そうだなあ。じゃああっちの椰子の木並木の椰子を全部下に落と
してくれ！そしたら信じてやる」

リンはホッとして胸の契約印に手を置いた。

人でなしの国？

リンは大きく一呼吸して空に向かって叫んだ。

「出でよ！砂の精霊ラシード！」

農夫は空を仰ぎ見て呟いた。

「…なんにも見えんじゃないか」

テレサは彼方向こうに渦巻く砂煙を指差した。

「あっちよ！」

「こ…こりゃあ大変だ！竜巻だ、竜巻が来るぞー！！！」

農夫は慌てて辺りの家のドアを叩き、避難するよう声をかけた。

「ちょ、ちょっとオジサン！落ちついてよ。あんたが呼べって言ったんでしょ」

テレサは呆れた顔で農夫のシャツを引っ張った。

「こ、これが慌てないでいられるかってんだ！ああどうしたらいいんだ俺達の村があゝ村が無くなっちまうよ」

とうとう泣き出してしまった農夫の顔をグイと上向かせ、竜巻の中から現れた翼を持つ獅子ラシードを見せてやった。

「リンはラシードの主人ですもの心配ないわよ」

この騒ぎで外に出てきた村人達はラシードを見て悲鳴を上げるや這いつくばって拝みだす有り様だ。

「我が主リンよ！何用か？」

「ラシード、ヤシの並木の実を全部落として欲しいんだ」

「…承知した！」

ラシードは白い翼を数回羽ばたかせた。

すると、竜巻が現れてあっという間にヤシの木をなぎ倒して吸い上げてしまった。

すると今度は固いヤシの実がまるで雨みたいにドサドサと空から降ってきた。

村人達はギャーギャー叫び声をあげながらぶつかったら大変とばかりに軒下に避難している。

ラシードは作業が済むと、サッサと竜巻と共に帰っていった。

「…リン、ちょっとやりすぎちゃったかも？」

あとかたも無くなったヤシの並木を見てテレサはゴクツと唾を飲み込んだ。

「えっ！？失敗したの？」

「ううん！そうじゃなくって…」

村人達はワラワラと出てきてリンとテレサを取り囲んだ。

「ええと…ごめんなさいね。ちょっと加減が難しかったみたいね…ハハハ…」

するとさっきの農夫がバツとリンの手をとった。

「この方は我々の救世主だ！神様ありがとうございます…ありがとうございます」

農民たちは皆目に涙を浮かべリンにとりすがってきた。

「ちょっとちょっと、どういふことよこれは！？」

テレサは必死でリンの前に立ち塞がった。

「みんな、精霊使い様が驚いておられる。こんなところではなんじや、どうぞワシの家においでください。この土地の旨いものでも召し上がりながらワシらの話でも聞いていただきましょう」

白い髭を撫でながら、村長らしき人物は有無を言わせぬ勢いで二人を自分の屋敷へと案内した。

「テレサ…僕、嫌な予感がするよ。ここで絶対食べたり飲んだりしないでね。そんなことしたら断り難くなるから。絶対だよ！」

「もう、リンったら心配症ね。みんなあんたが精霊使いと知って歓迎してるだけよ」

リンはそれでもギュッとテレサの袖を握って抗議した。

「わかったわよく！食べないし飲まない。それでいいんでしょ？」

リンはやつとその手を離すと、渋々屋敷の中に入って行った。

人で無しの国？

屋敷の広間には果物や料理が並べられ、主人自慢のシェリー酒が振る舞われた。

「さあさあ精霊使い様、どうか召し上がって下さい。これは我々の歓迎の気持ちです！皆の衆も今日は精霊使い様がこの村にいらしためでたい日だ、さあ共に祝おう！」

リンの杯にもテレサの杯にもシェリー酒がなみなみと注がれ皆立ち上がって杯を高々と掲げた。

「カンパニー！」

リンは呑む真似だけにしたのだがテレサは全部呑み干してしまった。

「テレサまさか君呑んだりしてないよね？」

「や…やあねえリンったら、呑むふりだけよふりだけ！」

「ほんとかなあ…」

リンは目が見えないもどかしさを感じながらもテレサの隣で固くなっていた。

「おや？ どうしました精霊使い様、料理が口に合いませんか？」

村長はリンの隣に席を移した。

「い…いえそんな事は…」

「では、どうぞ召し上がって下さい。村の女達もあなた方を喜ばせようと腕をふるったようです。これは山で採れたブドウの果汁です甘くて美味ですよ」

そうまで言われて流石のリンも断りきれなかった。

「では少しだけ…」

甘い汁がリンの喉を心地よく流れ落ちた。

「う…旨…！」

村長は笑って杯に果汁を注いだ。

「そうでしょう？こんなに甘いブドウはヤナ谷にしかありませんかな」

「ヤナ谷？」

「ええ：深い森の中にある谷です。なかなか人が近付かないため、あの辺のブドウが旨いことはこの村の者しか知らないですよ」

「そうなんですか：でも、どうして人が近付かないんです？もしかして熊とか出るんですか？」

「えっ、ええまあ：兎に角今日はゆっくり休んで行って下さい。部屋の手配もさせていますから」

「いいえ、そんな僕達は船に帰ります。連れもおりますから」

村長は慌ててリンを引き留めた。

「とんでもありません！もう外は暗くなりました。そろそろホロン達が出てくる時間ですよ。夜は奴らの世界です。間違っても夜外に

出てはいけませんよ、いいですね！」

「ハ、ハア……ところでホロンって何ですか？ さっき村の人が僕を見てホロンだって叫んだんです」

村長は頭を垂れて謝った。

「それは申し訳ありませんでした。ホロンとは流行り病の名です。高熱が出て、手や脚が腐ってもげてしまうのです。人に伝染する可能性のあるためある場所に隔離されています。ですが人が歩き回らない夜は彼らの自由が認められています。実は……私の娘もあそこにいるですよ。もう何年も姿を見ていませんが……哀れでなりません」

村長は涙ぐみながらそう話してくれた。

「そうでしたか……すみません余計な事を聞いてしまって」

「いいえ……実はその事で一つ頼みがあるんです」

テレサは二人の間に割り込んできた。

「ホーラやっぱりね。何か魂胆がありそうだと思ったんだ。ただで

こんなにご馳走してくれないわよね。でもね、言っておきますけどリンは神様じゃあないのよ。流行り病を治したり死んだ人を甦らせたりなんて出来ないんだからね！」

「テ、テレサ：君酔ってるね？仕方ないなあもう。すみません今日は酒の席ですし明日ゆっくりとお伺いします。お先に部屋で休ませて貰ってもいいですか？」

「ええもちろんですとも。ユーリ来なさい！」

村長に呼ばれて来たのはリンと同じ年頃の少年だった。

村長は息子のユーリを二人に紹介し、部屋に案内するよう命じた。

「こっちです。ついて来て下さい！」

ユーリは憧れの精霊使いを目の前にして興奮したのか矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。

「さっきの精霊はなんて言うんですか？凄かったなあ。あつというまにヤシの木を吹き飛ばして！格好いいなあ。どうしたら精霊使いになれるんですか？」

ヨロヨロの千鳥足でテレサはユーリにのしかかり、ケケケと笑った。

「あのねえ…精霊使いっていうのは生まれながらに精霊使いの！解る？つまらない事聞いてないでこっちの質問に答えなさい。あなたの親父さんの目的はな〜に？」

「そ…それは…」

困っている様子のユーリにリンは助け船を出した。

「テレサ、それは明日村長が話すって言ってたじゃないか」

「え〜？…グ…グウ…スピツ…」

ユーリは苦笑いを浮かべ、テレサを背中におぶった。

「寝ちゃってますよ。さあ着きました。この部屋です」

さすがに村長の家だけあって二人には広すぎるくらいのスペースがあった。

ユーリはテレサをベッドに寝かせ、布団をかけてやった。

「すごく可愛い人ですね。リン様の恋人ですか？」

「エエッ？ち…違うよ。一緒に旅してる仲間なんだ…」

「そうでしたか…すみません俺一言多いっていつも叱られてるんですよ。またやっちゃったな…エヘヘ。それじゃあお休みなさい」

「はい、おやすみなさい。今日は本当にありがとうございました」

ユーリはニッコリ笑うと部屋から出ていった。

「フウ…恋人だって？なんだってそんな勘違い…僕みたいなお化け誰も好きになってなんてくれないよ…」

リンは隣で寝ているテレサの手をそっと握りしめた。

人で無しの国？（後書き）

リンのテレサへの想いが悪い方向に…次回こう御期待！

人で無しの国？

窓からは柔らかい光が射し込み、リンの体を優しく包んでいた。

「う…ううん…もう朝かな。テレサ、まだ寝てるの？」

リンは隣のベッドを手で探った。

すでにベッドには温もりは残っておらず、冷たいシーツはグチャグチャに乱れている。

「テレサ…テレサどこだ？テレサー！テレサー！」

叫び声を聞き付けた村長達は慌ててリンの部屋に入ってきた。

「どうしました!？」

「あの…テレサがいないんです！誰か彼女を見かけませんでしたか？」

「いや…リン様の部屋でまだ寝ているとばかり。ん？あれは…」

ユーリは部屋の柱に矢文が刺さっているのを見つけて引き抜いた。

紙を広げると、そこには『精霊使いは我々が預かる』と書いてあるではないか。

「た…大変だ！ホロン達はテレサさんが精霊使いだと勘違いして連れ去ったんだ」

「そんな…どうしたらいいんだ」

リンは途方にくれてガックリと崩れ落ちた。

「オーイ、リンいるかー？テレサ迎えにきたぞ！」

「あの声は…レオ！レオー！こっちだ、早く来てくれ！テレサが大変なことに…」

扉をバタンと開けて、レオとセオドアが姿を現した。

「あなた達は？」

ユーリは怪訝な顔で二人を見た。

「こいつの連れだよ！ いやあ、ずいぶん捜したぜ…この村に砂嵐があつたって聞いてピピンときてさ。ところでテレサがどうしたって？ そういえば姿がないな」

ユーリは矢文を渡した。

「なんだこれ？ 誰だよ、テレサを拉致ったのは？」

セオドアはレオから矢文を取りあげてざっと見たあとその紙を丸めて棄てた。

「何で犯人は精霊使いを必要としているんだ？ どうなんです、何か知っていることがあれば教えてくださいよ」

「……………」

村人達はみな口ごもってしまいレオが近付くとスツと逃げてしまう。

「おかしいな。なぜみんな黙ってる？ 何か隠してますね、村長どうして言えないんですか？」

セオドアは村長に詰め寄った。

「そ…それは…そのう…」

レオはペツと唾を吐いた。

「こいつら吐かないつもりだぜ、仕方ないなこんな事はしたくないが…リン！今すぐラシードを呼び出せ、こんな村あつという間に吹き飛ばせるだろ？」

リンはうなずいておもむろに立ち上がった。上を向いて大きく息を吸いこむ。

そして口をあいた瞬間、青ざめた顔でユーリが叫んだ。

「生け贄だ！ホロンは精霊使いを生け贄にして神に病気の治癒を願うつもりなんだ！」

「な…なんだって！？それは本当ですか？」

「え、ええ本当です。ヤナ谷の奥に火の海があるんです。そこにホロンたちが祀る巨神像があります。そこには火に投げ込まれた精霊使いから神が生まれ、その神が病を退治する様が画かれているのです」

リンは怒りに満ちた顔でユーリの襟をむんずと掴んだ。

「そのヤナ谷とはどこだ！どこにあるんだよ！！」

今まで見たこともないリンの恐ろしい形相に、セオドアもレオも冷たいものを背中に感じた。

それは紛れもなくリンから放たれる強烈な負のエネルギーだった。

「止めろリン！放してやれ、そいつは意識を失ってる…」

セオドアは慌ててユーリからリンの手をもぎ取った。

リンは天を睨み大声を張り上げた。

「砂の精霊ラシード出でよ！！」

空はどんよりと曇り、遙か彼方から物凄い轟音と共に砂嵐が現れ、リンを吸い上げるとそのまま森の方角に行ってしまった。

「まずいぞ、リンが暴走した！追いかけないと…レオ！玄武か青龍を出してくれ」

「そ、そうだな。よし！青龍お前頼むよ」

レオは腕に貼り付いているミミズ大の青龍を掌に乗せた。

指先で突いても何の変化もない。

しかもよくみるとなんだかカサカサして干物みたいに縮んでしまっている。

「や：ヤバイ！そういうばずっと放っておいてほとんどコイツの存在忘れてたんだよな。セオドア、水だ！水を持ってきてくれ！」

セオドアは近くの井戸から水を汲んできた。

レオはその水桶の中に干物になった青龍をペイツと投げ入れた。

すると、青龍はあっという間に元気を取り戻しスイスイと泳ぎ回った。

「上手くいったぜー！よし、青龍命令だ。俺達を乗せてラシードを追え！」

青龍は水桶から空中に跳ね上がった。

みるみる巨大化した青龍に跨がった二人は空高く舞い上がって行った。

人で無しの国？

レオは青龍の背中でリンを鎮める方法を必死で考えていた。

「クソッ！どうしたらいい？俺達でリンを抑えられるのか？」

「なくにをビビッてんだ？お前らしくないぜ！」

「だってさ…見てみるよ！完全に自分を見失ってる…俺、怖いんだよ。なんだか嫌な予感がする…」

セオドアはまるで自分に言い聞かせるように弱気なレオを叱咤した。

「大丈夫だ…大丈夫、俺達がリンを信じなくてどうするんだよ！」

「そうだよね…何言ってるんだろ俺…」

リンの竜巻は辺りの森の木々を吹き飛ばしながらヤナ谷の辺りで消えていった。

リンは独り静かに立っていた。

ラシードも消えて無くなったのに、リンの背からは黒いモヤのようなものが立ち上り、何か化物の姿に変化しようとしている。

それを見たセオドアは「ウツ…」と言葉を詰まらせた。

「まずいことになった…いいかレオ、もしリンがヤバイ状態ならそれを止められるのは聖獣使いであるお前だけだ！もし…もしリンが人でなくなったら殺せ！」

「…！！」

固まっているレオにセオドアはもう一度言い放った。

「殺すんだ！！」

レオはひきつった顔で無理に笑おうとした。

「…ハ…ハハ…何？冗談でしょ…だってさっき俺に言ったよね？リンを信じろってさ」

セオドアは真剣な顔でもう一度「ああなっではもう手遅れだ…それしかない！」とレオの肩を揺すぶった。

「俺は見たことがあるんだ…精霊使いの暴走する様を！滅ぶぞ、国ごと滅ぶ！もし、どうにも止めようがなかったら腹をくくれ…いいな！」

リンは目の前の谷間にフワリと飛び降りた。

レオ達は青龍に乗り込みそれに続く。

「熱い！…マグマが噴き出してよ」

レオとセオドアはその灼熱地獄にゆっくりと降りていった。

ボコボコと沸き立つ熔岩を取り囲むように
ホロンの民達がしゃがんでいる。

その視線の先には巨神像、そして横に寝かされているテレサの姿があった。

「テレサだ！どうやって近付こう？」

巨神像の前では祈祷師が一心不乱に祈りを捧げている最中だ。

おもむろに二人の男が横たわるテレサの服を剥ぎ取っていった。
糸纏わぬテレサの裸身は真珠のように白く照り耀いている。

男達は一頭の羊を引き出してきて押さえつけ、その首を鉋でぶち斬った。

ダラダラと流れ落ちる赤黒い血をテレサの白い肌に塗り付けていき、
祈祷師が何か叫んで男達はテレサの体を高々と持ち上げた。

その様子を見たレオは大声で叫んだ。

「止めろ！その子は精霊使いじゃないんだ！」

「お前は誰じゃ？なぜ神聖な儀式の邪魔をする？」

祈祷師は凄い形相で二人を睨み付けた。

「俺達はその子の仲間だ！お願いだ、テレサを返してくれ…でないと大変なことに…」

祈祷師はヒヒヒと笑い「バカめ、そんな嘘はお見通しだ！このバジヤ様の目は誤魔化せん。サア何をしておる、早くサラマンダー様に生け贄を捧げるのじゃ！」

その時、リンの背に巨大な黒い翼が出現し頭からは二本の不気味な角が生えてきた。

その瞳は赤く血走り、口からは涎の糸がタラタラとのびていた。

「リ：リン！ダメだ、ダメだよ！」

レオが止める間もなくリンはホロン達に襲いかかり、次々と血祭りにあげていった。

人間の内臓を食い破りズルズルと腸を引き出してむしやぶる様は見るもおぞましい悪魔そのものであった。

人で無しの国？

巨神像の中でその一部始終を眺めていた男はチツと舌打ちしてボソリと呟いた。

「もう少しで上手くいくところだったのに…とんだ邪魔が入ったな。こうなったらドサクサに紛れて女を頂きに行くか」

その男は巨神像の中からスツと抜け出して横たわるテレサを担ぎ上げた。

「ん…ん…ここは？あなたは…誰？」

男は慌てて巨神像の中に隠れた。

「な、なんだ気が付いたのか？バジャの奴め葉をけちりやがったな」

テレサはまだブーツとした頭でフラフラと立ち上がった。

「私…私帰らなきゃ…みんな心配してるわ」

その男は覗き窓から外の地獄絵図をテレサに見せた。

「この中をどうやって帰るんだよ、え？」

テレサは目を見開いてその光景を見た。

「キャアア！！どうして？あれは…あれはリンなの？なんでこんなことに…」

男はフフンと嘲笑った。

「あいつ、精霊使いなんだな。バカな奴！暴走しやがって…」

「止めなきや…リンを止めなくちゃ！」

出て行こうとするテレサの手首を男はギュッと握って離さない。
もがくテレサを抱き締めてその唇を自分の唇でふさいだ。

「ん…や…止めて何するのよ！」

「あんたじゃ無理だ。アイツは今、理性を無くして人間じゃ無くなってる」

「じゃあどうしろって言うの！？ただ見てろとでも？」

「俺が行く」

「…え？」

「俺ならアイツを止められる」

「なんですって？あなたが？」

男はうなずいた。

「だが、ただじゃダメだ。俺はあんたを気にいった。俺に抱かれる覚悟があるか？それが条件だ」

テレサは絶句してその男を凝視した。

男はニヤリと不敵な笑みを浮かべ「サアどうする？」と聞いてきた。

「あんた…一体何者？」

「俺か？俺はアビゲイル、サラマンダーの主だ」

「あ…あんたも精霊使い？」

「そうさ、だがアイツみたいにちやちな精霊使いじゃない！それはこれから分かること…今からお前を抱く、奴を鎮めるのはそれからだ」

「どうして今なの！？そんなの後からでいいでしょ？早くリンを止めてよ！じゃないとみんな…みんな殺されちゃうわ！」

アビゲイルは小さくため息をついた。

「変身するには女が必要なんだよ！俺にはな…きつとアイツにも変身するキーパーソンがあるはずだ」

「キーパーソン？」

「ああ、それが分かればコントロール出来るようになる。俺みたい」

アビゲイルはテレサを抱き上げ、巨神像の中の階段を上がって行った。

人で無しの国？

テレサは階段をのぼりきったところでアビゲイルの腕から降り、巨神像の目のところから下の光景を覗いた。

悪魔と化したリンに青龍が巻き付いて必死で暴走を食い止めている。
「頑張って青龍！今、助けに行くわ！さあアビゲイル、私は逃げも隠れもしないわよ。あんたの好きにしたらいいわ！でも約束よ、絶対リンを助けてちょうだい」

「ああ、分かってる！アビゲイルは目を細めテレサの体を食い入るようにじっと眺めまわした。

テレサはその遠慮のない視線に思わず顔を赤らめ目をそらした。

「おまえ…」

「な…なによ…」

「歳…」

「えっ？」

「歳いくつだ？やけに貧弱な乳だな」

アビゲイルはおもむろにテレサの膨らみかけの乳房をむんずと掴んだ。

「イタッ！イタタタちよつと、何すんの！？」

「俺、ずっとこんな穴蔵暮らしだろ？すっかり視力が衰えちまって良く見えねえんだ、すまないな。しかし…お前、まだ子供じゃん。さすがの俺もこりゃあ無理だな」

「無理？無理って…約束したじゃないの！今さらそれはないわよ！」

アビゲイルは頭をポリポリ搔いて「そう言われても」と困りきった顔で裸で仁王立ちになっているテレサをチロリと横目で見た。

「俺…興奮しないと変身出来ないんだよね」

「ハア？」

「もう！仕方ないわね」

テレサは強引にアビゲイルにキスを浴びせかけた。

「私が大人になったところでも想像してなんとかしてよ！」

「ん…ムムム…やってみるかクソー！」

アビゲイルはテレサを抱きしめて小さな舌先を深く絡めとった。

「ん…ああ…」

テレサは痺れるような感覚に思わず声を漏らした。

すると、アビゲイルの背中からリンと同じように黒い翼がシュルシュルと生えてきた。

その体は緑がかった鱗に覆われ、見るもおぞましい怪物に見えた。

巨神像はその衝撃でひび割れて破片が地面に降り注いでいる。

アビゲイルはバサバサと翼を羽ばたかせ、牙をむいてリンめがけて飛んでいった。

すでに青龍は血まみれでのたうち回っており、そのすぐ横では蒼白な顔のレオとセオドアが剣を構えて今にも飛びかかろうとしていた。

「ん？なんだこの風は！」

レオは上空に異変を感じてサッとふり仰いだ。

「うわっ！セオドアあれを見ろ。また凄いのが来たぜ！」

アビゲイルは鋭い爪をリンの翼に突き刺して上からのし掛かっていた。

「ウギヤアア！ガウウウ」

リンは必死でもがくが、びくともしない。

アビゲイルはリンの首元にガブリとかぶり付いた。

ポタリポタリと鋭い牙から血が滴り落ちている。

リンは出血多量で意識を失ったのかグッタリと脱力していた。

「ダメよ！もう止めて！リンが死んじゃうわ！」

なんとか巨神像から降りてきたテレサが涙ながらに訴えた。

アビゲイルがその牙を放すとリンはみるみるうちに元の姿に戻っていった。

テレサは駆け寄って、血まみれのリンを抱き上げた。

「リン、リン！しっかりして…死んじゃダメよ！」

レオとセオドアも心配そうにリンの様子を伺っている。

そこに、やはり元の姿に戻ったアビゲイルが近づいてきた。

「それくらいで死にゃあしないよ。人間じゃあるまいし…」

「…人間じゃない？人間じゃないだって！？それはどういうことだ！」

セオドアはアビゲイルの襟元をギュッと掴んだ。

人で無しの国？

アビゲイルも変身を解いたばかりで力が入らず、セオドアに軽々と持ち上げられてしまった。

「く…苦しい、離してくれよ！これが恩人に対する態度かね？」
セオドアはギロリとアビゲイルを睨んだまま、ゆっくりとその手を離してやった。

「ケホツ…あんたら、精霊使いのこと何にも知らないんだな。そんなにコイツもよく今まで無事でいれたもんだ」

テレサはセオドアのマントを体に巻き付けると、アビゲイルのもとにじり寄った。

「精霊使いのこと、詳しく教えて！このままじゃリンが救われないわ。自分が人殺しだって知ったらきつと彼は耐えられない。お願いよ！」

「そうだな…教えてやらないこともないけど一つ条件がある」

「何が望み？言って頂戴！」

「エへへ…俺をお前達の仲間に入れてくれ！」

「なんだと？テメエふざけやがって！誰がお前なんかっ！」

ぶちギレるレオを横目にアビゲイルはフフンと鼻を鳴らした。

「なんで怒ってんの？あんた達にはありがたい申し出だろ？コイツの暴走を止められるのは俺だけだ。またいつ暴れ出すかもしれないぜ？いいのかよ！」

レオはグツと言葉に詰まった。

「ほら、どうするよ？」

「…いいわ！確かに今リンを止められるのはアンタだけだもの。そうでしょ？」

テレサはレオとセオドアに目で訴えた。

「そうだな…コイツも精霊使いらしいし、旅の間には役に立つ時もあるだろ」

レオはセオドアの言葉にも返事を返さずぶすくれたままだ。

「サア、こちらは条件をのんだんだから今度はアンタが話す番よ」

アビゲイルはあぐらを組んでコホンと一つ咳払いした。

「お前ら、コイツが変身した姿初めて見たんだよな？」

3人が一斉にうなづく。

「これは俺の憶測に過ぎないんだけど……たぶんコイツは大人になってきたんだよ。つまり成長期っていうのかな？これはなにも体に限ったことじゃないよ。精霊使いとしての成長期に入ったってことじゃないかと思うんだ。俺も初めて変身したのコイツくらいの歳だったし……」

テレサはうなずいた。

「なるほどね……じゃあ精霊使いが人間じゃないっていうのはどういうこと？」

「どうもこうもねえだろ？さっきの俺達の姿、人間に見えたか？俺達は人間の皮を被ったバケモンさ……」

そう話すアビゲイルの表情になんともいえない悲哀を感じとり、テレサはそれ以上にも言えなくなってしまった。

きつと辛い想いをしてきたのね……
可哀想な人達……

精霊使いとして人に敬われ偉大な力を授かりながらもこうして寂しさに打ち震えている彼らの姿はまるで捨てられた子犬のようであった。

「アンタは化物じゃないわ。私達の仲間よ、そうでしょう？」

アビゲイルの目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

人で無しの国？

「ウツ……ゴホゴホッ」

リンは意識を取り戻すと辺りに充満する血の臭いにむせこんだ。

「リン！気が付いたのね良かったわ」

テレサはリンの血にまみれた手をとった。

「テレサ……僕……ここは？血の臭いがする。一体何があったの？」

「何も……覚えてないの？」

リンはクラクラする頭を抱えてうなずいた。

「ヘッ！これだけのことをしといてそれはないぜ。あのな、お前は……」

アビゲイルがそう言いかけたのを慌ててレオが遮った。

「お前はテレサが拐われたのを知って谷に向かったんだ。そして足

を滑らせたらしい…ずいぶん搜したんだぜ俺達。とにかく無事で良かったよ！このアビゲイルがお前を見つけて俺達に報せてくれたんだ。な？そうだよな？」

「あ？ああそうそう、そうなんだ。どこか傷めてないか？」

リンは立ち上がりうとして尻餅をついた。

「なんだかアチコチ痛いよ…体もなんだかフラフラして力が入らない…」

「大丈夫！明日になれば元に戻るさ。変身は体力使うからな」

セオドアはアビゲイルを思い切りどついた。

「イテテテ！何すんだよう！」

レオはすっかり小さくなって弱ってしまった青龍を腕に貼り付けた。

「お疲れさん…ゆっくり休めよ」

青龍は「ミュ〜…」と小さく鳴いて目を閉じた。

レオはセオドアに耳打ちした。

「早くここから引き揚げよう。村人たちがこのまま黙っているとも思えない…この国から出るんだ！」

レオは玄武を呼び出し、その背にみんなを誘導した。

セオドアにおぶわれて玄武に乗ったリンは先ほどの所業が嘘のように無垢な少年に戻っている。

このことは絶対リンに知られないようにしなくちゃ！

テレサはリンの頭を膝に乗せ、優しく撫でてやりながら決心を固めた。

村の上空から下の光景を眺めると、怒り狂った村人達が武器を手にとり谷に向かおうとしているところであった。

「船は無事かしら？」

「大丈夫さ、あの船はリンデンハイムのマークが入っているからな。滅多なことじゃあ手出ししてこないだろ」

セオドアの言う通り、船はちゃんと来たときのまま海の上に浮かんでいる。

「よかった！玄武、なんとか上手く船の上に着地しろ」

ところが玄武はみるみるうちに小さくなって、リン達はザブンと海の中に落ちてしまった。

「バカ！玄武のやつ…みんな、大丈夫か？」

「大丈夫なわけないでしょ！早く助けてよ。リンが沈んじゃう！」

アビゲイルはスイスイ泳いでいくと、あっというまにリンを抱えて船まで泳いで行った。

「なにやってんだお前達！サッサと来いよ。ほら、追手が来たぜ！」

アビゲイルの声でテレサも慌てて船まで泳いだ。

「よし、碇をあげるぞ！」

岸から弓矢がビュンビュン飛んでくる。

たまらずセオドアが叫んだ。

「リン！風を起こしてくれ、頼む！」

リンはなんとか力を振り絞りラシードを召喚した。

「ラシード、この船を沖に流してくれ！」

「お安い御用！」

ラシードが翼を広げパサリと羽ばたいただけで船は猛烈な勢いで沖まで一気に流されていった。

「ヒュー！スゲェや。でもさ、何でこんなに砂が…」

アビゲイルが辟易しているのをテレサは笑って、「だってラシードは砂の聖霊ですもの」と教えてやった。

「へえー、なるほどね…俺は火でアイツは砂…ゲッ！それってもしかして俺の天敵じゃんか。俺が火を出しても村人のやつら、砂をか

けて消してたもんな。でもまあ今は仲間だし？気にすることもねえか」

「なくにブツブツ独り言いつてるんだ？」

「ああ、兄貴か。なんだか腹減ったな〜と思ってさ」

「食糧庫になんかあるだろ。そうだな：お前は今日から食事当番だ、分かったらサツサと支度しろ」

「エエ〜、マジですか？」

「お前が一番下っぱなんだから当然だろ？あっちが食糧庫だ、頼んだぞ！」

「チェ〜ッ！分かりましたよ。味は保証しませんからね」

アビゲイルは仕方なく食糧庫を開けた。

「どれどれ何があるかなあ〜っと。オッ旨そうなソーセージがあるじゃないですか。ん？なんだ、これ？」

アビゲイルがつかんだのは小さな耳であった。

「イタタ！あにすんだ放せ、放せよチクショウ！」

食糧庫から引きずり出されたのはザンバラ髪の汚ならしい痩せた子供であった。

アニータの夢？

呆氣にとられているアビゲイルをよそに、その子は沢山の食べ物に服につめこんでサッサと逃げ出してしまった。

「アッ待てこのヤロー！」

少年は、まるで猿のようにスルスルと船のマストに登っていった。しまった。

「やゝい、悔しかったらここまで来てみろゝアッカンベーっだ！」

「アイツ！」

「どうしたアビゲイル、メシはまだか？」

「あれ見て下さいよ！密航ですよ、密航！」

セオドアはアビゲイルの指差す方向を仰ぎ見た。

「まだ子供じゃないか。オゝイ危ないぞ、降りて来い！」

子供はズボン下ろし、お尻を突きだすとペンペン叩いてキャツキャとはしゃいでいる。

「どうします？」

「どうもこうも仕方なからう。次に上陸するまで置いてやるしかないな…」

「オーイ！聞いたか？海に投げ出したりしないから安心して降りて来い！」

子供はちよつと躊躇う様子をみせていたが、しばらくすると甲板に降りてきた。

船内で寝ているリンの側についていたテレサも騒ぎに気付いて近付いてきた。

「ちょっと、リンが寝てるのよ。あんまり騒がないで！あら？何よこの子。どうしたの？」

「どうやらさっきの国で乗ってきちゃったみたいなんだ」

テレサはため息をついて「あんた名前は？歳はいくつなの？」と、しゃがんでその小さな手をとった。

「アニータ、9歳…」

「アニータってそりゃ女の名前じゃないか？それじゃ…お前、女！？」

アニータはコクリとうなずいた。

アニータはボサボサの髪にまるでボロ雑巾のような服を着ている。ふだんテレサを見ている彼らにはとてもアニータが女の子とは思われなかった。

「あれ、みんな何やってるんだ？」

片手に地図を持ったレオが不審げにこちらに歩いてくる。

アニータは突然レオに飛びかかると、その地図をバツと奪いとった。

「なんだお前！それ返せよ！」

アニータはそれを広げると地図をじっと見つめ、ある島を指差した。

「ここ！ここに行きたい、連れて行って！」

みんなの視線は、その指の先に集まった。

「島ね…ここからずいぶん遠いみたいだけど…」

セオドアは渋い表情を浮かべウーンと唸った。

「ここは月の城があるハンブラ島じゃないか…ここに一体何の用だ？」

「月の城ですって？私が売られるはずだったところだわ！」

レオは驚いた顔でアニータを見た。

「ルイザ様に私を買って下さいってお願いするつもりです」

みんなはアニータの言葉に目を丸くした。

アニータの夢？

セオドアは呆れた顔でアニータのおでこを小突いた。

「お前：月の城がどんなところか分かって言ってるのか？」

「もちろん知ってるよ！お姫様の学校でしょ？」

「どうするよ？コイツ完全に勘違いしてるぜ」

テレサはアニータの汚れた身なりを見て大体の想像はついていた。

「今はそれよりお風呂が先よ。そんなんじゃお姫様の学校に入れないわよ！」

「お：おいテレサ…」

アニータの手を引っ張っていくテレサをセオドアは心配そうな表情で見ている。

「大丈夫よ：ここは女同士、私に任せて！」

テレサは怯えるアニータの服を剥ぎ取り、泡立てたシャボンをたっぷり体に擦り付けながら身の上話を始めた。

「私ね、本当は月の城に売られるはずだったのよ」

アニータは目を見開いた。

「生まれ故郷はここよりずっと北の寒い国でね。食べ物といえばペンギンの肉やオットセイの肉ばかりでさ：それでも家族3人楽しく暮らしてたわ。それがあある日、いつものように狩りに出掛けた父さんが何時になっても帰らないの。私と母さんは必死で父さんを捜

したわ。でもとうとう見つからなくて…小さな墓を二人で作ったの…」

言葉が途切れたテレサを心配してアニータは振り返った。

「お姉ちゃん…どうしたの？」

テレサは涙を隠そうと慌てて顔を洗った。

「なんでもないの！なんだか久しぶりに昔のことを思い出したから…」

「…お姉ちゃんのお母さんは？どうなったの？」

「私を奴隷商人に売って再婚したわ。狩りの上手な人でずっと美人の母さんに憧れてたんですって。きっと母さんを大事にしてくれるわ」

「お姉ちゃん…寂しくないの？」

「寂しくなんかいわよ。奴隷商人のロイはいい人だったし、今は仲間もいるしね！お互いにとってベストの選択だったんじゃないかしら」

アニータが無邪気に聞いてきた。

「お姉ちゃんはこれからどうするの？」

「…そうね。仲間といろんな国に旅するわ。彼らは仲間っていうよりもう家族なのよ。だからいつも一緒にいてお互いに助け合いながら生きていきたいの」

「ふうん…そっか。私はね、もう貧乏なんて真っ平なんだ！ルイザ様のところで頑張れば王様のお嫁さんにだってなれちゃうんだって！凄いでしょ？お姉ちゃん、私絶対王妃様になってみせる」

テレサはアニータを自分の方に向かせ、じっとその目を見つめた。

「アニータ、よく聞いて！それはごくごく一部の人達よ。ほとんどの女は男達の玩具にされて飽きればゴミみたいに捨てられる…生地獄だわ。そんなところに行くのは私は反対よ！」

アニータは言われた意味がわからないのかキョトンとした顔でテレサを見ていた。

「ゴメンねアニータ、子供のあなたには分からないかもしれないわね」

アニータはそんなテレサの肩をポンポン叩いた。

「お姉ちゃん、それぐらい私にだって分かってるよ。だって私の母さんは娼婦なんだからさ…」

「…えっ！」

驚くテレサを尻目にアニータはもう一度ハッキリと宣言した。

「私は誰にも負けない！絶対にお妃様になるんだ！」

その目には確固たる決意が宿っており、テレサをも怯ませてしまった。

悪夢

目を覚ましていたリンはそんな二人のやりとりに耳をすませていた。仲間というより家族…か。

リンの心はテレサのその一言でほっこりと温まった。

壁の向こうからテレサの声が聞こえた。

「これ、男物で悪いけど…」

「ありがとうお姉ちゃん」

あらためて見ると、アニータは浅黒い肌にアメジストのような瞳を煌めかせ、野性動物のようなしなやかな肢体を持つ魅力的な少女であった。

「アニータ…あなたとても魅力的よ。きっとルイザ様の目にとまるわね」

「ウッフ頑張るわ！」

テレサはすっかり綺麗になったアニータをレオ達の前に連れてきた。

「オオッ！これがさっきの汚いガキか？」

「どう！美人でしょ？　これなら玉の輿も狙えるかもね」

セオドアは眉をひそませた。

「やっぱり月の城に行くのか？」

テレサはため息をついて「仕方ないわ：決意は固いみたいだから」とアニータの髪を撫でた。

「分かった、じゃあ月の城に向かって出発だ！」

レオはセオドアの側について地図を広げた。テレサはアニータに好きに遊んでいていいからと許可を出してリンの看病に戻ろうとしたが、アニータはしっかりとテレサのスカートの裾をつかんで放さない。

「私は病人の看病があるんだけど…一緒に来る？」

アニータは嬉しそうにニツコリした。

「眠ってるから静かにしてなくちゃダメよ？」

アニータはコクコクうなずいた。

船の中は穏やかな波のおかげで、まるで揺りかごの中にいるように気持ちいい。

リンはいつの間にか、またウトウトと夢の中に落ちていた。

リンは一面の花畑の中でゆっくり流れる白い雲を見ていた。

「リンー、ご飯よ！」

あっ！母さんが呼んでる。

もう行かなくちゃ：

リンは立ち上がろうとしたが、体がまるで鎖で縛られているように全く動かない。

慌てるリンを幾つもの顔が覗き込んでいた。どの顔も、残酷な笑みを浮かべてもがいているリンを嘲笑っていた。

「この悪魔め！人のふりをしていてもムダだぞ！体に染み込んだ血の匂いは消せやしない。お前は呪われた存在なのだ！死ね！死ね！死ね！」

いつの間にか花畑は血の海になり、地面から幾つもの手が延びてきてリンの体を押さえつけた。

「放せ！僕は何もしていない！」

「ケケケケケッ！何もしていない？バカを言うな：お前は人殺しだ！人殺しー！ケーッケッケッケ」

テレサはうなされるリンの額を冷たいタオルで拭ってやっていた。

「お兄ちゃん：大丈夫かなあ？」

アニータは心配そうにたずねた。

「大丈夫よ：お兄ちゃんはちょっと疲れているだけだから」

「…ふうん」

アニータはリンの額に手を当てた。

「ヒッ…」

アニータはビクッと震えて手を放した。

「どうしたの？」

恐怖に凍り付いたアニータの顔をテレサは不思議そうに見つめた。

自分を信じて

アニータは恐怖で歯をカチカチ鳴らし、テレサの後ろに逃げこんだ。

「アニータ：どうしたの？」

「この人…怖い…」

テレサはそつとアニータを引き寄せその手を握った。

「アニータ、リンは偉大な精霊使いなのよ。こんな体になったのは精霊と戦ったせいなの。だから何も怖がることなんてないのよ。リンは人一倍優しいひとよ…私はそう思ってる」

テレサの揺るぎない態度がアニータの不安を少し和らげたようだ。アニータの小さな手がリンの額にもう一度触れた。

リンはボーッとした意識の中で、その柔らかな感触にハッとした。

「…ン…誰？…テレサかい？」

アニータはビクッと手を引っ込めた。

「リン！目が覚めたのね？彼女はアニータよ。私達はいま月の城に向かっているところなの。彼女、ルイザの元で舞いや踊りを習いたいんですって」

リンはテレサの手を借りながらゆっくりと起き上がった。

「アニータ：よろしくね。僕…すっかりみんなに迷惑かけちゃって

：君にも挨拶するのが遅くなっちゃったね。ごめんよ」

アニータは首をブンブン振ってテレサの後ろに隠れてしまった。

「アラアラ、アニータはリンの前だとまるで別人ね！すっかり照れ屋さんになっちゃって」

アニータはテレサのスカートの後ろからリンを覗き見ると、アツカンバーをして部屋から逃げて行ってしまった。

「まあ、アニータ！待ちなさい！」

リンは力無く微笑むと「どうやら僕：嫌われちゃったみたいだね」と呟いた。

「ううん、そんなことないわよ！精霊使いに初めて会ってちよっと驚いてるだけだと思っわ」

テレサはリンにそう言いながらもさつき見せたアニータの恐怖にひきつった顔が頭から離れなかった。

あの子：何か勘づいたのかしら？

そんな：まさかね！

あの事を知るのは私達だけだもの。当の本人のリンだって知らない事よ。

テレサは気をとりなおしてリンに薬を飲ませた。

慌てて船室から出てきたアニータの頭にアビゲイルはオレンジをパ

コーンとぶつけた。

「痛ったー！！女の子に何すんだ！」

アビゲイルはケタケタ笑い声をあげてまたオレンジを投げつけてきた。

アニータは今度はそれをしっかり受け止めると、しゃがみこんでオレンジにかぶりついた。

「オーオーまるで子猿だな！オメエが舞姫なんてチャンチャラ可笑しいぜ」

アニータは汁だらけの口をニツと歪ませてアビゲイルをせせら笑った。

「フン！笑ってられるのも今のうちさ。アタイはいまに世界一の舞姫になって王子様と結婚するんだ！そんなときはお前なんか私の足下にひざまずかせてやるんだからねっだ！」

「ハァゝ感心するね。その自信は一体どこから湧いてくるんだい？」

アニータは澄んだ青空を仰ぎ見た。

風が優しく頬を撫でていく。

「母さんが言ってたんだ。信じれば必ず叶うって…だからアタイ、自分を信じる事にしたんだ」

アニータの瞳は一点の曇りもなく、夢と希望に光り輝いていた。

「そうか…羨ましい限りだよ。俺は一度だって自分を信じたことな

んかねえや…いつだって俺を裏切るのは俺自身なんだからよ!」

アビゲイルは持っていたオレンジを握り潰した。

アニータはまるで血のようにポタポタ滴る雫を呆然と見ていた。

星の船

アニータはアビゲイルの隣にチョココンと座って潰れたオレンジを取り返した。

「食べ物を粗末にしたらバチがあたるぞ！」

アニータはそのオレンジにもかぶりつき、ニツと笑顔を投げつけた。

「あんたも精霊使い？」

アビゲイルはギョツとしてアニータの汁にまみれた顔を振り返った。

「な…なんだよ突然！まあそうだけど…なんで分かった？」

「さっきのリンとかいう兄ちゃんとおんなじ匂いがしたからさ」

「匂い？」

「うん、二人とも血の臭いがした。精霊使って偉いんでしょ？それなのに何で人を殺すの？」

アビゲイルはアニータの真っ直ぐな視線にたじろいだ。

「…俺たちだって好きでこんなことしてるわけじゃねえや…どうにもなんねえんだよ！俺の体の中には化物が棲んでるんだ。そいつが時々暴れ出す…そうになったら自分で自分を抑えるなんて無理なんだ」

アニータはアビゲイルの苦悶に満ちた顔をのぞきこんでニコツと笑った。

「リン兄ちゃんがいるじゃん！よかったね、二人が出逢えて。きつと兄ちゃんの中の化物を退治してくれるよ。だって凄い、すごーい精霊使いなんでしょ？」

アビゲイルはクスリと笑い返して、アニータの髪をもみくちやにした。

「ああ、そうだな！アイツの中の化物もきつと俺が退治してやる」
船室のドアの影からそつとその様子をのぞいていたテレサは小さいため息を漏らした。

「…やっぱりあの子にはバレてたのね。何か不思議な力を持っているようだわ。大丈夫かしら？なんだか不安だわ…」

「どうしたの、テレサ？」

「ううん…なんでもないの。私、ちょっと上に行ってくるわ。リンはゆっくり休んでいてね。あと3日もすれば月の城の海域に入るわ。そしたらきつと忙しくなると思うから」

「うん、そうするよ…ありがとう。君も僕に付きっきりで疲れたらもう大丈夫だから君も休んで」

テレサは呼鈴をリンに手渡し、用があったら鳴らすと言って甲板に上がった。

船の後ろにある樽の上に座り、青く広がる海原を見渡した。

「ずいぶん遠くまで来たのね私達…」

「ああそうだな…」

声のするほうに目をやると、テレサの足元にレオが地図を広げてしゃがみ込んでいた。

「びっくりした〜！そこにいたのレオ」

「あの子猿がうるさくてさ。ここに避難してたんだよ。リンの具合は？」

「ずいぶん良くなったわ。もう大丈夫よ」

レオはテレサの隣に腰をおろした。

「…そうか。まずは一安心だな。だが、油断は出来ないぜ！アビゲイルが言った通りならリンは今、成長途中で不安定な状態だ。しばらくはアイツを危険な状況に晒したくない」

「そうね…しばらく月の城で滞在しましょうか？アニータのこともちゃんと見届けたいものね。実際その目で見たら気が変わるかもしれないし…」

レオは立ち上がって望遠鏡を覗いた。

「どうしたの？」

「今…なにか光ったような…船だ！ずっと向こうの波間に船が見える！」

レオはテレサに望遠鏡を渡した。

「本当だわ。こっちに向かって来てるみたいよ！」

「船の帆に星のマークがついてる」

「星？月の間違いじゃないか？そろそろ月の城の海域だから歌劇団の船だと思うんだけど…ちょっと望遠鏡貸して！」

レオは波間から見え隠れする船を目を細め、じっと観察した。

「…確かに星だ！…甲板に人影が見える。テレサ、セオドアを連れてきてくれ！」

「分かったわ！」

テレサはスカートの裾をたくしあげて走り出した。

星の船？

船の舵をとっていたセオドアは、息を切らしながら駆けてきたテレサの方にのんびりした顔を向けた。

「なんだいお姫様、そんなに慌ててどうしたんだい？」

テレサはセオドアの顔を見るなり頬を赤らめスカートの裾を下ろした。

「セオドア：ハア、ハア大変よ！あっちの波間に船が見えるの！」

「ん？船ねえ：どれどれ」

セオドアの望遠鏡の先には小さな船の上で手を振る派手な衣装の女達がハッキリと見えていた。

「フム：あれは華舟だな。しかし：おかしいな、ここらへんの海域は月の城のテリトリーのはずなんだが、あの旗印は月じゃなくて星だぞ」

テレサが怪訝な顔でセオドアの袖を掴んだ。

「私にも見せて」

セオドアはテレサに望遠鏡を渡すと、アゴに手をやりボソリと呟いた。

「しばらく御無沙汰だし：月の城に入る前に情報も欲しいいな」

テレサは望遠鏡を外し、不機嫌な顔でセオドアを睨んだ。

「今なんて？」

「えっ？ほら…あれだよ。なんで月のテリトリーにいるのか聞いておいた方がいいんじゃないかと…アニータにも現実を見せておいた方がいいんじゃないかなあ」

テレサは不信感いっぱいであつたが、確かにセオドアの言い分にも一理あつたので渋々うなずいた。

「…仕方ないわ。あの船を呼び寄せましょう」

セオドアは船のマストの先にテレサの赤いスカーフを巻き付けて手を振った。

すると船の女達は嬉しそうにキャッキヤとはしゃぎながら自分たちの船を近づけてきた。

「なんだ？あの船！」

それに気付いたレオとアニータも駆けつけてきた。

初めてみる華舟の派手な装飾にアニータの目は釘付けになった。

今まで見たこともないような花や蝶をあしらった豪華な衣装を纏った美しい女達に皆圧倒され、思わずため息が漏れる。

「みんなお姫様みたいに綺麗！ああ、なんて素敵なの」

レオはそんなアニータを心配そうに見ていた。

まったく…見せかけのきらびやかさにすっかりのぼせあがってら。困ったもんだぜ

レオの心配をよそに、船の奥から女将らしい恰幅の良い年輩の女が、孔雀の扇子を優雅にそよがせ姿を現した。

「お久しぶりでございますセオドア様。お元気そうでなによりです」

「アンジェラ、お前も元気そうじゃないか！でも少し老けたかな？」

アンジェラはホホホと笑い、セオドアを軽く睨んだ。

「まあ！相変わらずの憎まれ口、せっかく久しぶりの会瀬ですのに」

テレサはその艶やかな流し目にムツとしながらも表面上にこやかに話しかけた。

「まあ！お二人共お知り合いなのね？これも何かの縁ですもの、今日はそちらの舟で楽しんでいらっしやいな」

欄干に並ぶ女達はしきりとセオドアに投げキスしたり、手招きしながら自分を指名させようと躍起になっている。

「ナスターシャは？」

セオドアの問いに意味深な眼差しで、「奥であなた様を待っていますよ。あの子：ずっとあなたのお出でを心待ちにしておりました」と答え、舟の方に手招きした。

「じゃあ今晩は帰らないからよろしくな！」セオドアは満面の笑みを浮かべながらそう言うのと、女達に絡まれながら船室へと消えて行った。

「オイ、いいのかよ？」

今にも泣き出しそうなテレサの顔をなるべく見ないように、レオはそっぽを向いて投げやりな態度でたずねた。

「…知らないわよあんなヤツ。大っキライ！レオも行ったらいいでしょ？男なんて不潔よ！」

レオは途方にくれ、地平線に沈んでいく太陽をじっと眺めていた。

星の船？

その日の夕食は久しぶりにリンも起きてきてみんなと一緒に食事をとった。

テレサは落ちつかない様子でセオドアの椅子をチラチラと見ながらパンを細かくちぎっている。

「お姉ちゃん、なにやってるの？それじゃあまるでお魚のエサだわ。いらないなら私にちょうだい！」

「うん…なんだか食欲無くて。どうぞ…」

アニータはテレサのちぎったパンをあっという間にたいらげた。

アビゲイルは呆れ顔でアニータのパンで膨れた頬をつついた。

「アゝアゝ女らしさのかけらもないね！それじゃあルイザの前に出る前に試験で落っこちるぞ」

「えっ！？し、試験？そんなのあるの？」

「あったりまえだろゝ！月の城はその道じゃあ一流中の一流だぜ。それこそ月の城に入りたい女は星の数ほどいるんだ。ルイザだってそんなの全員面接できっこない…きつとルイザに会えるのは最終審査に残った女だけだぜ」

「そ…そんなあ…」

一気にテンションの下がったアニータにレオが追い討ちをかけた。

「そういえば俺も月の城の噂聞いたことあるよ。しかも相当ヤバイ噂！歌に舞い、話術や教養とにかく一国の王様や大臣をメロメロにさせるくらいの魅力がなくちゃ最終試験には残れない。なぜなら！実のところ月の城はスパイ養成所だっていうんだ！」

「オイオイ、そりゃあ本当かよ？だとしたらルイザってヤツは相当なくわせもんだぜ！」

リンは眉をひそませた。

「それは本当なの？レオ」

「アハ、実のところ自信はないな。シュバイツァー家で厄介になつてた時に侍女達が話してるのを聞いたんだ。今まですっかりそんなこと忘れてたし……」

その時、突然テレサが椅子から立ち上がった。

驚いたリンは思わずスプーンを取り落とし、カシャーンという金属音が皆の耳をつんざいた。

「真相を確かめましょう！もし、それが本当ならとてもアニータを預けるなんて出来ないわ！」

レオはリンのスプーンを拾ってやりながらテレサの興奮した目を見てヤレヤレやっとテレサらしくなった、とホッとため息をついた。

「じゃあお姉ちゃん、私達華舟に行けるのね！」

「ええそうよ、これからみんなで行ってみましょう」

「キャア！嬉しい！」

アニータはピョンピョン飛び上がって喜んでいる。

リンは穏やかに微笑んで、「じゃあ僕は留守番しているよ。後でどうだったか聞かせてね。アツそれから：くれぐれも失礼のないようにね！」とみんなを送り出した。

華舟はリン達の船に横付けされており、ひとまたぎであちら側に行くことができた。

水面に、華舟に吊るされた提灯の光が揺めき幻想的な雰囲気醸し出している。

仄かな香の薫りが潮風に乗ってテレサの鼻をくすぐった。

ふいにセオドアの顔が浮かんで眉間にシワを寄せた。

「ナスターシャって誰なのよ…ああ、もう！イライラする」

そんなテレサの気持ちも知らず、アニータは目をキラキラさせて入口の豪華な蓮の刺繍の幕をそつとめくり、中を覗き込んだ。

星の船？

アンジェラは幕からのぞく小さな手を目ざとく見つけて声をかけた。

「あら、いらっしやいお嬢ちゃん。怖がらないでこっちにいらっしやいな」

小さな手はビクッと一瞬動きを止め、慌てたように引っ込んでしまった。

アンジェラは苦笑しながら幕をめくりあげ、アニータ一行を大歓迎で華舟に招き入れた。

レオは女達の焚き染めた香にむせながらもその柔らかい真っ白い肌に目をチカチカさせている。

アビゲイルはそんな女達にも怯む様子はなく、慣れた様子で女達がなすがままに酒を注がれてご満悦の様子だ。

アニータはアンジェラの横で女達が舞う様子を食い入るように見つめていた。

「お嬢ちゃん、あんたも踊ってみるかい？」

「えっ！？ いいんですか？」

「ああ、いいとも！ 最初あんたを見た時から気になってたんだよ。あんた…月の城に行く気だね？」

「ど、どうして分かったんですか？」

「私だって元は月の城の舞姫だもの…それぐらいは分かるわよ。でもね、あそこはアンタが思ってるほど甘い所じゃないわよ。よほど

見込みがなけりやあ城に入ることもしないさ。だから私が見てやるよアンタの適性をね！どうだい、やってみるかい？」

アンジェラの目が細く光った。

「…やります！やらせてください！」

アンジェラはパンパンと手を叩き、踊り子を呼んだ。

「ルビー！ちょっと来てちょうだい。この子が踊るから衣装を着せてやって」

ルビーは優しくアニータの手をとると、ニッコリ笑って「おいで！可愛くしてあげる」と嬉しそうに奥の部屋に連れていった。

レオはブドウ酒ですっかり酔ってしまい、へべれけになりながらアビゲイルのところに這っていった。

「ウィツ！ヒック…ア…アビゲイル…テレサは？テレサはどこ行った？」

アビゲイルはニヤニヤしながらレオの頭をポカリと叩いた。

「お前はそんなこと気にしないでいいんだよ！いいから大人しくおねんねしてな」

「あ…あんだとう！ウィツ…ズゴツ…スピー…スピー…」

「アラアラ、カワイイ！」

女達は眠りこけているレオにキスを浴びせ、毛布をかけてやった。
アビゲイルはアンジェラの方に向き直り、ブドウ酒を一気に飲み干す。「ナスターシャってセオドラのこれ？」と小指を立てた。

アンジェラは意味深に微笑み、「さてね…それはセオドラ様本人にお聞きしてみないと」とはぐらかした。

「でもさ、そのナスターシャさんってセオドラ兄貴が来るの知ってたみたいじゃない？ なんで？」

「ナスターシャには未来が見えるんですよ。実はセオドラ様の舟が来るのを3日前からお待ち申しておりました」

「マ…マジで!？」

「ええ、ナスターシャは昔セオドラ様に命を救って頂いたんです。ナスターシャは私にこう申しておりました。今度は私がセオドラ様をお守りする番だ…と」

アビゲイルはゴクリと唾を飲みこんだ。

女の魅力

太鼓が派手に打ち鳴らされ皆の視線が舞台に向けられる中、アビゲイルはアンジェラの言葉の意味を考えていた。

セオドアを助ける…と、いうことは兄貴に何か災いが降りかかるってことかよ？

「兄貴と俺達は一心同体だ！こりゃあほっとくわけにはいかねえ」立ち上がろうとするアビゲイルを女達が押し留めた。

「兄さんどこ行くのさ？ほらあれをごらんよ。あの子中々やるじゃないか」

舞台の上では髪飾りの鈴をシャラシャラ鳴らしながら軽快に踊るアニータの姿があった。

髪を結び上げ、エキゾチックな民族衣装を纏い頬を赤らめて舞台上を元氣いっぱい跳ね回る姿にアビゲイルは思わず拍手した。

「まるで水を得た魚だね。まだ色気はないけどあと数年もしたらきっと男達をひざまずかせるようになるだろうよ」

アンジェラの太鼓判を貰ってアニータは顔を綻ばせた。

「じつは、いつも母さんの後ろでコッソリ踊ってたんです」

「ふうん…そうかい。素人にしちゃ出来だよ。でも勘違いしないでくれ私はあんたの踊りを誉めたわけじゃないんだから」

アニータの顔がみるみる曇っていった。

「…それはどういことですか？」

アンジェラは厳しい顔でアニータを見据えた。

「たしかにあんたの踊りは見る者を楽しく陽気な気分にしてくれる。だが品がないんだよあれは舞姫じゃないよ、村の踊り子さ！」

アニータはあまりの言われように齒をくいしばってアンジェラを睨んだ。

「間違っちゃ困る！あんたが相手にするのは只の男じゃない、王様や貴族なんだ。そういう男達の周りにはただ美しい女や踊りが上手い女なんて掃いて捨てるほどいるんだよ」

「じゃあ…じゃあ私にどうしろっていうんです？誰にも負けないくらい優雅に踊れるようになればいいんですか？」

アンジェラはチツチツと口を鳴らした。

「ちつとも分かってないね。仕方ない、じゃあ教えてやるよ。知性さ！」

「…ちせい？」

「そう、知性！誰にも負けない知識だよ。女はね賢くなけりゃダメなんだ！」

アニータはどうもピンとこなくて首を傾げた。

アンジェラはその様子にため息をついた。

「あんたは中々みどころあるよ。一度見ただけの踊りを完璧に踊ってみせた。バカじゃないってことが分かったからね。私が誉めたのはそこなんだ」

「…はあ…そうですか…で、私は一体どうすればいいんでしょう？」

アンジェラはニヤリと笑ってみせた。

「簡単なことさね。知識を詰め込めばいいのさ！」

そう言われてもどうすればいいのか分からないアニータはすっかり途方にくれてしまった。

「大丈夫さ、きっとナスターシャ様があんたを助けてくださるよ」

「ナスターシャさん…？」

「そうさ、きっとあんたの力になってくださる」

アニータはナスターシャがいるだろう奥の垂れ幕をじっと見つめた。

ナスターシャの過去

その垂れ幕の中ではセオドアがナスターシャと久々の再会を楽しんでいた。

「まさかここであんたと逢おうとはな…もうあれから5年か」

ナスターシャは微笑んだ。

「いいえ、6年になりますわ」

「もうそんなに経つのか…なんだかあっという間だったな」

「ええ、そうですわね…3日前にあなたが夢に出てきた時は本当に驚きましたわ」

「未来を見通す力は健在なようだな」

「ええ…でも以前ほどではありません。はっきりとした未来はせいぜい5日先程度。そのせいでギルバートに愛想をつかされてしまいました」

セオドアはその言葉で顔色が変わった。

「な…んだって？ペルメダン王が君を離縁したのか？」

ナスターシャは力無く微笑むと小さな声で「仕方ありませんわ」と、呟いた。

「私はあの方を恨んではおりませんよ。子供も産めないこんな身体
の私を一度でも妃に迎えて下さったんですもの：」

セオドアは納得いかなかった。

ギルバートがそんな酷い仕打ちをするなんて想像できない。

セオドアは王子の頃から何度も彼と面識があった。

もの静かで穏やかな、王というよりは学者と呼んだほうがしっくり
くる真面目で律儀な男であった。

「：なんでルイザの元に帰らなかった？」

「私、もう誰にもお仕えしたくないのです。どうせ何の役にも立て
ない女：このまま静かに暮らしとうございます」

ナスターシャは元々月の城にいたのだ。生まれつき脚が萎え、歩く
事が出来ず親が捨てようとしていたのをルイザに仕えるアンジェラ
が貰い受けたのだった。

アンジェラはナスターシャがもの心がつき、言葉を話すようになる
とこの子に不思議な能力が備わっていることに気がついた。

ある日のこと、アンジェラがいつものように月の城に出かけようと
するとまだ幼いナスターシャが必死でスカートにしがみついていた。

「ママ、行かないで！今日はお城に行ってはダメよ！行ったらママ
死んじゃうわ！」

アンジェラがどんなになだめても、ナスターシャは行かないで！と
泣き叫ぶばかりだ。

アンジェラはどうとう諦めてその日はお城に出仕しなかった。

次の日、休んだお詫びをルイザに言いに行つてアンジェラは腰を抜かさんばかりに驚いた。

「アンジェラ、あなたはとても運が良いようね。昨日の毒味番はあなただったでしょう？」

「…は、はい…そうですがまさか？」

「そう、そのまさかよ。ミランダが死んだわ、多分ルートリツヒが仕掛けたのよ。実はマチルダをご所望だったのだけれど断つたのよ…彼はダズル教の信者だわ。あの宗教は女が子供を産めなくなる歳になると山の奥深くにある池に突き落とすそうよ。そんな邪教、私は赦さない！」

ルイザは唇を紫色になるまで噛みしめた。

アンジェラはハラハラと涙を溢した。

「私の代わりにミランダが…」

ルイザは優しくアンジェラの背を撫でた。

「悪いのは貴女じゃないわ。ミランダは運が悪かったのよ。そして貴女は運が良かった。そういうことなのよ」

アンジェラはルイザに昨日の出来事をすべて話した。

「そう、あなたを助けたのはその娘のお陰…という訳ね」

「はい、ナスターシャがいなければ私は今頃死んでいたでしょう」
ルイザの目は鋭く光った。

「アンジェラ、その娘に会わせてちょうだい！もしかしたらその子
…神からの御使いかもしれないよ」

「は？はあ…」

ナスターシャはその能力を認められ、ルイザから超一流の貴婦人に
仕立て上げられたのだった。

セオドアはアンジェラから聞かされた昔話を思い出して深いため息
をついた。

ナスターシャをギルバートに引き合わせたのはセオドアなのだ。

きつと何か訳があるに違いない…ギルバートはそんな奴じゃないは
ずだ！

セオドアは腕組みしてどうしたら良いものか思いあぐねていた。

未来を見通す力

部屋の外でずっと二人の会話に聞き耳を立てていたテレサは、ナスターシャが今は独身であるということにショックを受けていた。

「…なによ出戻り？それで今度はセオドアを誘惑しようっていうわけ。そんなの絶対阻止してやるから！」

思わず力んだ弾みにテレサはバランスを失い船の欄干を踏み外してしまった。

バシャーン！という派手な水音にセオドアも慌てて外に出てきた。

「テレサ！そんなところで何やってるんだ」

「見て分かるでしょ、溺れてるのよ！キャーッ助けてー！」

セオドアは呆れ顔で下手な演技をしているテレサに言い返した。

「お前、泳げるだろうが！早く上がって来いよ。風邪ひくぞ」

ニヤニヤしながら欄干から身を乗り出しているアビゲイルが視界に入り、さすがのテレサもあまりの決まり悪さに顔を赤くして船の梯子まで泳いできた。

セオドアはいじけ顔のテレサに手を差し伸べて引き上げてやった。

「なんで船から落ちたりした？さてはお前盗み聞きしてたな？」

テレサはブスツとしてセオドアに背中を向けた。

「なによ…二人ともいい感じじゃない。あのナスターシャって子、あんたとどんな関係なの？」

「どんな？そうだなあ…命の恩人…かな。昔あの人に助けられたことがあってその縁で彼女をペルメダン王ギルバートに紹介した。本当なら彼女は今頃王宮で沢山の召使いにかしずかれているはずだ…なのになんてか今はこの華舟にいる。その理由を聞こうとしたのさ」

「な…なんだ、そうだったの。てっきり私…」

「てっきり…なんだって？」

セオドアはテレサの頭をくしゃくしゃ撫でてやった。

「まったく…変に勘ぐるなよ。俺にはギルバートが彼女を裏切るわけないと思ってる。どうしてそんなことになったのか知りたいんだ。二人を引き合わせた俺にも責任あるからな」

テレサはセオドアに向き直り、唇を尖らせた。

「どうにかって一体どうするつもり？夫婦のことに首を突っ込むのもどうかと思うわよ」

「そう冷たくするなって。彼女も困ってるんだ」

「あのね！大体なんで彼女は私達の前に現れたの？自分が助けて欲しいから？違うでしょ、あなたナスターシャになんて言われたの？未来が分かるらしいじゃないの。もしかしてセオドアの身に何か起こるんじゃないの？」

セオドアはテレサの勢いにたじろんだ。

「だ〜か〜ら！それを聞く前にお前が邪魔したんだろ」

「あっそうでした」

テレサは神妙にうなずいた。

「とにかく！私も話を聞かせてもらおうわよ。いいわよね？」

セオドアは苦笑した。

「いいもなにも…ダメと言ったところで盗聴されるに決まってるからな」

二人は服を着替えるとセオドアは改めてテレサをナスターシャに紹介した。

「ナスターシャ、彼女と一緒に旅している仲間のテレサだ」

テレサは真剣な顔でナスターシャに挨拶した。

「紹介にあずかりましたテレサです。仲間達はみんな家族も同然なんです。ナスターシャさん、みんなにも話を聞かせてくださいお願いします」

テレサはセオドアとたとえ結ばれることは無くとも生死を共にする覚悟を決めていた。

もし…セオドアに何かあったら…

そう考えるだけでテレサは呼吸が止まりそうになる。

どうか…どうかセオドアに危険が及びませんように！

テレサの想いはナスターシャに痛いほど伝わってきた。

「わかりました。そういたしましょう…これはテレサさん、あなたにも関係があることなんです」

「私…ですか？」

キョトンとするテレサを前にナスターシャは瞼を閉じて意識を集中させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7224g/>

ソウルメイト

2010年10月25日17時17分発行